お秀も小林の一面を能く知つてゐた。然しそれは多く彼が藤井の叔父の前で出す一面丈に限られてゐた。さうして其一面は酒を呑んだ時抔とは、生れ變つたやうに打つて違つた穏やかな一面であつた。

「左右でないよ、中々」

「近頃そんなに人が悪くなつたの。あの人が」

お秀は矢張信じられないといふ顔付をした。

「だつて燐寸一本だつて、大きな家を燒かうと思へば、燒く事も出來るぢやないか」

「其代り火が移らなければそれ迄でせう、幾箱燐寸を抱え込んでゐたつて。嫂さんはあんな人に火を付けられるやうな女ぢやありませんよ。それとも……」

九十九

津田はお秀の口から出た下半句を聞いた時、わざと眼を動かさなかつた。餘所を向いた儘、凝と其後を待つてゐた。然し彼の聞かうとする其後は遂に出て來なかつた。お秀は彼の氣になりさ

うな事を半分云つたぎりで、すぐ句を改めてしまつた。

「何だつて兄さんは又今日に限つて、そんな詰らない事を心配してゐらつしやるの。何か特別な事情でもあるの」

津田は矢張元の所へ眼を付けてゐた。それは成可く妹に自分の心を氣取られないためであつた。眼の色を彼女に讀まれないためであつた。さうして現に其不自然な所作から來る影響を受けてゐた。彼は何となく臆病な感じがした。彼は漸くお秀の方を向いた。

「別に心配もしてゐないがね」

「たゞ氣になるの」

此調子で押して行くと彼はたゞお秀から冷笑かされるやうなものであつた。彼はすぐ口を閉ぢた。

同時に先刻から催ほしてゐた収縮感が又彼の局部に起つた。彼は二三度それを不愉快に經驗した後で、或は今度も規則正しく一定の時間中繰り返さなければならないのかといふ掛念に制せられた。

そんな事に氣の付かないお秀は、何故だか同じ問題を何時迄も放さなかつた。彼女は一旦緒口を失つた其問題を、すぐ別の形で彼の前に現はして來た。

「兄さんは一體嫂さんを何んな人だと思つてゐらつしやるの」

「何故改まつて今頃そんな質問を掛けるんだい。馬鹿らしい」

「そんなら可いわ、伺はないでも」

「然し何故訊くんだよ。其譯を話したら可いぢやないか」

「一寸必要があつたから伺つたんです」

「だから其必要をお云ひな」

「必要は兄さんのためよ」

津田は變な顏をした。お秀はすぐ後を云つた。

「だつて兄さんが餘まり小林さんの事を氣になさるからよ。何だか變ぢやありませんか」

「そりやお前にや解らない事なんだ」

「どうせ解らないから變なんでせうよ。ぢや一體小林さんが何んな事を何んな風に嫂さんに持

ち掛けるつて云ふの」

「持ち掛けるとも何とも云つてゐやしないぢやないか」

「持ち掛ける恐れがあるといふ意味です。云ひ直せば」

津田は答へなかつた。お秀は穴の開くやうに其顏を見た。

「丸で想像が付かないぢやありませんか。たとへばいくらあの人が人が惡くなつたにした所で、何も云ひやうがないでせう。一寸考へて見ても」

津田はまだ答へなかつた。お秀は何うしても津田の答へる所迄行かうとした。

「よしんば、あの人が何か云ふにした所で、嫂さんさへ取り合はなければそれ迄ぢやありませんか」

「そりや聽かないでも解つてるよ」

「だからあたしが伺ふんです。兄さんは一體嫂さんを何う思つてゐらつしやるかつて。兄さんは嫂さんを信用してゐらつしやるんですか、ゐらつしやらないんですか」

お秀は急に疊みかけて來た。津田には其意味が能く解らなかつた。然し其所に相手の拍子を拔

く必要があつたので、彼は判然した返事を避けて、わざと笑ひ出さなければならなかつた。
「大變な權幕だね。丸で詰問でも受けてゐる樣ぢやないか」
「胡麻化さないで、ちやんとした所を仰しやい」
「云へば何うするといふんだい」
「私はあなたの妹です」
「それが何うしたといふのかね」
「兄さんは淡泊でないから駄目よ」
津田は不思議さうに首を傾けた。
「何だか話が大變六づかしくなつて來たやうだが、お前少し癇違をしてゐるんぢやないかい。僕はそんな深い意味で小林の事を云ひ出したんでも何でもないよ。ただ彼奴は僕の留守にお延に會つて何をいふか分らない困つた男だといふ丈なんだよ」
「たゞそれ丈なの」
「うんそれ丈だ」

お秀は急に的の外れたやうな樣子をした。けれども默つてはゐなかつた。
「だけど兄さん、もし堀のゐない留守に誰かあたしの所へ來て何か云ふとするでせう。それを堀が知つて心配すると思つてゐらつしつて」
「堀さんの事は僕にや分らないよ。お前は心配しないと斷言する氣かも知れないがね」
「えゝ斷言します」
「結構だよ。――それで？」
「あたしの方もそれ丈よ」
二人は默らなければならなかつた。

百

然し二人はもう因果づけられてゐた。何うしても或物を或所迄、會話の手段で、互の胸から敲き出さなければ承知が出來なかつた。ことに津田には目前の必要があつた。當座に逼る金の工面、彼は今其財源を自分の前に控へてゐた。さうして一度取り逃せば、それは永久彼の手に戻つて來

さうもなかつた。勢ひ彼は其點だけでもお秀に對する弱者の形勢に陷つてゐた。彼は失なはれた話頭を、何んな風にして取り返したものだらうと考へた。

「お秀病院で飯を食つて行かないか」

時間が丁度こんな愛嬌をいふに適してゐた。ことに今朝母と子供を連れて横濱の親類へ行つたといふ堀の家族は留守なので、彼は此愛嬌に特別な意味を有たせる便宜もあつた。

「何うせ家へ歸つたつて用はないんだらう」

お秀は津田のいふ通りにした。話は容易く二人の間に復活する事が出來た。然しそれは單に兄妹らしい話に過ぎなかつた。さうして單に兄妹らしい話は此場合彼等に取つて些とも腹の足にならなかつた。彼等はもつと相手の胸の中へ潜り込まうとして機會を待つた。

「兄さん、あたし此所に持つてゐますよ」

「何を」

「兄さんの入用のものを」

「左右かい」

津田は殆んど取り合はなかつた。其冷淡さは正に彼の自尊心に比例してゐた。彼は精神的にも形式的にも此妹に頭を下げたくなかつた。然し金は取りたかつた。お秀はまた金は何うでも可かつた。然し兄に頭を下げさせたかつた。勢ひ兄の欲しがる金を餌にして、自分の目的を達しなければならなかつた。結果は何うしても兄を焦らす事に歸着した。

「上げませうか」

「ふん」

「お父さんは何うしたつて下さりつこありませんよ」

「ことによると、呉れないかも知れないね」

「だつてお母さんが、あたしの所へちやんと左右云つて來てゐらつしやるんですもの。今日其手紙を持つて來て、お目に懸けやうと思つてて、つい忘れてしまつたんですけれども」

「そりや知つてるよ。先刻もうお前から聞いたぢやないか」

「だからよ。あたしが持つて來たつて云ふのよ」

「僕を焦らすためにかい、又は僕に呉れるためにかい」

お秀は打たれた人のやうに突然默つた。さうして見る〳〵うちに、美くしい眼の底に涙を一杯溜めた。津田にはそれが口惜涙としか思へなかつた。

「何うして兄さんは此頃そんなに皮肉になつたんでせう。何うして昔のやうに人の誠を受け入れて下さる事が出來ないんでせう」

「兄さんは昔とちつとも違つてやしないよ。近頃お前の方が違つて來たんだよ」

今度は呆れた表情がお秀の顏にあらはれた。

「あたしが何時何んな風に變つたと仰しやるの。云つて下さい」

「そんな事は他に訊かなくつても、よく考へて御覽、自分で解る事だから」

「いゝえ、解りません。だから云つて下さい。どうぞ云つて聞かして下さい」

津田は寧ろ冷やかな眼をして、鋭どく切り込んで來るお秀の樣子を眺めてゐた。此所迄來ても、彼には相手の機嫌を取り返した方が得か、又はくしやりと一度に押し潰した方が得かといふ利害心が働らいてゐた。其中間を行かうと決心した彼は徐ろに口を開いた。

「お秀、お前には解らないかも知れないがね、兄さんから見ると、お前は堀さんの所へ行つて

つから以來、大分變つたよ」

「そりや變る筈ですわ、女が嫁に行つて子供が二人も出來れば誰だつて變るぢやありませんか」

「だからそれで可いよ」

「けれども兄さんに對して、あたしが何んなに變つたと仰しやるんです。そこを聞かして下さい」

「そりや……」

津田は全部を答へなかつた。けれども答へられないのではないといふ事を、語勢からお秀に解るやうにした。お秀は少し間を置いた。それからすぐ押し返した。

「兄さんのお腹の中には、あたしが京都へ告口をしたといふ事が始終あるんでせう」

「そんな事は何うでも可いよ」

「いゝえ、それで屹度あたしを眼の敵にして居らつしやるんです」

「誰が」

不幸な言葉は二人の間に伏字の如く潜在してゐたお延といふ名前に點火したやうなものであつ

た。お秀はそれを松明のやうに兄の眼先に振り廻した。

「兄さんこそ違つたのです。嫂さんをお貰ひになる前の兄さんと、嫂さんをお貰ひになつた後の兄さんとは、丸で違つてゐます。誰が見たつて別の人です」

百一

津田から見たお秀は彼に對する僻見で武裝されてゐた。ことに最後の攻擊は誤解其物の活動に過ぎなかつた。彼には「嫂さん、嫂さん」を繰り返す妹の聲が如何にも耳障りであつた。寧ろ自己を滿足させるための行爲を、悉く細君を滿足させるために起つたものとして解釋する妹の前に、彼は尠からぬ不快を感じた。

「己はお前の考へてるやうな二本棒ぢやないよ」

「そりや左右かも知れません。嫂さんから電話が掛つて來ても、あたしの前ぢやわざと冷淡を裝つて、打つちやつてお置きになる位ですから」

斯ういふ言葉が所嫌はずお秀の口からひよい〳〵續發して來るやうになつた時、津田は殆んど

眼前の利害を忘れるべく餘儀なくされた。彼は一二度腹の中で舌打をした。

「だから此奴に電話を掛けるなと、あれ丈お延に注意して置いたのに」

彼は神經の亢奮を紛らす人のやうに、しきりに短かい口髭を引張つた。次第々々に苦い顏をし始めた。さうして段々言葉少なになつた。

津田の此態度が意外の影響をお秀に與へた。お秀は兄の弱點が自分のために一皮づつ赤裸にされて行くので、仕舞に彼は耻ぢ入つて、默り込むのだとばかり考へたらしく、猶猛烈に進んだ。恰ももう一息で彼を全然自分の前に後悔させる事が出來でもするやうな勢で。

「嫂さんと一所になる前の兄さんは、もつと正直でした。少なくともつと淡泊でした。私は証據のない事を云ふと思はれるのが厭だから、有體に事實を申します。だから兄さんも淡泊に私の質問に答へて下さい。兄さんは嫂さんをお貰ひになる前、今度のやうな嘘をお父さんに吐いた覺がありますか」

此時津田は始めて弱つた。お秀の云ふ事は明らかな事實であつた。然し其事實は決してお秀の考へてゐるやうな意味から起つたのではなかつた。津田に云はせると、たゞ偶然の事實に過ぎな

かつた。

「それでお前は此事件の責任者はお延だと云ふのかい」

お秀は左右だと答へたい所をわざと外した。

「いゝえ、嫂さんの事なんか、あたし些とも云つてやしません。たゞ兄さんが變つた証據にそれ丈の事實を主張するんです」

津田は表向何うしても負けなければならない形勢に陷つて來た。

「お前がそんなに變つたと主張したければ、變つたで可いぢやないか」

「可かないわ。お父さんやお母さんに濟まないわ」

すぐ「左右かい」と答へた津田は冷淡に「そんならそれでも可いよ」と付け足した。

お秀は是でもまだ後悔しないのかといふ顏付をした。

「兄さんの變つた証據はまだあるんです」

津田は素知らぬ風をした。お秀は遠慮なく其証據といふのを擧げた。

「兄さんは小林さんが兄さんの留守へ來て、嫂さんに何か云やしないかつて、先刻から心配してゐるぢやありませんか」

「煩さいな。心配ぢやないつて先刻説明したぢやないか」

「でも氣になる事は慥なんでせう」

「何うでも勝手に解釋するが可い」

「えゝ。――何方でも、兎に角、それが兄さんの變つた証據ぢやありませんか」

「馬鹿を云ふな」

「いゝえ、証據よ。慥な証據よ。兄さんはそれ丈嫂さんを恐れてゐらつしやるんです」

津田は不圖眼を轉じた。さうして枕に頭を載せた儘、下からお秀の顏を覗き込むやうにして見た。それから好い恰好をした鼻柱に冷笑の皺を寄せた。此餘裕がお秀には全く突然であつた。もう一息で懺悔の深谷へ眞ッ逆さまに突き落す積でゐた彼女は、まだ兄の後に平坦な地面が殘つてゐるのではなからうかといふ疑ひを始めて起した。然し彼女は行ける所迄行かなければならなかつた。

「兄さんはつい此間迄小林さんなんかを、丸で鼻の先であしらつてゐらつしつたぢやありませ

んか。何を云つても取り合はなかつたぢやありませんか。それを今日に限つて何故そんなに怖がるんです。高が小林なんかを怖がるやうになつたのは、其相手が嫂さんだからぢやありませんか」

「そんならそれで可いさ。僕がいくら小林を怖がつたつて、お父さんやお母さんに對する不義理になる譯でもなからう」

「だからあたしの口を出す幕ぢやないと仰しやるの」

「まあ其見當だらうね」

お秀は赫とした。同時に一筋の稲妻が彼女の頭の中を走つた。

百二

「解りました」

お秀は鋭どい聲で斯う云ひ放つた。然し彼女の改まつた切口上は外面上何の變化も津田の上に持ち來さなかつた。彼はもう彼女の挑戰に應ずる氣色を見せなかつた。

「解りましたよ、兄さん」

お秀は津田の肩を搖ぶるやうな具合に、再び前の言葉を繰返した。津田は仕方なしに又口を開いた。

「何が」

「何故嫂さんに對して兄さんがそんなに氣を置いてゐらつしやるかといふ意味がです」

津田の頭に一種の好奇心が起つた。

「云つて御覽」

「云ふ必要はないんです。たゞ私に其意味が解つたといふ事丈を承知して頂けば澤山なんです」

「そんならわざ〳〵斷る必要はないよ。默つて獨りで解つたと思つてゐるが可い」

「いゝえ可くないんです。兄さんは私を妹と見做してゐらつしやらない。お父さんやお母さんに關係する事でなければ、私には兄さんの前で何にもいふ權利がないものとしてゐらつしやる。だから私も云ひません。然し云はなくつても、眼はちやんと付いてゐます。知らないで云はないと思つてお出だと間違ひますから、一寸お斷り致したのです」

津田は話を此所いらで切り上げて仕舞ふより外に道はないと考へた。なまじい掛り合へば掛り

合ふ程、事は面倒になる丈だと思つた。然し彼には妹に頭を下げる氣が些ともなかつた。彼女の前に後悔するなどといふ芝居じみた眞似は夢にも思ひ付けなかつた。その位の事を敢てし得る彼は、平生から低く見てゐる妹に丈は、思ひの外高慢であつた。さうして其高慢な所を、他人に對してよりも、比較的遠慮なく外へ出した。從つていくら口先が和解的でも大して役に立たなかつた。お秀にはたゞ彼の中心にある輕蔑が、微溫い表現を通して傳はる丈であつた。彼女はもう遣り切れないと云つた樣子を先刻から見せてゐる津田を毫も容赦しなかつた。さうして又「兄さん」と云ひ出した。

其時津田はそれ迄にまだ見出し得なかつたお秀の變化に氣が付いた。今迄の彼女は彼を通して常に鋒先をお延に向けてゐた。兄を攻擊するのも嘘ではなかつたが、矢面に立つ彼を餘所にしても、背後に控へてゐる嫂丈は是非射留めなければならないといふのが、彼女の眞劍であつた。それが何時の間にか變つて來た。彼女は勝手に主客の位置を改めた。さうして一直線に兄の方へ向いて進んで來た。

「兄さん、妹は兄の人格に對して口を出す權利がないものでせうか。よし權利がないにした所

で、もし左右した疑を妹が少しでも有つてゐるなら、綺麗にそれを晴らして呉れるのが兄の義務――義務は取り消します、私には不釣合な言葉かも知れませんから。――少なくとも兄の人情でせう。私は今其人情を有つてゐらつしやらない兄さんを眼の前に見る事を妹として悲しみます」

「何を生意氣な事を云ふんだ。默つてゐろ、何にも解りもしない癖に」

津田の癇癪は始めて破裂した。

「お前に人格といふ言葉の意味が解るか。高が女學校を卒業した位で、そんな言葉を已の前で人並に使ふのからして不都合だ」

「私は言葉に重きを置いてゐやしません。事實を問題にしてゐるのです」

「事實とは何だ。己の頭の中にある事實が、お前のやうな教養に乏しい女に捕まへられると思ふのか。馬鹿め」

「さう私を輕蔑なさるなら、御注意迄に申します。然し可ございますか」

「可いも惡いも答へる必要はない。人の病氣の所へ來て何だ、其態度は。それでも妹だといふ積か」

「あなたが兄さんらしくないからです」
「默れ」
「默りません。云ふ丈の事は云ひます。兄さんは嫂さんに自由にされてゐます。お父さんや、お母さんや、私などよりも嫂さんを大事にしてゐます」
「妹より妻を大事にするのは何處の國へ行つたつて當り前だ」
「それ丈なら可いんです。然し兄さんのはそれ丈ぢやないんです。嫂さんを大事にしてゐながら、まだ外にも大事にしてゐる人があるんです」
「何だ」
「それだから兄さんは嫂さんを怖がるのです。しかも其怖がるのは——」
お秀が斯う云ひかけた時、病室の襖がすうと開いた。さうして蒼白い顔をしたお延の姿が突然二人の前に現はれた。

百三

彼女が醫者の玄關へ掛つたのは其三四分前であつた。醫者の診察時間は午前と午後に分れてゐて、午後の方は、役所や會社へ勤める人の便宜を計るため、四時から八時迄の規定になつてゐるので、お延は比較的閑靜な扉を開けて內へ入る事が出來たのである。

實際彼女は三四日前に來た時のやうに、編上だの疊付だのといふ雜然たる穿物を、一足も沓脫の上に見出さなかつた。患者の影は無論の事であつた。時間外といふ考へを少しも頭の中に入れてゐなかつた彼女には、それが如何にも不思議であつた位四圍は寂寞してゐた。

彼女はその森とした玄關の沓脫の上に、行儀よく揃へられたたゞ一足の女下駄を認めた。價段から云つても看護婦抔の穿きさうもない新らしい其下駄が突然彼女の心を躍らせた。下駄は正しく若い婦人のものであつた。小林から受けた疑念で胸が一杯になつてゐた彼女は、しばらくそれから眼を放す事が出來なかつた。彼女は猛烈にそれを見た。

右手にある小さい四角な窓から書生が顏を出した。さうして其所に動かないお延の姿を認めた時、誰何でもする人のやうな表情を彼女の上に注いだ。彼女はすぐ津田への來客があるかないかを確かめた。それが若い女であるかないかも訊いた。それからわざと取次を斷つて、ひとりで階

子段の下迄來た。さうして上を見上げた。

上では絶えざる話し聲が聞こえた。然し普通雑談の時に、言葉が對話者の間を、淀みなく往つたり來たり流れてゐるのとは大分趣を異にしてゐた。其所には強い感情があつた。しかもそれを抑へ付けやうとする努力の痕がありありと聞こえた。他聞を憚かるとしか受取れない其談話が、お延の神經を針のやうに鋭どくした。下駄を見詰めた時より以上の猛烈さが其所に現はれた。彼女は一倍猛烈に耳を傾むけた。

津田の部屋は診察室の眞上にあつた。家の構造から云ふと、階子段を上つてすぐ取付が壁で、其右手が又四疊半の小さい部屋になつてゐるので、此部屋の前を廊下傳ひに通り越さなければ、津田の寐てゐる所へは出られなかつた。從がつてお延の聽かうとする談話は、聽くに都合の好くない見當、卽ち彼女の後の方から洩れて來るのであつた。

彼女はそつと階子段を上つた。柔婉な體格を有つた彼女の足音は猫のやうに靜かであつた。さうして猫と同じやうな成効をもつて酬いられた。

上り口の一方には、落ちない用心に、一間程の手欄が拵へてあつた。お延はそれに倚つて、津

田の様子を窺つた。すると忽ち鋭どいお秀の聲が彼女の耳に入つた。ことに嫂さんがといふ特殊な言葉が際立つて鼓膜に響いた。見事に豫期の外れた彼女は、又はつと思はせられた。硬い緊張が弛む暇なく再び彼女を襲つて來た。彼女は津田に向つてお秀の口から抛げ付けられる嫂さんといふ其言葉が、何んな意味に用ひられてゐるかを知らなければならなかつた。彼女は耳を澄ました。

二人の語勢は聽いてゐるうちに急になつて來た。二人は明らかに喧嘩をしてゐた。其喧嘩の渦中には、知らない間に、自分が引き込まれてゐた。或は自分が此喧嘩の主な原因かも分らなかつた。

然し前後の關係を知らない彼女は、たゞそれ丈で自分の位置を極める譯に行かなかつた。それに二人の使ふ、といふよりも寧ろお秀の使ふ言葉は霰のやうに忙がしかつた。後から後から落ちてくる單語の意味を、一粒づつ拾つて吟味してゐる閑などは到底なかつた。「人格」、「大事にする」、「當り前」、斯んな言葉が夫から夫へと其所に佇立んでゐる彼女の耳朶を叩きに來る丈であつた。

彼女は事件が分明になる迄凝と動かずに立つてゐようかと考へた。すると其時お秀の口から最後の砲撃のやうに出た「兄さんは嫂さんより外にもまだ大事にしてゐる人があるのだ」といふ句が、突然彼女の心を震はせた。際立つて明瞭に聞こえた此一句ほどお延に取つて大切なものはなかつた。同時に此一句程彼女にとつて不明瞭なものもなかつた。後を聞かなければ、それ丈で獨立した役にはとても立てられなかつた。お延は何んな犧牲を拂つても、其後を聽かなければ氣が濟まなかつた。然し其後は又何うしても聽いてゐられなかつた。先刻から一言葉毎に一調子づゝ高まつて來た二人の遣取は、此所で絶頂に達したものと見做すより外に途はなかつた。もう一歩も先へ前めない極端迄來てゐた。もし強ひて先へ出ようとすれば、何方かで手を出さなければならなかつた。從つてお延は不體裁を防ぐ緩和劑として、何うしても病室へ入らなければならなかつた。

彼女は兄妹の中を能く知つてゐた。彼等の不和の原因が自分にある事も彼女には平生から解つてゐた。其所へ顔を出すには、出す丈の手際が要つた。然し彼女には其自信がないでもなかつた。彼女は際どい刹那に覺悟を極めた。さうしてわざと靜かに病室の襖を開けた。

百四

二人は果してぴたりと默つた。然し暴風雨が是から荒れようとする途中で、急に其進行を止められた時の沈默は、決して平和の象徴ではなかつた。不自然に抑えつけられた無言の瞬間には寧ろ物凄い或物が潜んでゐた。

二人の位置關係から云つて、最初にお延を見たものは津田であつた。南向の縁側の方を枕にして寐てゐる彼の眼に、反對の側から入つて來たお延の姿が一番早く映るのは順序であつた。其刹那に彼は二つのものをお延に握られた。一つは彼の不安であつた。一つは彼の安堵であつた。困つたといふ心持と、助かつたといふ心持が、包み藏す餘裕のないうちに、一度に彼の顔に出た。さうしてそれが突然入つて來たお延の豫期とぴたりと一致した。彼女は此時夫の面上に現はれた表情の一部分から、或物を疑つても差支ないといふ証左を、永く心の中に摑んだ。然しそれは秘密であつた。咄嗟の場合、彼女はたゞ夫の他の半面に應ずるのを、此所へ來た刻下の目的としなければならなかつた。彼女は蒼白い頰に無理な微笑を湛へて津田を見た。さうしてそれが丁度お

秀の振り返るのと同時に起つた所作だつたので、お秀にはお延が自分を出し抜いて、津田と默契を取り換はせてゐるやうに取れた。薄赤い血潮が覺えずお秀の頰に上つた。

「おや」

「今日は」

輕い挨拶が二人の間に起つた。然しそれが濟むと話は何時ものやうに續かなかつた。二人とも手持無沙汰に壓迫され始めなければならなかつた。滅多な事の云へないお延は、脇に抱へて來た風呂敷包を開けて、岡本の貸して呉れた英語の滑稽本を出して津田に渡した。其指の先には、お秀が始終腹の中で問題にしてゐる例の指輪が光つてゐた。

津田は薄い小型な書物を一つ一つ取り上げて、さら〳〵頁を翻へして見たぎりで、再びそれを枕元へ置いた。彼はその一行さへ讀む氣にならなかつた。批評を加へる勇氣などは何處からも出て來なかつた。彼は默つてゐた。お延は其間に又お秀と二言三言ほど口を利いた。それもみんな彼女の方から話し掛けて、必要な返事丈を、云はゞ相手の咽喉から壓し出したやうなものであつた。

お延は又懷中から一通の手紙を出した。

「今來掛に郵便函の中を見たら入つて居りましたから、持つて參りました」

お延の言葉は几帳面に改たまつてゐた。津田と差向ひの時に比べると、丸で別人のやうに禮儀正しかつた。彼女は其形式的な餘所〳〵しい所を暗に嫌つてゐた。けれども他人の前、ことにお秀の前では、さうした不自然な言葉遣ひを、一種の意味から餘儀なくされるやうにも思つた。

手紙は夫婦の間に待ち受けられた京都の父からのものであつた。是も前便と同じやうに書留になつてゐないので、眼前の用を辨ずる中味に乏しいのは、お秀からまだ何にも聞かせられないお延にも畧見當丈は付いてゐた。

津田は封筒を切る前に彼女に云つた。

「お延駄目だとさ」

「さう、何が」

「お父さんはいくら賴んでももうお金を呉れないんださうだ」

津田の云ひ方は珍らしく眞摯の氣に充ちてゐた。お秀に對する反抗心から、彼は何時の間にか

お延に對して平たい旦那樣になつてゐた。しかも其所に自分は丸で氣が付かずにゐた。衒ひ氣のない其態度がお延には嬉しかつた。彼女は慰さめるやうな溫味のある調子で答へた。言葉遣ひさへ吾知らず、平生の自分に戻つてしまつた。

「可いわ、そんなら。此方で何うでもするから」

津田は默つて封を切つた。中から出た父の手紙は左程長いものではなかつた。其上一目見ればすぐ要領を得られる位な大きな字で書いてあつた。それでも女二人は滑稽本の場合のやうに口を利き合はなかつた。ひとしく注意の視線を卷紙の上に向けてゐる丈であつた。だから津田がそれを讀み了つて、元通りに封筒の中へ入れたのを、其儘枕元へ投げ出した時には、二人にも大體の意味はもう呑み込めてゐた。それでもお秀はわざと訊いた。

「何と書いてありますか、兄さん」

氣のない顏をしてゐた津田は輕く「ふん」と答へた。お秀は一寸餘所を向いた。それから又訊いた。

「あたしの云つた通りでせう」

手紙には果して彼女の推察する通りの事が書いてあつた。然しそれ見た事かといつた樣な妹の態度が、津田には如何にも氣に喰はなかつた。それでなくつても先刻からの行掛り上、彼は天然自然の返事をお秀に與へるのが業腹であつた。

百五

お延には夫の氣持がありありと讀めた。彼女は心の中で再度の衝突を惧れた。と共に、夫の本意をも疑つた。彼女の見た平生の夫には自制の念が何處へでも付いて廻つた。自制ばかりではなかつた。腹の奧で相手を下に見る時の冷かさが、それに何時でも付け加はつてゐた。彼女は夫の此特色中に、まだ自分の手に餘る或物が潛んでゐる事をも信じてゐた。それは未だに彼女に取つての未知數であるにも拘はらず、其所さへ明瞭に抑へれば、苦もなく彼を滿足に扱かひ得るものと迄彼女は思ひ込んでゐた。然し外部に現はれる丈の夫なら一口で評するのも夫程六づかしい事ではなかつた。彼は容易に怒らない人であつた。英語で云へば、テンパーを失なはない例にもならうといふ其人が、また何うして自分の妹の前に斯う破裂し掛るのだらう。もつと、嚴密に云へ

ば、彼女が室に入つて來る前に、何うしてあれ程露骨に破裂したのだらう。兎に角彼女は退き掛けた波が再び寄せ返す前に、二人の間に割り込まなければならなかつた。彼女は喧嘩の相手を自分に引き受けやうとした。

「秀子さんの方へもお父さまから何かお音信があつたんですか」

「いゝえ母から」

「さう、矢つ張此事に就いて」

「えゝ」

お秀はそれぎり何にも云はなかつた。お延は後を付けた。

「京都でも色々お物費が多いでせうからね。それに元々此方が悪いんですから」

お秀には此時程お延の指にある寶石が光つて見えた事はなかつた。さうしてお延は又左も無邪氣らしくその光る指輪をお秀の前に出してゐた。お秀は云つた。

「さういふ譯でもないんでせうけれどもね。年寄は變なもので、兄さんを信じてゐるんですよ。其位の工面は何うにでも出來る位に考へて」

お延は微笑した。

「そりや、いざとなれば何うにか斯うにかなりますよ、ねえ貴方」

斯う云つて津田の方を見たお延は、「早くなると仰やい」といふ意味を眼で知らせた。然し津田には、彼女のして見せる眼の働らきが解つても、意味は全く通じなかつた。彼は何時も繰り返す通りの事を云つた。

「ならん事もあるまいがね、己には何うもお父さんの云ふ事が變でならないんだ。垣根を繕ろつたの、家賃が滯つたのつて、そんな費用は元來些細なものぢやないか」

「さうも行かないでせう、貴方。是で自分の家を一軒持つて見ると」

「我々だつて一軒持つてるぢやないか」

お延は彼女に特有な微笑を今度はお秀の方に見せた。お秀も同程度の愛嬌を惜まずに答へた。

「兄さんは其底に何か魂膽があるかと思つて、疑つてゐらつしやるんですよ」

「そりや貴方惡いわ、お父さまを疑ぐるなんて。お父さまに魂膽のある筈はないぢやありませんか、ねえ秀子さん」

「いゝえ、父や母よりもね、外にまだ魂膽があると思つてるんですのよ」
「外に？」
お延は意外な顏をした。
「えゝ、外にあると思つてるに違ないのよ」
お延は再び夫の方に向つた。
「貴方、そりや又何ういふ譯なの」
「お秀がさう云ふんだから、お秀に訊いて御覽よ」
お延は苦笑した。お秀の口を利く順番が又廻つて來た。
「兄さんはあたし達が陰で、京都を突ツ付いたと思つてるんですよ」
「だつて——」
お延はそれより以上云ふ事が出來なかつた。さうして其云つた事は殆んど意味をなさなかつた。
お秀はすぐ其虛を充たした。
「それで先刻から大變御機嫌が悪いのよ。尤もあたしと兄さんと寄ると屹度喧嘩になるんです

けれどもね。ことに此事件このかた」
「困るのね」とお延は溜息交りに答へた後で、又津田に訊き掛けた。
「然しそりや本當の事なの、貴方。貴方だつて眞逆そんな男らしくない事を考へてゐらつしやるんぢやないでせう」
「何うだか知らないけれども、お秀にはさう見えるんだらうよ」
「だつて秀子さん達がそんな事をなさるとすれば、一體何の役に立つと、貴方思つてゐらつしやるの」
「大方見せしめの爲だらうよ。己には能く解らないけれども」
「何の見せしめなの？一體何んな悪い事を貴方なすつたの」
「知らないよ」
津田は蒼蠅さうに斯う云つた。お延は取り付く島もないといつた風にお秀を見た。何うか助けて下さいといふ表情が彼女の細い眼と眉の間に現はれた。

百六

「なに兄さんが強情なんですよ」とお秀が云ひ出した。嫂に對して何とか説明しなければならない位地に追ひ詰められた彼女は、斯う云ひながら腹の中で猶の事其嫂を憎んだ。彼女から見た其時のお延ほど、空々しい又づう〳〵しい女はなかつた。

「えゝ良人は強情よ」と答へたお延はすぐ夫の方を向いた。

「あなた本當に強情よ。秀子さんの仰しやる通りよ。其癖だけは是非お已めにならないと不可せんわ」

「一體何が強情なんだ」

「そりやあたしにも能く解らないけれども」

「何でもかでもお父さんから金を取らうとするからかい」

「さうね」

「取らうとも何とも云つてゐやしないぢやないか」

「さうね。そんな事仰しやる筈がないわね。又仰しやつた所で效目がなければ仕方がありませんからね」

「ぢや何處が強情なんだ」

「何處がつてお聽きになつても駄目よ。あたしにも能く解らないんですから。だけど、何處かにあるのよ、強情な所が」

「馬鹿」

馬鹿と云はれたお延は却つて心持ち好ささうに微笑した。お秀は堪まらなくなつた。

「兄さん、あなた何故あたしの持つて來たものを素直にお取りにならないんです」

「素直にも義剛にも、取るにも取らないにも、お前の方で天から出さないんぢやないか」

「あなたの方でお取りになると仰しやらないから、出せないんです」

「此方から云へば、お前の方で出さないから取らないんだ」

「然し取るやうにして取つて下さらなければ、あたしの方だつて厭ですもの」

「ぢや何うすれば可いんだ」

「解つてるぢやありませんか」
三人は少時默つてゐた。
突然津田が云ひ出した。
「お延お前お秀に詫まつたら何うだ」
お延は呆れたやうに夫を見た。
「なんで」
「お前さへ詫まつたら、持つて來たものを出すといふ積なんだらう。お秀の料簡では」
「あたしが詫まるのは何でもないわ。貴方が詫まれと仰しやるなら、いくらでも詫まるわ。だけど——」
お延は此所で訴への眼をお秀に向けた。お秀は其後を遮つた。
「兄さん、あなた何を仰しやるんです。あたしが何時嫂さんに詫まつて貰ひたいと云ひました。そんな言掛りを揑造されては、あたしが嫂さんに對して面目なくなる丈ぢやありませんか」
沈默が又三人の上に落ちた。津田はわざと口を利かなかつた。お延には利く必要がなかつた。

お秀は利く準備をした。
「兄さん、あたしは是でもあなた方に對して義務を盡してゐる積です。——」
お秀がやつと是丈云ひ掛けた時、津田は急に質問を入れた。
「一寸お待ち。義務かい、親切かい、お前の云はうとする言葉の意味は」
「あたしには何方だつて同なじ事です」
「さうかい。そんなら仕方がない。それで」
「それでぢやありません。だからです。あたしがあなた方の陰へ廻つて、お父さんやお母さんを突ツ付いた結果、兄さんや嫂さんに不自由をさせるのだと思はれるのが、あたしには如何にも辛いんです。だからその額丈を何うかして上げようと云ふ好意から、今日わざ〳〵此所へ持つて來たと云ふんです。實は昨日嫂さんから電話が掛つた時、すぐ來ようと思つたんですけれども、朝のうちは宅に用があつたし、午からはその用で銀行へ行く必要が出來たものですから、つい來損なつちまつたんです。元々僅かな金額ですから、それについて兎や角云ふ氣は些ともありませんけれども、あたしの方の心遣ひは、丸で兄さんに通じてゐないんだから、それがたゞ殘念だと

云ひたいんです」
お延は猶默つてゐる津田の顏を覗き込んだ。
「貴方何とか仰しやいよ」
「何て」
「何てつて、お禮をよ。秀子さんの親切に對してのお禮よ」
「高がこれしきの金を貰ふのに、そんなに恩に着せられちや厭だよ」
「恩に着せやしないつて今云つたぢやありませんか」とお秀が少し癇走つた聲で辯解した。お延は元通りの穩やかな調子を崩さなかつた。
「だから强情を張らずに、お禮を仰しやいと云ふのに。もしお金を拜借するのがお厭なら、お金は頂かないで可いから、たゞお禮丈を仰しやいよ」
お秀は變な顏をした。津田は馬鹿を云ふなといふ態度を示した。

百七

三人は妙な羽目に陷つた。行掛り上一種の關係で因果づけられた彼等は次第に話を餘所へ持つて行く事が困難になつてきた。席を外す事は無論出來なくなつた。彼等は其所へ坐つたなり、何うでも斯うでも、此問題を解決しなければならなくなつた。
しかも傍から見た其問題は決して重要なものとは云へなかつた。遠くから冷靜に彼等の身分と境遇を眺める事の出來る地位に立つ誰の眼にも、小さく映らなければならない程度のものに過ぎなかつた。彼等は他から注意を受ける迄もなく能くそれを心得てゐた。けれども彼等は爭はなければならなかつた。彼等の背後に脊負つてゐる因緣は、他人に解らない過去から複雜な手を延ばして、自由に彼等を操つた。
仕舞に津田とお秀の間に下のやうな問答が起つた。
「始めから默つてゐれば、それ迄ですけれども、一旦云ひ出して置きながら、持つて來た物を渡さずに此儘歸るのも心持が惡う御座んすから、何うか取つて下さいよ。兄さん」
「置いて行きたければ置いといでよ」
「だから取るやうにして取つて下さいな」

「一體何うすればお前の氣に入るんだか、僕には解らないがね、だから其條件をもつと淡泊に云つちまつたら可いぢやないか」

「あたし條件なんてそんな六づかしいものを要求してやしません。たゞ兄さんが心持よく受取つて下されば、それで宜いんです。詰り兄妹らしくして下されば、それで宜いといふ丈です。それからお父さんに濟まなかつたと本氣に一口仰しやりさへすれば、何でもないんです」

「お父さんには、とつくの昔にもう濟まなかつたと云つちまつたよ。お前も知つてるぢやないか。しかも一口や二口ぢやないやね」

「けれどもあたしの云ふのは、そんな形式的のお詫ぢやありません。心からの後悔です」

津田は高が是しきの事にと考へた。後悔などとは思ひも寄らなかつた。

「僕の詫樣が空々しいとでも云ふのかね、なんぼ僕が金を欲しがるつたつて、是でも一人前の男だよ。さうぺこ〳〵頭を下げられるものか、考へても御覽な」

「だけれども、兄さんは實際お金が欲しいんでせう」

「欲しくないとは云はないさ」

「それでお父さんに謝罪つたんでせう」

「でなければ何も詫る必要はないぢやないか」

「だからお父さんが下さらなくなつたんですよ。兄さんは其所に氣が付かないんですか」

津田は口を閉ぢた。お秀はすぐ乘し掛つて行つた。

「兄さんがさういふ氣で居らつしやる以上、お父さんばかりぢやないわ、あたしだつて上げられないわ」

「ぢやお止しよ。何も無理に貰はうとは云はないんだから」

「所が無理にでも貰はうと仰しやるぢやありませんか」

「何時」

「先刻からさう云つて居らつしやるんです」

「言掛りを云ふな、馬鹿」

「言掛りぢやありません。先刻から腹の中でさう云ひ續けに云つてるぢやありませんか。兄さんこそ淡泊でないから、それが口へ出して云へないんです」

津田は一種嶮しい眼をしてお秀を見た。其中には憎悪が輝やいた。けれども良心に對して耻づかしいといふ光は何處にも宿らなかつた。さうして彼が口を利いた時には、お延でさへ其意外なのに驚ろかされた。彼は彼に支配出來る最も冷靜な調子で、彼女の豫期とは丸で反對の事を云つた。

「お秀お前の云ふ通りだ。兄さんは今改めて自白する。兄さんにはお前の持つて來た金が絶對に入用だ。兄さんは又改めて公言する。お前は妹らしい情愛の深い女だ。兄さんはお前の親切を感謝する。だから何うぞ其金を此枕元へ置いて行つて呉れ」

お秀の手先が怒りで顫へた。兩方の頰に血が差した。其血は心の何處からか一度に顔の方へ向けて動いて來るやうに見えた。色が白いのでそれが一層鮮やかであつた。然し彼女の言葉遣ひ丈は夫程變らなかつた。怒りの中に微笑さへ見せた彼女は、不意に兄を捨てて、輝やいた眼をお延の上に注いだ。

「嫂さん何うしませう。折角兄さんがあゝ仰しやるものですから、置いて行つて上げませうか」

「さうね、そりや秀子さんの御隨意で可ござんすわ」

「さう。でも兄さんは絶對に必要だと仰しやるのね」

「えゝ良人には絶對に必要かも知れませんわ。だけどあたしには必要でも何でもないのよ」

「ぢや兄さんと嫂さんとは丸で別ツこなのね」

「それでねて、些とも別ツこぢやないのよ。是でも夫婦だから、何から何迄一所くたよ」

「だつて——」

お延は皆迄云はせなかつた。

「良人に絶對に必要なものは、あたしがちやんと拵へる丈なのよ」

彼女は斯う云ひながら、昨日岡本の叔父に貰つて來た小切手を帶の間から出した。

百八

彼女がわざとらしくそれをお秀に見せるやうに取扱ひながら、津田の手に渡した時、彼女には夫に對する一種の注文があつた。前後の行掛りと自分の性格から割り出された其注文といふのは外でもなかつた。彼女は夫が自分としつくり呼吸を合はせて、それを受け取つて呉れゝば好いが

と心の中で祈つたのである。會心の微笑を洩らしながら首肯づいて、それを鷹揚に枕元へ放り出すか、でなければ、ごく簡單な、然し細君に對して最も滿足したらしい禮をたゞ一口述べて、再びそれをお延の手に戻すか、何れにしても此小切手の出所に就いて、夫婦の間に夫婦らしい氣脉が通じてゐるといふ事實を、お秀に見せればそれで足りたのである。

不幸にして津田にはお延の所作も小切手もあまりに突然過ぎた。其上斯んな場合に遣る彼の戯曲的技巧が、細君とは少し趣を異にしてゐた。彼は不思議さうに小切手を眺めた。それから緩くり訊いた。

「こりや一體何うしたんだい」

此冷やかな調子と、等しく冷やかな反問とが、登場の第一歩に於て既にお延の意氣込を恨めしく摧いた。彼女の豫期は外れた。

「何うしもしないわ。たゞ要るから拵へた丈よ」

斯う云つた彼女は、腹の中でひや／＼した。彼女は津田が眞面目腐つて其後を訊く事を非常に恐れた。それは夫婦の間に何等の氣脉が通じてゐない証據を、お秀の前に暴露するに過ぎなかつ

た。

「譯なんか病氣中に訊かなくつても可いのよ。何うせ後で解る事なんだから」

是丈云つた後でもまだ不安心でならなかつたお延は、津田がまだ何とも答へない先に、すぐ其次を付け加へてしまつた。

「よし解らなくつたつて構はないぢやないの。高が此位のお金なんですもの、拵へようと思へば、何處からでも出て來るわ」

津田は漸く手に持つた小切手を枕元へ投げ出した。彼は金を欲しがる男であつた。然し金を珍重する男ではなかつた。使ふために金の必要を他人より餘計痛切に感ずる彼は、其金を輕蔑する點に於て、お延の言葉を心から肯定するやうな性質を有つてゐた。それで彼は默つてゐた。然しそれだから又お延に一口の禮も云はなかつた。

彼女は物足らなかつた。たとひ自分に何とも云はない迄も、お秀には溜飲の下るやうな事を一口でいゝから云つて呉れれば可いのにと、腹の中で思つた。

先刻から二人の樣子を見てゐた其お秀は此時急に「兄さん」と呼んだ。さうして懐から綺麗な

女持の紙入を出した。

「兄さん、あたし持つて來たものを此所へ置いて行きます」

彼女は紙入の中から白紙で包んだものを拔いて小切手の傍へ置いた。

「斯うして置けばそれで可いでせう」

津田に話し掛けたお秀は暗にお延の返事を待ち受けるらしかつた。お延はすぐ應じた。

「秀子さんそれぢや濟みませんから、何うぞそんな心配はしないで置いて下さい。此方で出來ないうちは、兎も角もですけれども、もう間に合つたんですから」

「だけどそれぢやあたしの方が又心持が惡いのよ。斯うして折角包んで迄持つて來たんですから、何うかそんな事を云はずに受取つて置いて下さいよ」

二人は讓り合つた。同じやうな問答を繰り返し始めた。津田は又辛防强く何時迄もそれを聽いてゐた。仕舞に二人はとう〳〵兄に向はなければならなくなつた。

「兄さん取つといて下さい」

「貴方頂いてもよくつて」

津田はにや〳〵と笑つた。

「お秀妙だね。先刻はあんなに强硬だつたのに、今度は又馬鹿に安つぽく貰はせようとするんだね。一體何方が本當なんだい」

お秀は屹となつた。

「何方も本當です」

此答は津田に突然であつた。さうして其强い調子が、何處迄も冷笑的に構へようとする彼の機鋒を挫いた。お延には猶更であつた。彼女は驚ろいてお秀を見た。其顏は先刻と同じやうに火熱つてゐた。けれども涼しい彼女の眼に宿る光りは、たゞの怒りばかりではなかつた。口惜しいとか無念だとかいふ敵意の外に、まだ認めなければならない或物が其所に陽炎つた。然しそれが何であるかは、彼女の口を通して聽くより外に途がなかつた。二人は惹き付けられた。今迄持續して來た心の態度に角度の轉換が必要になつた。彼等は遮ぎる事なしに、その輝やきの說明を、彼女の言葉から聽かうとした。彼等の豫期と同時に、其言葉はお秀の口を衝いて出た。

百九

「實は先刻から云はうか止さうかと思つて、考へてゐたんですけれども、そんな風に兄さんから冷笑かされて見ると、私だつて默つて歸るのが厭になります。だから云ふ丈の事は此所で云つて仕舞ひます。けれども一應お斷りして置きますが、是から申し上げる事は今迄のとは少し意味が違ひますよ。それを今迄通りの態度で聽いてゐられると、私だつて少し迷惑するかも知れません、といふのは、たゞ私が誤解されるのが厭だといふ意味でなくつて、私の心持があなた方に通じなくなるといふ譯合からです」

お秀の說明は斯ういふ言葉で始まつた。それが旣に自分の態度を改めかゝつてゐる二人の豫期に一倍の角度を與へた。彼等は默つて其後を待つた。然しお秀はもう一遍念を押した。

「少しや眞面目に聽いて下さるでせうね。私の方が眞面目になつたら」

斯う云つたお秀は其强い眼を津田の上からお延に移した。

「尤も今迄が不眞面目といふ譯でもありませんけれどもね。何しろ嫂さんさへ此所にゐて下さ

れば、まあ大丈夫でせう。何時もの兄妹喧嘩になつたら、其時に止めて頂けばそれ迄ですから」

お延は微笑して見せた。然しお秀は應じなかつた。

「私は何時かつから兄さんに云はう〳〵と思つてゐたんです。嫂さんのゐらつしやる前でですよ。だけど、其機會がなかつたから、今日迄云はずにゐました。それを今改めてあなた方のお揃ひになつた所で申してしまふのです。それは外でもありません。よござんすか、あなた方お二人は御自分達の事より外に何にも考へてゐらつしやらない方だといふ事丈なんです。自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で餘所を向いて取り合はずにゐられる方だといふ丈なんです」

此斷案を津田は寧ろ冷靜に受ける事が出來た。彼はそれを自分の特色と認める上に、一般人間の特色とも認めて疑はなかつたのだから。然しお延には又是程意外な批評はなかつた。彼女はたゞ呆れるばかりであつた。幸か不幸かお秀は彼女の口を開く前にすぐ先へ行つた。

「兄さんは自分を可愛がる丈なんです。嫂さんは又兄さんに可愛がられる丈なんです。あなた方の眼には外に何にもないんです。妹などは無論の事、お父さんもお母さんももうないんです」

此所迄來たお秀は急に後を繼ぎ足した。二人の中の一人が自分を遮ぎりはしまいかと恐れでもするやうな樣子を見せて。

「私はたゞ私の眼に映つた通りの事實を云ふ丈です。それを何うして貰ひたいといふのではありません。もう其時機は過ぎました。有體にいふと、其時機は今日過ぎたのです。實はたつた今過ぎました。あなた方の氣の付かないうちに、過ぎました。私は何事も因緣づくと諦らめるより外に仕方がありません。然し其事實から割り出される結果丈は是非共あなた方に聽いて頂きたいのです」

お秀は又津田からお延の方に眼を移した。二人はお秀の所謂結果なるものに就いて、判然した觀念がなかつた。從つてそれを聽く好奇心があつた。だから默つてゐた。

「結果は簡單です」とお秀が云つた。「結果は一口で云へる程簡單です。然し多分あなた方には解らないでせう。あなた方は決して他の親切を受ける事の出來ない人だといふ意味に、多分御自分ぢや氣が付いてゐらつしやらないでせうから。斯う云つても、あなた方にはまだ通じないかも知れないから、もう一遍繰り返します。自分丈の事しか考へられないあなた方は、人間として

他の親切に應ずる資格を失なつてゐらつしやるといふのが私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事の出來ない人間に切り下げられてゐるといふ事なのです。あなた方はそれで澤山だと思つてゐらつしやるかも知れません。何處にも不足はないと考へておいでなのかも分りません。然し私から見ると、それはあなた方自身に取つて飛んでもない不幸になるのです。人間らしく嬉しがる能力を天から奪はれたと同樣に見えるのです。兄さん、あなたは私の出した此お金は欲しいと仰やるのでせう。然し私の此お金を出す親切は不用だと仰やるのでせう。私から見ればそれが丸で逆です。人間として丸で逆なのです。だから大變な不幸なのです。さうして兄さんは其不幸に氣が付いてゐらつしやらないのです。嫂さんは又私の持つて來た此お金を兄さんが貰はなければ可いと思つてゐらつしやるんです。さつきから貰はせまい〳〵としてゐらつしやるんです。つまり此お金を斷ることによつて、併せて私の親切をも排斥しようとなさるのです。さうしてそれが嫂さんには大變なお得意になるのです。嫂さんも逆です。嫂さんは妹の實意を素直に受けるために感じられる好い心持が、今のお得意よりも何層倍人間として愉快だか、丸で御存じない方なのです」

お延は默つてゐられなくなつた。然しお秀はお延より猶默つてゐられなかつた。彼女を遮ぎらうとするお延の出鼻を抑へ付けるやうな熱した語氣で、自分の云ひたい事丈云つて仕舞はなければ氣が濟まなかつた。

百十

「嫂さん何か仰しやる事があるなら、後で緩くり伺ひますから、御迷惑でも我慢して私に云ふ丈云はせてしまつて下さい。なにもう直です。そんなに長く掛りやしません」

お秀の斷り方は妙に落ち付いてゐた。先刻津田と衝突した時に比べると、彼女は丸で反對の傾向を帶びて、激昂から沈靜の方へ推し移つて來た。それが此場合如何にも案外な現象として二人の眼に映つた。

「兄さん」とお秀が云つた。「私は何故もつと早く此包んだ物を兄さんの前に出さなかつたのでせう。さうして今になつて又何で極りが惡くもなく、それをあなた方の前に出されたのでせう。考へて下さい。嫂さんも考へて下さい」

考へる迄もなく、二人にはそれがお秀の詭辯としか受取れなかつた。ことにお延にはさう見えた。然しお秀は眞面目であつた。

「兄さん私は是であなたを兄さんらしくしたかつたのです。高がそれ程の金でかと兄さんはせゝら笑ふでせう。然し私から云へば金額は問題ぢやありません。少しでも兄さんを兄さんらしく出來る機會があれば、私は何時でもそれを利用する氣なのです。私は今日此所で出來る丈の努力をしました。さうして見事に失敗しました。ことに嫂さんがお出になつてから以後、私の失敗は急に目立つて來ました。私が妹として兄さんに對する執着を永久に放り出さなければならなくなつたのは其時です。――嫂さん、後生ですから、もう少し我慢して聽いてゐて下さい」

お秀は又斯う云つて何か云はうとするお延を制した。

「あなた方の態度はよく私に解りました。あなた方から一時間二時間の説明を伺ふより、今此所で拜見した丈で、私が勝手に判斷する方が、却つてよく解るやうに思はれますから、私はもう何にも伺ひません。然し私には自分を説明する必要がまだあります。其所は是非聽いて頂かなければなりません」

お延は隨分手前勝手な女だと思ひながら默つてゐた。然し初手から勝利者の餘裕が附着してゐる彼女には、默つてゐても大した不足はなかつた。

「兄さん」とお秀が云つた。「是を見て下さい。ちやんと紙に包んであります。お秀が宅から用意して持つて來たといふ証據にはなるでせう。其所にお秀の意味はあるのです」

お秀はわざ〳〵枕元の紙包を取り上げて見せた。

「是が親切といふものです。あなた方には何うしても其意味がお解りにならないから、仕方なしに私が自分で說明します。さうして兄さんが兄さんらしくして下さらなくつても、私は宅から持つて來た親切を此所へ置いて行くより外に途はないのだといふ事も一所に說明します。兄さん、是は妹の親切ですか義務ですか。兄さんは先刻さういふ問を私にお掛けになりました。私は何方も同じだと云ひました。兄さんが妹の親切を受けて下さらないのに、妹はまだ其親切を盡す氣でゐたら、その親切は義務と何所が違ふんでせう。私の親切を兄さんの方で義務に變化させてしまふ丈ぢやありませんか」

「お秀もう解つたよ」と津田が漸く云ひ出した。彼の頭に妹のいふ意味は判然入つた。けれ

ども彼女の豫期する感情は少しも起らなかつた。彼は先刻から蒼蠅さいのを我慢して彼女の云ひ草を聽いてゐた。彼から見た妹は、親切でもなければ、誠實でもなかつた。愛嬌もなければ氣高くもなかつた。たゞ厄介な丈であつた。

「もう解つたよ。それで可いよ。もう澤山だよ」

已に諦らめてゐたお秀は、別に恨めしさうな顏もしなかつた。たゞ斯う云つた。

「これは良人が立て替へて上げるお金ではありませんよ、兄さん。良人が京都へ保証して成り立つた約束を、兄さんがお破りになつたために、良人ではお父さんの方へ義理が出來て、仕方なしに立て替へた事になるとしたら、なんぼ兄さんだつて、心持よく受け取る氣にはなれないでせう。私もそんな事で良人を煩はせるのは厭です。だからお斷りをして置きますが、是は良人とは關係のないお金です。私のです。だから兄さんも默つてお取りになれるでせう。私の親切はお受けにならないでも、お金丈はお取りになれるでせう。今の私はなまじいお禮を云つて頂くより、たゞ默つて受取つて置いて下さる方が、却つて心持が好くなつてゐるのです。問題はもう兄さんの爲ぢやなくなつてゐるんです。單に私の爲です。兄さん、私の爲に何うぞそれを受取つて下さ

い」

お秀は是丈云つて立ち上つた。お延は津田の顏を見た。其顏には何といふ合圖の表情も見えなかつた。彼女は仕方なしにお秀を送つて階子段を降りた。二人は玄關先で尋常の挨拶を交り換せて別れた。

百十一

單に病院でお秀に出會ふといふ事は、お延に取つて意外でも何でもなかつた。けれども出會つた結果からいふと、又意外以上の意外に歸着した。自分に對するお秀の態度を平生から心得てゐた彼女も、まさか斯んな場面で其相手にならうとは思はなかつた。相手になつた後でも、それが偶然の廻り合せのやうに解釋される丈であつた。その必然性を認めるために、過去の因果を迹付けて見ようといふ氣さへ起らなかつた。この心理狀態をもつと碎けた言葉で云ひ直すと、事件の責任は全く自分にないといふ事に過ぎなかつた。凡てお秀が脊負つて立たなければならないといふ意味であつた。從つてお延の心は存外平靜であつた。少くとも、良心に對して疚ましい點は容

易に見出だされなかつた。

此會見からお延の得た收獲は二つあつた。一つは事後に起る不愉快さであつた。その不愉快さのうちには、お秀を通して今後自分達の上に持ち來されさうに見える葛藤さへ織り込まれてゐた。彼女は充分それを切り拔けて行く覺悟を有つてゐた。但しそれには、津田が飽く迄自分の肩を持つて呉れなければ駄目だといふ條件が附帶してゐた。其所へ行くと彼女には七分通りの安心と、三分方の不安があつた。其三分方の不安を、今日の自分が、どの位の程度に減らしてゐるかは、彼女に取つて重大な問題であつた。少くとも今日の彼女は、夫の愛を買ふために、もしくはそれを買ひ戻すために、出來る丈の實を津田に見せたといふ意味で、幾分かの自信を其方面に得た積なのである。

是はお延自身に解つてゐる側の消息中で、最も必要と認めなければならない一端であるが、其外にまだ彼女の一向知らない間に、自然自分の手に入るように仕組れた收獲が出來た。無論それは一時的のものに過ぎなかつた。けれども當然自分の上に向けられるべき夫の猜疑の眼から、彼女は運よく免かれたのである。といふのは、お秀といふ相手を引き受ける前の津田と、それに惱

まされ出した後の彼とは、心持から云つても、意識の焦點になるべき對象から見ても、丸で違つてゐた。だから此變化の強く起つた際どい瞬間に姿を現はして、其變化の波を自然のままに擴げる役を勤めたお延は、吾知らず儲けものをしたのと同じ事になつたのである。

彼女は何故岡本が強ひて自分を芝居へ誘つたか、又何故その岡本の宅へ昨日行かなければならなくなつたか、そんな内情に關する凡ての自分を津田の前に説明する手數を省く事が出來た。寧ろ自分の方から云ひ出したい位な小林の言葉に就いてすら、彼女は一口も語る餘裕を有たなかつた。お秀の歸つたあとの二人は、お秀の事で全く頭を占領されてゐた。

二人はそれを二人の顏付から知つた。さうして二人の顏を見合せたのは、お秀を送り出したお延が、階子段を上つて、又室の入口に其すらりとした姿を現はした刹那であつた。お延は微笑した。すると津田も微笑した。其所には外に何にもなかつた。たゞ二人がゐる丈であつた。さうして互の微笑が互の胸の底に沈んだ。少なくともお延は久し振に本來の津田を其所に認めたやうな氣がした。彼女は肉の上に浮び上つた其微笑が何の象徴であるかを殆んど知らなかつた。たゞ一種の恰好を取つて動いた肉其物の形が、彼女には嬉しい記念であつた。彼女は大事にそれを心の

奥に仕舞ひ込んだ。

其時二人の微笑は俄かに變つた。二人は齒を露はす迄に口を開けて、一度に聲を出して笑ひ合つた。

「驚ろいた」

お延は斯う云ひながら又津田の枕元へ來て坐つた。津田は寧ろ落ち付いて答へた。

「だから彼奴に電話なんか掛けるなつて云ふんだ」

二人は自然お秀を問題にしなければならなかつた。

「秀子さんは、まさか基督敎ぢやないでせうね」

「何故」

「何故でも——」

「金を置いて行つたからかい」

「それ許ぢやないのよ」

「眞面目腐つた説法をするからかい」

「えゝまあ左右よ。あたし始めてだわ。秀子さんのあんな六づかしい事を仰しやる所を拜見したのは」

「彼奴は理窟屋だよ。つまりあゝ揑ね返さなければ氣が濟まない女なんだ」

「だつてあたし始めてよ」

「お前は始めてさ。おれは何度だか分りやしない。一體何でもないのに高尙がるのが彼奴の癖なんだ。さうして生じい藤井の叔父の感化を受けてるのが毒になるんだ」

「何うして」

「何うしてつて、藤井の叔父の傍にゐて、あの叔父の議論好きな所を、始終見てゐたもんだから、とう〳〵あんなに口が達者になつちまつたのさ」

津田は馬鹿らしいといふ風をした。お延も苦笑した。

百十二

久し振に夫と直に向き合つたやうな氣のしたお延は嬉しかつた。二人の間に何時の間にか懸けられた薄い幕を、急に切つて落した時の晴々しい心持になつた。

彼を愛する事によつて、是非共自分を愛させなければ已まない。――是が彼女の決心であつた。其決心は多大の努力を彼女に促がした。彼女の努力は幸ひ徒勞に終らなかつた。彼女は遂に酬ひられた。少なくとも今後の見込を立て得る位の程度に於て酬ひられた。彼女から見れば不慮の出來事と云はなければならない此破綻は、取も直さず彼女に取つて復活の曙光であつた。彼女は遠い地平線の上に、薔薇色の空を、薄明るく眺める事が出來た。さうして其暖かい希望の中に、此破綻から起る凡ての不愉快を忘れた。小林の殘酷に殘して行つた正體の解らない黑い一點、それはいまだに彼女の胸の上にあつた。お秀の口から迸ばしるやうに出た不審の一句、それも疑惑の星となつて、彼女の頭の中に鈍い瞬きを見せた。然しそれらはもう遠い距離に退いた。少くとも左程苦にならなかつた。耳に入れた刹那に起つた昂奮の記憶さへ、再び呼び戻す必要を認めなかつた。

「若し萬一の事があるにしても、自分の方は大丈夫だ」

夫に對する斯ういふ自信さへ、其時のお延の腹には出來た。從つて、いざといふ場合に、何う

でも臨機の所置を付けて見せるといふ餘裕があつた。相手を片付ける位の事なら譯はないといふ氣持も手傳つた。

「相手？何んな相手ですか」と訊かれたら、お延は何と答へただらう。それは朧氣に薄墨で描かれた相手であつた。さうして女であつた。さうして津田の愛を自分から奪ふ人であつた。お延はそれ以外に何にも知らなかつた。然し何處かに此相手が潜んでゐるとは思へた。お秀と自分等夫婦の間に起つた波瀾が、あゝ迄際どくならずに濟んだなら、お延は行掛り上、是非共津田の腹のなかにゐる此相手を、遠くから探らなければならない順序だつたのである。

お延は其プログラムを狂はせた自分を顧みて、寧ろ幸福だと思つた。氣掛りを後へ繰り越すのが辛くて耐らないとは決して考へなかつた。それよりも此機會を緊張出來る丈緊張させて、親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んで置く方が得策だと思案した。

斯う決心するや否や彼女は嘘を吐いた。それは些細の嘘であつた。けれども今の場合に、夫を物質的と精神的の兩面に亘つて、窮地から救ひ出したものは、自分が持つて來た小切手だといふ事を、深く信じて疑はなかつた彼女には、寧ろ重大な意味を有つてゐた。

其時津田は小切手を取り上げて、再びそれを眺めてゐた。其所に書いてある額は彼の要求するものより却つて多かつた。然しそれを問題にする前、彼はお延に云つた。

「お延有難う。お蔭で助かつたよ」

お延の嘘は此感謝の言葉の後に隨いて、すぐ彼女の口を滑つて出てしまつた。

「昨日岡本へ行つたのは、それを叔父さんから貰ふためなのよ」

津田は案外な顏をした。岡本へ金策をしに行つて來いと夫から頼まれた時、それを斷然跳ね付けたものは、此小切手を持つて來たお延自身であつた。一週間と經たないうちに、何處からそんな好意が急に湧いて出たのだらうと思ふと、津田は不思議でならなかつた。それをお延は斯う說明した。

「そりや厭なのよ。此上叔父さんにお金の事なんかで迷惑を掛けるのは。けれども仕方がないわ、あなた。いざとなればその位の勇氣を出さなくつちや、妻としてのあたしの役目が濟みませんもの」

「叔父さんに譯を話したのかい」

「えゝ、そりや隨分辛かつたの」
お延は津田へ來る時の支度を大部分岡本に拵へて貰つてゐた。
「其上お金なんかには、些とも困らない顏を今日迄して來たんですもの。だから猶極りが悪いわ」
自分の性格から割り出して、斯ういふ場合の極りの悪さ加減は、津田にもよく呑み込めた。
「能く出來たね」
「云へば出來るわ、あなた。無いんぢやないんですもの。たゞ云ひ悪い丈よ」
「然し世の中には又お父さんだのお秀だのつていふ、六づかしやも揃つてるからな」
津田は却つて自尊心を傷けられたやうな顏付をした。お延はそれを取り繕ろうやうに云つた。
「なにさう云ふ意味ばかりで貰つて來た譯でもないのよ。叔父さんにはあたしに指輪を買つて呉れる約束があるのよ。お嫁に行くとき買つて遣らない代りに、今に買つて遣るつて、此間から左右云つてたのよ。だから其積で呉れたんでせう大方。心配しないでも可いわ」
津田はお延の指を眺めた。其所には自分の買つて遣つた寶石がちやんと光つてゐた。

百十三

二人は何時になく融け合つた。
今迄お延の前で體面を保つために武裝してゐた津田の心が吾知らず弛んだ。自分の父が鄙吝らしく彼女の眼に映りはしまいかといふ掛念、或は自分の豫期以下に彼女が父の財力を見縊りはしまいかといふ恐れ、二つのものが原因になつて、成る可く京都の方面に曖昧な幕を張り通さうとした警戒が解けた。さうして彼はそれに氣付かずにゐた。努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力で其所へ押し流されて來た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼を其所迄運んで來て呉れたと同じ事であつた。お延にはそれが嬉しかつた。改めやうとする決心なしに、改たまつた夫の態度には自然があつた。
同時に津田から見たお延にも、亦それと同樣の趣が出た。餘事は暫らく問題外に措くとして、結婚後彼等の間には、常に財力に關する妙な暗鬪があつた。さうしてそれは斯う云ふ因果から來た。普通の人のやうに富を誇りとしたがる津田は、其點に於て、自分を成る可く高くお延から評

價させるために、父の財産を實際より遙か餘計な額に見積つた所を、彼女に向つて吹聽した。それ丈ならまだ可かつた。彼の弱點はもう一歩先へ乘り越す事を忘れなかつた。彼のお延に匂はせた自分は、今より大變樂な身分にゐる若旦那であつた。必要な場合には、幾何でも父から補助を仰ぐ事が出來た。たとひ仰がないでも、月々の支出に困る憂は決してなかつた。お延と結婚した時の彼は、もう是丈の言責を彼女に對して脊負つて立つてゐたのと同じ事であつた。利巧な彼は、財力に重きを置く點に於て、彼に優るとも劣らないお延の性質を能く承知してゐた。極端に云へば、黄金の光りから愛其物が生れると迄信ずる事の出來る彼には、何うかしてお延の手前を取繕はなければならないといふ不安があつた。ことに彼は此點に於てお延から輕蔑されるのを深く恐れた。堀に依頼して毎月父から助けて貰ふようにしたのも、實は必要以外に斯んな魂膽が潜んでゐたからでもあつた。それでさへ彼は何處かに烟たい所を有つてゐた。少くとも彼女に對する内と外には大分の距離があつた。眼から鼻へ抜けるやうなお延にはまた其距離が手に取る如くに分つた。必然の勢ひ彼女は其所に不滿を抱かざるを得なかつた。然し彼女は夫の虚僞を責めるよりも寧ろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はたゞ水臭いと思つた。何故男らしく自分の弱點を妻の

前に曝け出して呉れないのかを苦にした。仕舞には、それを敢てしないやうな隔りのある夫なら、此方にも覺悟があると一人腹の中で極めた。すると其態度がまた木精のやうに津田の胸に反響した。二人は何處迄行つても、直に向き合ふ譯に行かなかつた。しかも遠慮があるので、成るべく其所には觸れないやうに慎しんでゐた。所がお秀との悶着が、偶然にもお延の胸にある此扉を一度にがらりと敲き破つた。しかもお延自身毫も其所に氣が付かなかつた。彼女は自分を夫の前に開放しようといふ努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまつた。だから津田にも丸で別人のやうに快よく見えた。

二人は斯ういふ風で、何時になく融け合つた。すると二人が融け合つた所に妙な現象がすぐ起つた。二人は今迄回避してゐた問題を平氣で取り上げた。二人は一所になつて、京都に對する善後策を講じ出した。

二人には同じ豫感が働いた。此事件は是丈で片付くまいといふ不安が双方の心を引き締めた。屹度お秀が何かするだらう。すれば直接京都へ向つて遣るに違ひない。さうして其結果は自然二人の不利益となるに極つてゐる。――此所迄は二人の一致する點であつた。それから先が肝心の

善後策になつた。然し其所へ來ると意見が區々で、容易に纏まらなかつた。

お延は仲裁者として第一に藤井の叔父を指名した。然し津田は首を掉つた。彼は叔父も叔母もお秀の味方である事を能く承知してゐた。次に津田の方から岡本は何うだらうと云ひ出した。けれども岡本は津田の父とそれ程深い交際がないと云ふ理由で、今度はお延が反對した。彼女は一層簡單に自分が和解の目的で、お秀の所へ行つて見ようかといふ案を立てた。是には津田も大した違存はなかつた。たとひ今度の事件の爲でなくとも、絶交を希望しない以上、何等かの形式のもとに、兩家の交際は復活されべき運命を有つてゐたからである。然しそれはそれとして、彼等はもう少し有効な方法を同時に講じて見たかつた。彼等は考へた。

仕舞に吉川の名が二人の口から同じやうに出た。彼の地位、父との關係、父から特別の依頼を受けて津田の面倒を見て呉れてゐる目下の事情、――數へれば數へる程、彼には有利な條件が具つてゐた。けれども其所には又一種の困難があつた。それ程親しく近付き惡い吉川に口を利いて貰はうとすれば、是非共其前に彼の細君を口說き落さなければならなかつた。所が其細君はお延に取つて大の苦手であつた。お延は津田の提議に同意する前に、少し首を傾けた。細君と仲善の

津田は又充分成効の見込が其所に見えてゐるので、熱心にそれを主張した。仕舞にお延はとう〳〵我を折つた。

事件後の二人は打ち解けて斯んな相談をした後で心持よく別れた。

百十四

前夜よく寐られなかつた疲勞の加はつた津田は其晩案外氣易く眠る事が出來た。翌日も亦透き通るやうな日差を眼に受けて、晴々しい空氣を欲硝子の外に眺めた彼の耳には、隣りの洗濯屋で例の通りど、し〳〵云はす音が、何處となしに秋の情趣を唆つた。

「……へ行くなら着て行かしやんせ。シツシツシ」

洗濯屋の男は、俗歌を唄ひながら、區切〳〵へシツシツシといふ言葉を入れた。それが如何にも忙がしさうに手を働かせてゐる彼等の姿を津田に想像させた。

彼等は突然變な穴から白い物を擔いで屋根へ出た。それから物干へ上つて、其白いものを隙間なく秋の空へ廣げた。此所へ來てから、日毎に繰り返される彼等の所作は單調であつた。しかし

勤勉であつた。それが果して何を意味してゐるか津田には解らなかつた。

彼は今の自分にもつと親切な事を頭の中で考へなければならなかつた。彼は吉川夫人の姿を憶ひ浮べた。彼の未來、それを眼の前に描き出すのは、餘りに漠然過ぎた。それを纏めやうとすると、何時でも吉川夫人が現はれた。平生から自分の未來を代表して呉れる此焦點には此際特別な意味が附着してゐた。

一には此間訪問した時からの引掛りがあつた。其時二人の間に封じ込められたある問題を、ぽたりと彼の頭に點じたのは彼女であつた。彼には其後を聽くまいとする努力があつた。又聽かうとする意志も動いた。既に封を切つたものが彼女であるとすれば、中味を披く權利は自分にあるやうにも思はれた。

二には京都の事が氣になつた。輕重を別にして考へると、此方が寧ろ急に逼つてゐた。一日も早く彼女に會ふのが得策のやうにも見えた。まだ四五日は何うしても動く事の出來ない身體を持ち扱つた彼は、昨日お延の歸る前に、彼女を自分の代りに夫人の所へ遣らうとした位であつた。それはお延に斷られたので、成立しなかつたけれども、彼は今でも其方が適當な遣口だと信じて

ゐた。

お延が何故斯ういふ用向を帶びて夫人を訪ねるのを嫌つたのか、津田は不思議でならなかつた。默つてゐてもそんな方面へ出入をしたがる女の癖に。と彼は其時考へた。夫人の前へ出られるためにわざと用事を拵らへて貰つたのと同じ事だのにと迄、自分の動議を强調して見た。然し何うしても引き受けたがらないお延を、たつて强ひる氣も亦其場合の彼には起らなかつた。それは夫婦打ち解けた氣分にも起因してゐたが、一方から見ると、またお延の辭退しやうにも關係してゐた。彼女は自分が行くと必ず失敗するからと云つた。然し其理由を述べる代りに、津田なら屹度成効するに違ないからと云つた。成効するにしても、病院を出た後でなければ會ふ譯に行かないんだから、遲くなる虞れがあると津田が注意した時、お延は又意外な返事を彼に與へた。彼女は夫人が屹度病院へ見舞に來るに違ないと斷言した。其時機を利用しさへすれば、一番自然に又一番簡單に事が運ぶのだと主張した。

津田は洗濯屋の干物を眺めながら、昨日の問答を斯んな風に、夫から夫へと手元へ手操り寄せて點檢した。すると吉川夫人は見舞に來て呉れさうでもあつた。又來て呉れさうにもなかつた。

つまりお延が何故來る方をさう堅く主張したのか解らなくなつた。彼は芝居の食堂で晩餐の卓に着いたといふ大勢を眼先に想像して見た。お延と吉川夫人の間に何んな會話が取り換はされたかを、小説的に組み合せても見た。けれども其會話の何處から此豫言が出て來たかの點になると、自分に解らないものとして投げて仕舞ふより外に手はなかつた。彼は既に幾分の直覺、不幸にして天が彼に與へて呉れなかつた幾分の直覺を、お延に許してゐた。其點で何時でも彼女を少し畏れなければならなかつた彼には、杜撰に其所へ觸れる勇氣がなかつた。と同時に、全然其直覺に信頼する事の出來ない彼は、何とかして此方から吉川夫人を病院へ呼び寄せる工夫はあるまいかと考へた。彼はすぐ電話を思ひ付いた。横着にも見えず、殊更でもなし、自然に彼女が此所迄出向いて來るやうな電話の掛け方はなからうかと苦心した。然し其苦心は水の泡を製造する努力と畧似たものであつた。いくら骨を折つて拵へても、すぐ後から消えて行く丈であつた。根本的に無理な空想を實現させようと巧らんでゐるのだから仕方がないと氣が付いた時、彼は一人で苦笑して又硝子越に表を眺めた。

表は何時か風立つた。洗濯屋の前にある一本の柳の枝が白い干物と一所になつて輕く搖れてゐ

た。それを掠めるやうに懸け渡された三本の電線も、餘所と調子を合せるやうにふら〳〵と動いた。

百十五

下から上つて來た醫者には、其時の津田が如何にも退屈さうに見えた。顏を合せるや否や彼は「如何です」と訊いた後で、「もう少しの我慢です」とすぐ慰めるやうに云つた。それから彼は津田のためにガーゼを取り易へて呉れた。

「まだ創口の方はそつとして置かないと、危險ですから」

彼は斯う注意して、ぢかに局部を抑へ付けてゐる個所を少し緩めて見たら、血が黄染み出したといふ話を用心のためにして聽かせた。

取り易へられたガーゼは一部分に過ぎなかつた。要所を剝がすと、血が迸しるかも知れないといふ身體では、津田も無理をして宅へ歸る譯に行かなかつた。

「矢ツ張豫定通りの日數は動かずにゐるより外に仕方がないでせうね」

醫者は氣の毒さうな顏をした。

「なに經過次第ぢや、それ程大事を取るにも及ばないんですがね」

それでも醫者は、時間と經濟に不足のない、何處から見ても餘裕のある患者として、津田を取扱かつてゐるらしかつた。

「別に大した用事がお有になる譯でもないんでせう」

「えゝ一週間位は此所で暮らしても可いんです。然し臨時に一寸事件が起つたので……」

「はあ。――然しもう直です。もう少しの辛防です」

是より外に云ひ樣のなかつた醫者は、外來患者の方がまだ込み合はないためか、其所へ坐つて二三の雜談をした。中で、彼がまだ助手としてある大きな病院に勤めてゐる頃に起つたといふ一口話が、思はず津田を笑はせた。看護婦が藥を間違へたために患者が死んだのだといふ嫌疑をかけて、是非其看護婦を毆らせろと、醫局へ逼つた人があつたといふ其話は、津田から見ると如何にも滑稽であつた。斯ういふ性質の人と正反對に生み付けられた彼は、其所に馬鹿らしさ以外の何物をも見出す事が出來なかつた。平たく云ひ直すと、彼は向ふの短所ばかりに氣を奪られた。

さうして其裏側へ暗に自分の長所を點綴して喜んだ。だから自分の短所には決して思ひ及ばなかつたと同一の結果に歸着した。

醫者の診察が濟んだ後で、彼は下らない病氣のために、一週間も一つ所に括り付けられなければならない現在の自分を悲觀したくなつた。氣の所爲か彼には其現在が大變貴重に見えた。もう少し治療を後廻しにすれば好かつたといふ後悔さへ腹の中には起つた。

彼は又吉川夫人の事を考へ始めた。何うかして彼女を此所へ呼び付ける工夫はあるまいかと思ふよりも、何うかして彼女が此所へ來て吳れゝば可いがと思ふ方に、心の調子が段々移つて行つた。自分を見破られるといふ意味で、平生からお延の直覺を惡く評價してゐたにも拘はらず、例外な此場合丈には、それが中つて欲しいやうな氣も何處かでした。

彼はお延の置いて行つた書物の中から、其一冊を抽いた。岡本の所藏にかゝる丈あるなと首肯づかせる樣な趣が其所此所に見えた。不幸にして彼は諧謔を解する事を知らなかつた。中に書いてある活字の意味は、頭に通じても胸にはそれ程應へなかつた。頭にさへ呑み込めないのも續々出て來た。責任のない彼は、自分に手頃なのを見付けやうとして、どし〳〵飛ばして行つた。す

ると偶然下のやうなのが彼の眼に觸れた。

「娘の父が青年に向つて、あなたは私の娘を愛してお出なのですかと訊いたら、青年は、愛するの愛さないのつていふ段ぢやありません、お嬢さんの爲なら死なうと迄思つてゐるんです。あの懷かしい眼で、優しい眼遣ひをたゞの一度でもして頂く事が出來るなら、僕はもうそれ丈で死ぬのです。すぐあの二百尺もあらうといふ崖の上から、岩の上へ落ちて、滅茶苦茶な血だらけな塊りになつて御覽に入れます。と答へた。娘の父は首を掉つて、實を云ふと、私も少し嘘を吐く性分だが、私の家のやうな小人數な家族に、嘘付が二人出來るのは、少し考へものですからね。と答へた」

嘘吐といふ言葉が何時もより皮肉に津田を苦笑させた。彼は腹の中で、嘘吐な自分を肯がふ男であつた。同時に他人の嘘をも根本的に認定する男であつた。それでゐて少しも厭世的にならない男であつた。寧ろ其反對に生活する事の出來るために、嘘が必要になるのだ位に考へる男であつた。彼は、今迄斯ういふ漠然とした人世觀の下に生きて來ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はたゞ行つたのである。だから少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなる丈

であつた。

「愛と虚僞」

自分の讀んだ一口噺から此二字を暗示された彼は、二つのものゝ關係を何う説明して可いかに迷つた。彼は自分に大事なある問題の所有者であつた。內心の要求上是非共それを解決しなければならない彼は、實驗の機會が彼に與へられない限り、頭の中で徒らに考へなければならなかつた。哲學者でない彼は、自身に今迄行つて來た人世觀をすら、組織正しい形式の下に、わが眼の前に並べて見る事が出來なかつたのである。

百十六

津田は纏まらない事をそれからそれへと考へた。其うち何時か午過ぎになつてしまつた。彼の頭は疲れてゐた。もう一つ事を長く思ひ續ける勇氣がなくなつた。然し秋とは云ひながら、獨り寐てゐるには日が餘りに長過ぎた。彼は退屈を感じ出した。さうして又お延の方に想ひを馳せた。彼女の姿を今日も自分の眼の前に豫期してゐた彼は横着であつた。今迄彼女の手前憚からなけれ

ばならないやうな事ばかりを、散々考へ拔いた揚句、それが厭になると、すぐお延はもう來さうなものだと思つて平氣でゐた。自然頭の中に湧いて出るものに對して、責任は有てないといふ辯解さへ其時の彼にはなかつた。彼の見たお延に不可解な點がある代りに、自分もお延の知らない事實を、胸の中に納めてゐるのだ位の料簡は、遠くの方で働らいてゐたかも知れないが、それさへ、いざとならなければ判然した言葉になつて、彼の頭に現はれて來る筈がなかつた。

お延は中々來なかつた。お延以上に待たれる吉川夫人は固より姿を見せなかつた。津田は面白くなかつた。先刻から近くで誰かが遣つてゐる、彼の最も嫌な謠の聲が、不快に彼の耳を刺戟した。彼の記憶にある謠曲指南といふ細長い看板が急に思ひ出された。それは洗濯屋の筋向ふに當る二階建の家であつた。二階が稽古をする座敷にでもなつてゐると見えて、距離の割に聲の方が無暗に大きく響いた。他が勝手に遣つてゐるものを止めさせる權利を何處にも見出し得ない彼は、彼の不平を何うする事も出來なかつた。彼はたゞ早く退院したいと思ふ丈であつた。

柳の木の後にある赤い煉瓦造りの倉に、山形の下に一を引いた屋號のやうな紋が付いてゐて、其左右に何の爲とも解らない、大きな折釘に似たものが壁の中から突き出してゐる所を、津田が

見るとも見ないとも片の付かない眼で、ぼんやり眺めてゐた時、遠慮のない足音が急に聞こえて、誰かゞ階子段を、どし／＼上つて來た。津田はおやと思つた。此足音の調子から、其主がもう七分通り、彼の頭の中では推定されてゐた。

彼の豫覺はすぐ事實になつた。彼が室の入口に眼を轉ずると、殆んどおツつかツつに、小林は貰ひ立ての外套を着た儘つか／＼入つて來た。

「何うかね」

彼はすぐ胡坐をかいた。津田は寧ろ苦しさうな笑ひを挨拶の代りにした。何しに來たんだといふ心持が、顏を見ると共にもう起つてゐた。

「是だ」と彼は外套の袖を津田に突き付けるやうにして見せた。

「有難う、お蔭で此冬も生きて行かれるよ」

小林はお延の前で云つたと同じ言葉を津田の前で繰り返した。然し津田はお延からそれを聽かされてゐなかつたので、別に皮肉とも思はなかつた。

「奥さんが來たらう」

小林は又斯う訊いた。
「來たさ。來るのは當り前ぢやないか」
「何か云つてたらう」
津田は「うん」と答へようか、「いゝや」と答へようかと思つて、少し躊躇した。彼は小林が何んな事をお延に話したか、それを知りたかつた。それを彼の口から此所で繰り返させさへすれば、自分の答は「うん」だらうが、「いゝえ」だらうが、同じ事であつた。然し何方が成功するか其所は咄嗟の際に極める譯に行かなかつた。所が其態度が意外な意味になつて小林に反響した。
「奥さんが怒つて來たな。屹度そんな事だらうと、僕も思つてたよ」
容易に手掛りを得た津田は、すぐそれに縋り付いた。
「君があんまり苛めるからさ」
「いや苛めやしないよ。たゞ少し調戯ひ過ぎたんだ、可哀想に。泣きやしなかつたかね」
津田は少し驚ろいた。
「泣かせる樣な事でも云つたのかい」

「なに何うせ僕の云ふ事だから出鱈目さ。つまり奥さんは、岡本さん見たいな上流の家庭で育つたので、天下に僕のやうな愚劣な人間が存在してゐる事をまだ知らないんだ。それで一寸した事迄苦にするんだらうよ。あんな馬鹿に取り合ふなと君が平生から教へて置きさへすれば夫で可いんだ」
「さう教へてゐる事はゐるよ」と津田も負けずに遣り返した。小林はハヽと笑つた。
「まだ少し訓練が足りないんぢやないか」
津田は言葉を改めた。
「然し君は一體何んな事を云つて、彼奴に調戯つたのかい」
「そりやもうお延さんから聽いたらう」
「いゝや聽かない」
二人は顔を見合せた。互ひの胸を忖度しようとする試みが、同時に其所に現はれた。

百十七

津田が小林に本音を吹かせやうとする所には、ある特別の意味があつた。彼はお延の性質を其著るしい斷面に於て能く承知してゐた。お秀と正反對な彼女は、飽く迄素直に、飽く迄閑雅な態度を、絶えず彼の前に示す事を忘れないと共に、何うしても亦彼の自由にならない點を、同樣な程度でちやんと有つてゐた。彼女の才は一つであつた。けれども其應用は兩面に亘つてゐた。是は夫に知らせてならないと思ふ事、又は隱して置く方が便宜だと極めた事、さういふ場合になると、彼女は全く津田の手に餘る細君であつた。彼女が柔順であればある程、津田は彼女から何にも堀り出す事が出來なかつた。彼女と小林の間に昨日何んな遣り取りが起つたか、それはお秀の騷ぎで委細を訊く暇もないうちに、時間が經つてしまつたのだから、事實已を得ないとしても、もし左右いふ故障のない時に、津田から詳しい有の儘を問はれたら、お延はおいそれと彼の希望通り、綿密な返事を惜まずに、彼の要求を滿足させたらうかと考へると、其所には大きな疑問があつた。お延の平生から推して、津田は寧ろ胡麻化されるに違ないと思つた。ことに彼がもしやと思つてゐる點を、小林が遠慮なく喋舌つたとすれば、お延は猶の事、それを聽かない振をして、默つて夫の前を通り拔ける女らしく見えた。少くとも津田の觀察した彼女にはそれ丈の餘裕が充

分あつた。既にお延の方を諦らめなければならないとすると、津田は自分に必要な知識の出所を、小林に向つて求めるより外に仕方がなかつた。

小林は何だか其所を承知してゐるらしかつた。

「なに何にも云やしないよ。嘘だと思ふなら、もう一遍お延さんに訊いて見給へ。尤も僕は歸りがけに惡いと思つたから、詫まつて來たがね。實を云ふと、何で詫まつたか、僕自身にも解らない位のものさ」

彼は斯う云つて嘯いた。それからいきなり手を延べて、津田の枕元にある讀み掛けの書物を取り上げて、一分ばかりそれを默讀した。

「斯んなものを讀むのかね」と彼は左も輕蔑した口調で津田に訊いた。彼はぞんざいに頁を剝繰りながら、終りの方から逆に始めへ來た。さうして其所に岡本といふ小さい見留印を見出した時、彼は「ふん」と云つた。

「お延さんが持つて來たんだな。道理で妙な本だと思つた。——時に君、岡本さんは金持だらうね」

「そんな事は知らないよ」
「知らない筈はあるまい。だつてお延さんの里ぢやないか」
「僕は岡本の財産を調べた上で、結婚なんかしたんぢやないよ」
「さうか」
此單純な「さうか」が變に津田の頭に響いた。「岡本の財産を調べないで、君が結婚するものか」といふ意味にさへ取れた。
「岡本はお延の叔父だぜ、君知らないのか。里でも何でもありやしないよ」
「さうか」
小林は又同じ言葉を繰り返した。津田は猶不愉快になつた。
「そんなに岡本の財産が知りたければ、調べて遣らうか」
小林は「えへゝ」と云つた。「貧乏すると他の財産迄苦になつて仕様がない」
津田は取り合はなかつた。それで其問題を切り上げるかと思つてゐると、小林はすぐ元へ歸つて來た。

「然し幾何位あるんだらう、本當の所」
斯う云ふ態度は正しく彼の特色であつた。さうして何時でも二樣に解釋する事が出來た。頭から向ふを馬鹿だと認定して仕舞へばそれ迄であると共に、一度此方が馬鹿にされてゐるのだと思ひ出すと、又際限もなく馬鹿にされてゐる譯にもなつた。彼に對する津田は實の所半信半疑の眞中に立つてゐた。だから其所に幾分でも自分の弱點が潜在する場合には、馬鹿にされる方の解釋に傾むかざるを得なかつた。たゞ相手を付け上らせない用心をするより外に仕方がなかつた彼は、たゞ微笑した。
「少し借りて遣らうか」
「借りるのは厭だ。貰ふなら貰つても可いがね。——いや貰ふのも御免だ、何うせ臭れる氣遣はないんだから。仕方がなければ、まあ取るんだな」小林ははゝと笑つた。「一つ朝鮮へ行く前に、面白い秘密でも提供して、岡本さんから少し取つて行くかな」
津田はすぐ話を其朝鮮へ持つて行つた。
「時に何時立つんだね」

「まだ確かり判らない」
「然し立つ事は立つのかい」
「立つ事は立つ。君が催促しても、しなくつても、立つ日が來ればちやんと立つ」
「僕は催促をするんぢやない。時間があつたら君の爲に送別會を開いて遣らうといふのだ」
今日小林から充分な事が聽けなかつたら、其送別會でも利用して遣らうと思ひ付いた津田は、斯う云つて豫備としての第二の機會を暗に作り上げた。

百十八

故意だか偶然だか、津田の持つて行かうとする方面へは中々持つて行かれない小林に對して、此注意は寧ろ必要かも知れなかつた。彼は何時迄も津田の問に應ずるやうな又應じないやうな態度を取つた。さうして執着く自分自身の話題にばかり纏綿はつた。それが又津田の訊かうとする事と、間接ではあるが深い關係があるので、津田は蒼蠅くもあり、焦れつたくもあつた。何となく遠廻しに痛振られるやうな氣もした。

「君吉川と岡本とは親類かね」と小林が云ひ出した。
津田には此質問が無邪氣とは思へなかつた。
「親類ぢやない、たゞの友達だよ。何時かも君が訊いた時に、さう云つて話したぢやないか」
「さうか、あんまり僕に關係の遠い人達の事だもんだから、つい忘れちまつた。然し彼等は友達にしても、たゞの友達ぢやあるまい」
「何を云つてるんだ」
津田はつい其後へ馬鹿野郎と付け足したかつた。
「いや、餘程の親友なんだらうといふ意味だ。そんなに怒らなくつても可からう」
吉川と岡本とは、小林の想像する通りの間柄に違なかつた。單なる事實はたゞそれ丈であつた。然し其裏に、津田とお延を貼り付けて、裏表の意味を同時に眺める事は自由に出來た。
「君は仕合せな男だな」と小林が云つた。「お延さんさへ大事にしてゐれば間違はないんだから」
「だから大事にしてゐるよ。君の注意がなくつたつて、其位の事は心得てゐるんだ」

「さうか」
小林は又「さうか」といふ言葉を使つた。此眞面目腐つた「さうか」が重なるたびに、津田は彼から脅やかされるやうな氣がした。
「然し君は僕などと違つて聰明だから可い。他はみんな君がお延さんに降參し切つてるやうに思つてるぜ」
「他とは誰の事だい」
「先生でも奥さんでもさ」
藤井の叔父や叔母から、さう思はれてゐる事は、津田にも畧見當が付いてゐた。
「降參し切つてゐるんだから、さう見えたつて仕方がないさ」
「さうか。――然し僕のやうな正直者には、迚も君の眞似は出來ない。君は矢ッ張りえらい男だ」
「君が正直で僕が僞物なのか。其僞物が又偉くつて正直者は馬鹿なのか。君は何時又そんな哲學を發明したのかい」

「哲學は餘程前から發明してゐるんだがね。今度改めてそれを發表しようと云ふんだ、朝鮮へ行くに就いて」
津田の頭に妙な暗示が閃めかされた。
「君旅費はもう出來たのか」
「旅費は何うでも出來る積だがね」
「社の方で出して呉れる事に極つたのかい」
「いゝや。もう先生から借りる事にしてしまつた」
「さうか。そりや好い具合だ」
「些とも好い具合ぢやない。僕は是でも先生の世話になるのが氣の毒で堪らないんだ」
斯ういふ彼は、平氣で自分の妹のお金さんを藤井に片付けて貰ふ男であつた。
「いくら僕が耻知らずでも、此上金の事で、先生に迷惑を懸けては濟まないからね」
津田は何とも答へなかつた。小林は無邪氣に相談でもするやうな調子で云つた。
「君何處かに强奪る所はないかね」

「まあないね」と云ひ放つた津田は、わざとそつぽを向いた。
「ないかね。何處かにありさうなもんだがな」
「ないよ。近頃は不景氣だから」
「君は何うだい。世間は兎に角、君丈は何時も景氣が好ささうぢやないか」
「馬鹿云ふな」
岡本から貰つた小切手も、お秀の置いて行つた紙包も、みんなお延に渡してしまつた後の彼の財布は空と同じ事であつた。よしそれが手元にあつたにした所で、彼は此場合小林のために金錢上の犧牲を拂ふ氣は起らなかつた。第一事が其所迄切迫して來ない限り、彼は相談に應ずる必要を毫も認めなかつた。
不思議に小林の方でも、それ以上津田を押さなかつた。其代り突然妙な所へ話を切り出して彼を驚ろかした。
其朝藤井へ行つた彼は、其所で例もするやうに晝飯の馳走になつて、長い時間を原稿の整理で過ごしてゐるうちに、玄關の格子が開いたので、ひよいと自分で取次に出た。さうして其所に偶

然お秀の姿を見出したのである。
小林の話を其所迄聽いた時、津田は思はず腹の中で「畜生ッ先廻りをしたな」と叫んだ。然したゞそれ丈では濟まなかつた。小林の頭にはまだ津田を驚ろかせる材料が殘つてゐた。

百十九

然し彼の驚ろかし方には、また彼一流の順序があつた。彼は一番始めに斯んな事を云つて津田に調戯つた。
「兄妹喧嘩をしたんだつて云ふぢやないか。先生も奥さんも、お秀さんに喋舌り付けられて弱つてたぜ」
「君はまた傍でそれを聽いてゐたのか」
小林は苦笑しながら頭を搔いた。
「なに聽かうと思つて聽いた譯でもないがね。まあ天然自然耳へ入つたやうなものだ。何しろ喋舌る人がお秀さんで、喋舌らせる人が先生だからな」

お秀には何處か片意地で一本調子な趣があつた。それに一種の刺戟が加はると、平生の落付が全く無くなつて、不斷と打つて變つた猛烈さをひよつくり出現させる所に、津田とは丸で違つた特色があつた。叔父は又叔父で、何でも構はず底の底迄突き留めなければ承知の出來ない男であつた。單に言葉の上丈でも可いから、前後一貫して俗にいふ辻褄が合ふ最後迄行きたいといふのが、斯ういふ場合相手に對する彼の態度であつた。筆の先で思想上の問題を始終取り扱かひ付けてゐる癖が、活字を離れた彼の日常生活にも憑り移つてしまつた結果は、其所によく現はれた。彼は相手に幾何でも口を利かせた。其代り又幾何でも質問を掛けた。それが或程度迄行くと、質問といふ性質を離れて、詰問に變化する事さへ屢あつた。

津田は心の中で、此叔父と妹と對坐した時の樣子を想像した。ことによると其所で又一波瀾起したのではあるまいかといふ疑さへ出た。然し小林に對する手前もあるので、上部はわざと高く出た。

「大方滅茶苦茶に僕の惡口でも云つたんだらう」

小林は御挨拶にたゞ高笑ひをした後で、斯んな事を云つた。

「だが君にも似合はないね、お秀さんと喧嘩をするなんて」

「僕だからしたのさ。彼奴だつて堀の前なら、もつと遠慮すらあね」

「成程さうかな。世間ぢやよく夫婦喧嘩つていふが、夫婦喧嘩より兄妹喧嘩の方が普通なものかな。僕はまだ女房を持つた經驗がないから、其方のはうの消息は丸で解らないが、是でも妹はあるから兄妹の味なら能く心得てゐる積だ。君何だぜ。僕のやうな兄でも、妹と喧嘩なんかした覺はまだないぜ」

「そりや妹次第さ」

「けれども其所は又兄次第だらう」

「いくら兄だつて、少しは腹の立つ場合もあるよ」

小林はにや〳〵笑つてゐた。

「だが、いくら君だつて、今お秀さんを怒らせるのが得策だとは思つてやしまい」

「そりや當り前だよ。好んで誰が喧嘩なんかするもんか。あんな奴と」

小林は益笑つた。彼は笑ふたびに一調子づゝ餘裕を生じて來た。

「蓋し已を得なかつた譯だらう。然しそれは僕の云ふ事だ。僕は誰と喧嘩したつて構はない男だ。誰と喧嘩したつて損をしつこない境遇に沈淪してゐる人間だ。喧嘩の結果がもし何處かにあるとすれば、それは僕の損にやならない。何となれば、僕は未だ曾て損になるべき何物をも最初から有つてゐないんだからね。要するに喧嘩から起り得る凡ての變化は、みんな僕の得になる丈なんだから、僕は寧ろ喧嘩を希望しても可い位なものだ。けれども君は違ふよ。君の喧嘩は決して得にやならない。さうして君程又損得利害をよく心得てゐる男は世間にたんとないんだ。たゞ心得てる許ぢやない、君はさうした心得の下に、朝から晩迄寐たり起きたりしてゐられる男なんだ。少くとも左右しなければならないと始終考へてゐる男なんだ。好いかね。其君にして——」

津田は面倒臭さうに小林を遮ぎつた。

「よし解つた。解つたよ。つまり他と衝突するなと注意して呉れるんだらう。ことに君と衝突しちや僕の損になる丈だから、成るべく事を穏便にしろといふ忠告なんだらう、君の主意は」

小林は惚けた顏をして濟まし返つた。

「何僕と？僕はちつとも君と喧嘩をする氣はないよ」

「もう解つたといふのに」

「解つたらそれで可いがね。誤解のないやうに注意して置くが、僕は先刻からお秀さんの事を問題にしてゐるんだぜ、君」

「それも解つてるよ」

「解つてるつて、そりや京都の事だらう。彼方が不首尾になるといふ意味だらう」

「勿論さ」

「所が君それ丈ぢやないぜ。まだ外にも響いて來るんだぜ、氣を付けないと」

小林は其所で句を切つて、自分の言葉の影響を試驗するために、津田の顏を眺めた。津田は果して平氣でゐる事が出來なかつた。

百二十

小林はこゝだといふ時機を捕まへた。

「お秀さんはね君」と云ひ出した時の彼は、もう津田を擒にしてゐた。

「お秀さんはね君、先生の所へ來る前に、もう一軒外へ廻つて來たんだぜ。其一軒といふのは何處の事だか、君に想像が付くか」

津田には想像が付かなかつた。少なくとも此事件に就いて彼女が足を運びさうな所は、藤井以外にある筈がなかつた。

「そんな所は東京にないよ」

「いやあるんだ」

津田は仕方なしに、頭の中で又あれかこれかと物色して見た。然しいくら考へても、見當らないものは矢ツ張見當らなかつた。仕舞に小林が笑ひながら、其宅の名を云つた時に、津田は果して驚ろいたやうに大きな聲を出した。

「吉川？吉川さんへ又何うして行つたんだらう。何にも關係がないぢやないか」

津田は不思議がらざるを得なかつた。

たゞ吉川と堀を結び付ける丈の事なら、津田にも容易に出來た。強い空想の援に依る必要も何にもなかつた。津田夫婦の結婚するとき、表向媒妁の勞を取つて呉れた吉川夫婦と、彼の妹にあ

たるお秀と、其夫の堀とが社交的に關係を有つてゐるのは、誰の眼にも明らかであつた。然しその緣故で、此問題を提さげたお秀が、とくに吉川の門に向ふ理由は何處にも發見出來なかつた。

「たゞ訪問のために行つた丈だらう。單に敬意を拂つたんだらう」

「所が左右でないらしいんだ。お秀さんの話を聽いてゐると」

津田は俄かに其話が聽きたくなつた。小林は彼を滿足させる代りに注意した。

「然し君といふ男は、非常に用意周到なやうで何處か抜けてるね。あんまり抜けまい抜けまいとするから、自然手が廻りかねる譯かね。今度の事だつて、左右ぢやないか、第一お秀さんを怒らせる法はないよ、君の立場として。それから怒らせた以上、吉川の方へ突ツ走らせるのは愚だよ。其上吉川の方へ向いて行く筈がないと思ひ込んで、初手から高を括つてゐるなんぞは、君の平生にも似合はないぢやないか」

結果の上から見た津田の隙間を探し出す事は小林にも容易であつた。

「一體君のフアーザーと吉川とは友達だらう。さうして君の事はフアーザーから吉川に萬事宜しく願つてあるんだらう。其所へお秀さんが馳け込むのは當り前ぢやないか」

津田は病院へ來る前、社の重役室で吉川から聽かされた「年寄に心配を掛けては不可い。君が東京で何をしてゐるか、ちやんと此方で解つてるんだから、もし不都合な事があれば、京都へ知らせて遣る丈だ。用心しろ」といふ意味の言葉を思ひ出した。それは今から解釋して見ても冗談半分の訓戒に過ぎなかつた。然しもしそれを此所で眞面目一式な文句に轉倒するものがあるとすれば、其作者はお秀であつた。

「隨分突飛な奴だな」

突飛といふ性格が彼の家傳にない丈彼の批評には意外といふ觀念が含まれてゐた。

「一體何を云やがつたらう、吉川さんで。——彼奴の云ふ事を眞向に受けてゐると、可いのは自分丈で、外のものはみんな惡くなつちまうんだから困るよ」

津田の頭には直接の影響以上に、もつと遠くの方にある大事な結果がちら〳〵した。吉川に對する自分の信用、吉川と岡本との關係、岡本とお延との緣合、それ等のものがお秀の遣口一つで何う變化して行くか分らなかつた。

「女は淺墓なもんだからな」

此言葉を聽いた小林は急に笑ひ出した。今迄笑つたうちで一番大きな其笑ひ方が、津田をはつと思はせた。彼は始めて自分が何を云つてゐるかに氣が付いた。

「そりや何うでも可いが、お秀が吉川へ行つて何んな事を喋舌つたのか、叔父に話してゐた所を君が聽いたのなら、敎へて臭れ玉へ」

「何かしきりに云つてたがね。實をいふと、僕は面倒だから碌に聽いちやゐなかつたよ」

斯う云つた小林は肝心な所へ來て、知らん顏をして圈外へ出てしまつた。津田は失望した。其失望を暫く味はつた後で、小林は又圈內へ歸つて來た。

「しかしもう少し待つて玉へ。否でも應でも聽かされるよ」

津田はまさかお秀が又來る譯でもなからうと思つた。

「なにお秀さんぢやない。お秀さんは直に來やしない。其代りに吉川の細君が來るんだ。嘘ぢやないよ。此耳で慥に聽いて來たんだもの。お秀さんは細君の來る時間迄明言した位だ。大方もう少ししたら來るだらう」

お延の豫言は中つた。津田が何うかして呼び付けたいと思つてゐる吉川夫人は、何時の間にか

來る事になつてゐた。

百二十一

津田の頭に二つのものが相繼いで閃めいた。一つは是から此所へ來る其吉川夫人を旨く取扱はなければならないといふ事前の暗示であつた。彼女の方から病院迄足を運んで呉れる事は、豫定の計畫から見て、彼の最も希望する所には違なかつたが、來訪の意味がこゝに新らしく付け加へられた以上、それに對する彼の應答振も變へなければならなかつた。此場合に於る夫人の態度を想像に描いて見た彼は、多少の不安を感じた。お秀から偏見を注ぎ込まれた後の夫人と、まだ反感を煽られない前の夫人とは、彼の眼に映る所丈でも、大分違つてゐた。けれども其所には平生の自信も亦伴なつてゐた。彼には夫人の持つてくる偏見と反感を、一場の會見で、充分引繰り返して見せるといふ覺悟があつた。少くとも此所で夫丈の事をして置かなければ、自分の未來が危なかつた。彼は三分の不安と七分の信力をもつて、彼女の來訪を待ち受けた。

殘る一つの閃めきが、お延に對する態度を、もう一遍臨時に變更する便宜を彼に教へた。先刻

迄の彼は退屈の餘り彼女の姿を刻々に待ち設けてゐた。然し今の彼には別途の緊張があつた。彼は全然異なつた方面の刺戟を豫想した。お延はもう不用であつた。といふよりも、來られては却つて迷惑であつた。其上彼はたゞ二人、夫人と差向ひで話して見たい特殊な問題も控へてゐた。彼はお延と夫人が此所で一所に落ち合ふ事を、是非共防がなければならないと思ひ定めた。

附帶條件として、小林を早く追拂ふ手段も必要になつて來た。然るに其小林は今にも吉川夫人が見えるやうな事を云ひながら、自分の歸る氣色を何處にも現はさなかつた。彼は他の邪魔になる自分を苦にする男ではなかつた。時と場合によると、それと知つて、わざ〳〵邪魔迄しかねない人間であつた。しかも其所迄行つて、實際氣が付かずに迷惑がらせるのか、又は心得があつて故意に困らせるのか、其判斷を確と他に與へずに平氣で切り拔けてしまふ焦慮つたい人物であつた。

津田は欠伸をして見せた。彼の心持と全く釣り合はない此所作が彼を二つに割つた。何處かそわ〳〵しながら、如何にも所在なささうに小林と應對する所に、中斷された氣分の特色が斑になつて出た。それでも小林は濟ましてゐた。枕元にある時計を又取り上げた津田は、それを置くと

同時に、已を得ず質問を掛けた。
「君何か用があるのか」
「ない事もないんだがね。なにそりや今に限つた譯でもないんだ」
津田には彼の意味が畧解つた。然しまだ降參する氣にはなれなかつた。と云つて、すぐ擊退する勇氣は猶更なかつた。彼は仕方なしに默つてゐた。すると小林が斯んな事を云ひ出した。
「僕も吉川の細君に會つて行かうかな」
冗談ぢやないと津田は腹の中で思つた。
「何か用があるのかい」
「君は能く用々つて云ふが、何も用があるから人に會ふとは限るまい」
「然し知らない人だからさ」
「知らない人だから一寸會つて見たいんだ。何んな樣子だらうと思つてね。一體僕は金持の家庭へ入つた事もないし、又そんな人と交際つた例もない男だから、つい斯ういふ機會に、一寸でも可いから、會つて置きたくなるのさ」

「見世物ぢやあるまいし」
「いや單なる好奇心だ。それに僕は閑だからね」
津田は呆れた。彼は小林のやうなみすぼらしい男を、友達の内に有つてゐるといふ証據を、夫人に見せるのが厭でならなかつた。あんな人と付合つてゐるのかと輕蔑された日には、自分の未來に迄關係すると考へた。
「君も餘程呑氣だね。吉川の奥さんが今日此所へ何しに來るんだか、君だつて知つてるぢやないか」
「知つてる。――邪魔かね」
津田は最後の引導を渡すより外に途がなくなつた。
「邪魔だよ。だから來ないうちに早く歸つて呉れ」
小林は別に怒つた樣子もしなかつた。
「さうか、ぢや歸つても可い。歸つても可いが、其代り用丈は云つて行かう、折角來たものだから」

面倒になつた津田は、とう〳〵自分の方から其用を云つてしまつた。

「金だらう。僕に相當の御用なら承つても可い。然し此所には一文も持つてゐない。と云つて、又外套のやうに留守へ取りに行かれちや困る」

小林はにや〳〵笑ひながら、ぢや何うすれば可いんだといふ問を顏色で掛けた。まだ小林に聽く事の殘つてゐる津田は、出立前もう一遍彼に會つて置く方が便宜であつた。けれども彼とお延と落ち合ふ掛念のある病院では都合が惡かつた。津田は送別會といふ名の下に、彼等の出會ふべき日と時と場所とを指定した後で、漸く此厄介者を退去させた。

百二十二

津田はすぐ第二の豫防策に取り掛つた。彼は床の上に置かれた小型の化粧箱を取り除けて、其下から例のレターペーパーと同じラヱンダー色の封筒を引き拔くや否や、すぐ萬年筆を走らせた。今日は少し都合があるから、見舞に來るのを見合せて呉れといふ意味を、簡單に書き下した手紙は一分掛るか掛らないうちに出來上つた。氣の急いた彼には、それを讀み直す暇さへ惜かつた。

彼はすぐ封をしてしまつた。さうして中味の不完全なために、お延が何んな疑ひを起すかも知れないといふ事には、少しの顧慮も拂はなかつた。平生の用心を彼から奪つた此場合は、彼を忽卒しくしたのみならず彼の心を一直線にしなければ已まなかつた。彼は手紙を持つた儘、すぐ二階を下りて看護婦を呼んだ。

「一寸急な用事だから、すぐ是を持たせて車夫を宅迄遣つて下さい」

看護婦は「へえ」と云つて封書を受け取つたなり、何處に急な用事が出來たのだらうといふ顏をして、宛名を眺めた。津田は腹の中で往復に費やす車夫の時間さへ考へた。

「電車で行くやうにして下さい」

彼は行き違ひになる事を恐れた。手紙を受け取らない前にお延が病院へ來ては折角の努力も無駄になる丈であつた。

二階へ歸つて來た後でも、彼はそれ許が苦になつた。さう思ふと、お延がもう宅を出て、電車へ乘つて、此方の方角へ向いて動いて來るやうな氣さへした。自然それと一所に頭の中に纏付るのは小林であつた。もし自分の目的が達せられない先に、細君が階子段の上に、すらりとした其

姿を現はすとすれば、それは全く小林の罪に相違ないと彼は考へた。貴重な時間を無駄に費やさせられた揚句、賴むやうにして歸つて貰つた彼の後姿を見送つた津田は、それでもう少しで刻下の用を辨ずるために、小林を利用する所であつた。「面倒でも歸りに一寸宅へ寄つて、今日來てはいけないとお延に注意して呉れ」。斯ういふ言葉がつい口の先へ出掛つたのを、彼は驚ろいて、引ツ込ましてしまつたのである。もし是が小林でなかつたなら、此際何んなに都合が可かつたらうにとさへ實は思つたのである。

津田が神經を鋭どくして、今來るか今來るかといふ細かい豫期に支配されながら、吉川夫人を刻々に待ち受けてゐる間に、彼の看護婦に渡したお延への手紙は、また彼のいまだ想ひ到らない運命に到着すべく餘儀なくされた。

手紙は彼の命令通り時を移さず車夫の手に渡つた。車夫は又看護婦の命令通り、それを手に持つた儘すぐ電車へ乘つた。それから教へられた通りの停留所で下りた。其所を少し行つて、大通りを例の細い往來へ切れた彼は、何の苦もなく又名宛の苗字を小綺麗な二階建の一軒の門札に見出した。彼は玄關へ掛つた。其所で手に持つた手紙を取次に出たお時に渡した。

此所迄は凡ての順序が津田の思ひ通りに行つた。然し其後には、書面を認める時、丸で彼の頭の中に入つてゐなかつた事實が横はつてゐた。手紙はすぐお延の手に落ちなかつた。

然し津田の懸念したやうに、宅にゐなかつたお延は、彼の懸念したやうに病院へ出掛けたのではなかつた。彼女は別に行先を控へてゐた。しかもそれは際どい機會を旨く利用しようとする敏捷な彼女の手腕を充分に發揮した結果であつた。

其日のお延は朝から通例のお延であつた。彼女は不斷のやうに起きて、不斷のやうに動いた。津田のゐる時と萬事變りなく働らいた彼女は、それでも夫の留守から必然的に起る、時間の餘裕を持て餘す程樂な午前を過ごした。午飯を食べた後で、彼女は洗湯に行つた。病院へ顏を出す前一寸綺麗になつて置きたい考へのあつた彼女は、其所で隨分念入に時間を費やした後、晴々した好い心持を湯上りの光澤しい皮膚に包みながら歸つて來ると、お時から嘘ではないかと思はれるやうな報告を聽いた。

「堀の奥さんが入らつしやいました」

お延は下女の言葉を信ずる事が出來ない位に驚ろいた。昨日の今日、お秀の方からわざ〳〵自

分を尋ねて來る。そんな意外な訪問があり得べき筈はなかつた。彼女は二遍も三遍も下女の口を確かめた。何で來たかをさへ訊かなければ氣が濟まなかつた。何故待たせて置かなかつたかも問題になつた。然し下女は何にも知らなかつた。たゞ藤井の歸りに通り路だから一寸寄つた迄だといふ事丈が、お秀の下女に殘して行つた言葉で解つた。

お延は既定のプログラムを咄嗟の間に變更した。病院は拔いて、お秀の方へ行先を轉換しなければならないといふ覺悟を極めた。それは津田と自分との間に取り換はされた約束に過ぎなかつた。何等の不自然に陷いる痕迹なしに其約束を履行するのは今であつた。彼女はお秀の後を追掛けるやうにして宅を出た。

百二十三

堀の家は大畧の見當から云つて、病院と同じ方角にあるので、電車を二つばかり手前の停留所で下りて、下りた處から、すぐ右へ切れさへすれば、つい四五町の道を歩く丈で、すぐ門前へ出られた。

藤井や岡本の住居と違つて、郊外に遠い彼の邸には、殆んど庭といふものがなかつた。車廻し、馬車廻しは無論の事であつた。往來に面して建てられたと云つても可い其二階作りと門の間には、たゞ三間足らずの餘地がある丈であつた。しかもそれが石で敷き詰められてゐるので、地面の色は何處にも見えなかつた。

市區改正の結果、餘程以前に取り廣げられた往來には、比較的餘所で見られない幅があつた。それでゐて商賣をしてゐる店は、町内に殆んど一軒も見當らなかつた。辯護士、醫者、旅館、そんなもの許が並んでゐるので、四邊が繁華な割に、通りは何時も閑靜であつた。

其上路の左右には柳の立木が行儀よく植ゑ付けられてゐた。從つて時候の好い時には、殺風景な市内の風も、兩側に搖く綠りの裡に一種の趣を見せた。中で一番大きいのが、丁度堀の塀際から斜めに門の上へ長い枝を差し出してゐるので、餘所目にはそれが家と調子を取るために、わざと其所へ移されたやうに體裁が好かつた。

其他の特色を云ふと、玄關の前に大きな鐵の天水桶があつた。丸で下町の質屋か何かを聯想させる此長物と、そのすぐ横にある玄關の構とがまた能く釣り合つてゐた。比較的間口の廣い其玄

關の入口は悉く細い格子で仕切られてゐる丈で、唐戸だの扉だのゝ裝飾は何處にも見られなかつた。

一口でいふと、ハイカラな仕舞ふた屋と評しさへすれば、それですぐ首肯かれる此家の職業は、少なくとも系統的に、家の樣子を見た丈で外部から判斷する事が出來るのに、不思議なのは其主人であつた。彼は自分が何んな宅へ入つてゐるか未だ曾て知らなかつた。そんな事を苦にする神經を有たない彼は、他から自分の家業柄を何とあげつらはれても一向平氣であつた。道樂者だが、滿更無教育なたゞの金持とは違つて、人柄からいへば、斯んな役者向の家に住ふのは寧ろ不適當かも知れない位な彼は、極めて我の少ない人であつた。惡く云へば自己の缺乏した男であつた。何でも世間の習俗通りにして行く上に、わが家庭に特有な習俗も亦改めやうとしない氣樂ものであつた。斯くして彼は、彼の父、彼の母に云はせると即ち先代、の建てた土藏造りのやうな、さうして何處かに藝人趣味のある家に住んで滿足してゐるのであつた。もし彼の美點がそこにもあるとすれば、わざとらしく得意がつてゐない彼の態度を賞めるより外に仕方がなかつた。然し彼は又得意がる筈もなかつた。彼の眼に映る彼の住宅は、得意がるにしては、彼に取つて餘りに陳

腐過ぎた。

お延は堀の家を見るたびに、自分と家との間に存在する不調和を感じた。家へ入いつてからも其距離を思ひ出す事が屢あつた。お延の考へによると、一番そこに落付いてぴたりと坐つてゐられるものは堀の母丈であつた。所が此母は、家族中でお延の最も好かない女であつた。好かないといふよりも、寧ろ應對しにくい女であつた。時代が違ふ、殘酷に云へば隔世の感がある、もしそれが當らないとすれば、肌が合はない、出が違ふ、其他評する言葉は幾何でもあつたが、結果は何時でも同じ事に歸着した。

次には堀其人が問題であつた。お延から見た此主人は、此家に釣り合ふやうでもあり、又釣り合はないやうでもあつた。それをもう一歩進めていふと、彼は何んな家へ行つても、釣り合ふやうでもあり、釣り合はないやうでもあるといふのと殆んど同じ意味になるので、始めから問題にしないのと、大した變りはなかつた。此曖昧な所が又お延の堀に對する好惡の感情を其儘に現はしてゐた。事實をいふと、彼女は堀を好いてゐるやうでもあり、又好いてゐないやうでもあつた。

最後に來るお秀に關しては、たゞ要領を一口でいふ事が出來た。お延から見ると、彼女は此家

の構造に最も不向に育て上げられてゐた。此斷案にもう少し勿體をつけ加へて、心理的に翻譯すると、彼女と此家庭の空氣とは何時迄行つても一致しつこなかつた。堀の母とお秀、お延は頭の中に此二人を並べて見るたびに一種の矛盾を強ひられた。然し矛盾の結果が悲劇であるか喜劇であるかは容易に判斷が出來なかつた。

家と人とを斯う組み合せて考へるお延の眼に、不思議と思はれる事がたゞ一つあつた。

「一番家と釣り合の取れてゐる堀の母が、最も彼女を手古摺らせると同時に、其反對に出來上つてゐるお秀が又別の意味で、最も彼女に苦痛を與へさうな相手である」

玄關の格子を開けた時、お延の頭に平生からあつた斯んな考へを一度に蘇へらさせるべく號鈴がはげしく鳴つた。

百二十四

昨日孫を伴れて横濱の親類へ行つたといふ堀の母がまだ歸つてゐなかつたのは、座敷へ案内されたお延に取つて、意外な機會であつた。見方によつて、好い都合にもなり、又惡い跋にもなる

此機會は、彼女から話しのしにくい年寄を追ひ除けて呉れたと同時に、たゞ一人面と向き合つて、當の敵のお秀と應對しなければならない不利をも與へた。

お延に知れてゐない此情實は、訪問の最初から彼女の勝手を狂はせた。毎時もなら何を置いても小さな髷に結つた母が一番先へ出て來て、義理づくめにちやほやして呉れる所を、今日に限つて、劈頭にお秀が顔を出した許か、待ち設けた老女は其後からも現はれる樣子を一向見せないので、お延は何時もの豫期から出てくる自然の調子を先づ外させられた。其時彼女はお秀を一目見た眼の中に、當惑の色を示した。然しそれは濟まなかつたといふ後悔の記念でも何でもなかつた。單に昨日の戰爭に勝つた得意の反動からくる一種の極り惡さであつた。何んな敵を打たれるかも知れないといふ微かな恐怖であつた。此場を何う切り拔けたら可いか知らといふ思慮の惱亂でもあつた。

お延は此一瞥をお秀に與へた瞬間に、もう今日の自分を相手に握られたといふ氣がした。然しそれは自分の有つてゐる技巧の何うする事も出來ない高い源から此一瞥が突如として閃めいてしまつた後であつた。自分の手の届かない暗中から不意に來たものを、喰ひ止める威力を有つてゐ

ない彼女は、甘んじて其結果を待つより外に仕方がなかつた。

一瞥は果してお秀の上に能く働いた。然しそれに反應してくる彼女の様子は、又如何にも豫想外であつた。彼女の平生、其平生が破裂した昨日、津田と自分と寄つてたかつて其破裂を料理した始末、此等の段取を、不斷から一貫して傍の人の眼に着く彼女の性格に結び付けて考へると、何うしても無事に納まる筈はなかつた。大なり小なり次の波瀾が呼び起されずに片が付かうとは、如何に自分の手際に重きを置くお延にも信ぜられなかつた。

だから彼女は驚ろいた。座に着いたお秀が案に相違して何時もより愛嬌の好い挨拶をした時には、殆んどわれを疑ふ位に驚ろいた。其疑ひをまた少しも後へ繰り越させないやうに、手拔りなく仕向けて來る相手の態度を眼の前に見た時、お延は寧ろ氣味が悪くなつた。何といふ變化だらうといふ驚ろきの後から、何ういふ意味だらうといふ不審が湧いて起つた。

けれども肝心な其意味を、お秀はまた何時迄もお延に説明しやうとしなかつた。そればかりか、昨日病院で起つた不幸な行き違に就いても、遂に一言も口を利く様子を見せなかつた。

相手に心得があつてわざと際どい問題を避けてゐる以上、お延の方からそれを切り出すのは變

なものであつた。第一好んで痛い所に觸れる必要は何處にもなかつた。と云つて、何處かで區切を付けて、双方薩張して置かないと、自分は何のために、今日此所迄足を運んだのか、主意が立たなくなつた。然し和解の形式を通過しないうちに、もう和解の實を擧げてゐる以上、それを兎や角表面へ持ち出すのも馬鹿げてゐた。

怜悧なお延は弱らせられた。會話が滑らかにすべつて行けば行く程、一種の物足りなさが彼女の胸の中に頭を擡げて來た。仕舞に彼女は相手の何處かを突き破つて、其内側を覗いて見やうかと思ひ出した。斯んな點にかけると、頗る冒險的な所のある彼女は、萬一遣り損なつた曉に、此場合から起り得る危險を知らないではなかつた。けれども其所には自分の腕に對する相當の自信も伴つてゐた。

其上もし機會が許すならば、お秀の胸の格別なある一點に、打診を試ろみたいといふ希望が、お延の方にはあつた。其所を敲かせて貰つて局部から自然に出る本音を充分に聽く事は、津田と打ち合せを濟ました訪問の主意でも何でもなかつたけれども、お延自身からいふと、うまく媾和の役目を遣り終せて歸るよりも遙かに重大な用向であつた。

津田に隱さなければならない此用向は、津田がお延に內所にしなければならない事件と、其性質の上に於てよく似通つてゐた。さうして津田が自分の居ない留守に、小林がお延に何を話したかを氣にする如く、お延も亦自分のゐない留守に、お秀が津田に何を話したかを確と突き留めたかつたのである。

何處に引掛りを拵へたものかと思案した末、彼女は仕方なしに、藤井の歸りに寄つて呉れたといふお秀の訪問をまた問題にした。けれども座に着いた時既に、「先刻入らしつて下すつたさうですが、生憎お湯に行つてゐて」といふ言葉を、會話の口切に使つた彼女が、今度は「何か御用でもおありだつたの」といふ質問で、それを復活させに掛つた時、お秀はたゞ簡單に「いゝえ」と答へた丈で、綺麗にお延を跳ね付けてしまつた。

百二十五

お延は次に藤井から入つて行かうとした。今朝此叔父の所を訪ねたといふお秀の自白が、話しを其方へ持つて行くに都合のいゝ便利を與へた。けれどもお秀の門構は依然として此方面にも嚴

重であつた。彼女は必要の起るたびに、わざ〳〵其門の外へ出て來て、愛想よくお延に應對した。お秀が此叔父の世話で人となつた事實は、お延にも能く知れてゐた。彼女が精神的に其感化を受けた點もお延に解つてゐた。それでお延は順序として先づ此叔父の人格やら生活やらに就いて、お秀の氣に入りさうな言辭を弄さなければならなかつた。所がお秀から見ると、それが又一々誇張と虛僞の響きを帶びてゐるので、彼女は眞面目に取り合ふ緒口を何處にも見出す事が出來ないのみならず、長く同じ筋道を辿つて行くうちには、自然氣色を惡くした樣子を外に現はさなければ濟まなくなつた。敏捷なお延は、相手を見縊り過ぎてゐた事に氣が付くや否や、すぐ取つて返した。するとお秀の方で、今度は岡本の事を喋々し始めた。お秀對藤井と丁度同じ關係にある其叔父は、お延に取つて大事な人であると共に、お秀からいふと、親しみも何にも感じられない、あかの他人であつた。從つて彼女の言葉には滑つこい皮膚がある丈で、肝心の中味に血も肉も盛られてゐなかつた。それでもお延はお秀の手料理になる此お世辭の返禮を左も旨さうに鵜呑にしなければならなかつた。

然し再度自分の番が廻つて來た時、お延は二返目の愛嬌を手古盛りに盛り返して、惡くお秀に

強ひる程愚かな女ではなかつた。時機を見て器用に切り上げた彼女は、次に吉川夫人から煽つて行かうとした。然し前と同じ手段を用ひて、たゞ賞めそやす丈では、同じ不成蹟に陷いるかも知れないといふ恐れがあつた。そこで彼女は善悪の標準を度外に置いて、たゞ夫人の名前丈を二人の間に點出して見た。さうして其影響次第で後の段取を極めようと覺悟した。

彼女はお秀が自分の風呂の留守へ藤井の歸りがけに廻つて來た事を知つてゐた。けれども藤井へ行く前に、彼女がもう既に吉川夫人を訪問してゐる事には丸で想ひ到らなかつた。しかも昨日病院で起つた波瀾の結果として、彼女がわざ〳〵其所迄足を運んでゐやうとは、夢にも知らなかつた。此一點に掛けると、津田と同じ程度に無邪氣であつた彼女は、津田が小林から驚ろかされたと同じ程度に、又お秀から驚ろかされなければならなかつた。然し驚ろかせられ方は二人共丸で違つてゐた。小林のは明らさまな事實の報告であつた。お秀のは意味のありさうな無言であつた。無言と共に來た薄赤い彼女の顏色であつた。

最初夫人の名前がお延の唇から洩れた時、彼女は二人の間に一滴の靈藥が天から落されたやうな氣がした。彼女はすぐ其効果を眼の前に眺めた。然し不幸にしてそれは彼女に取つて何の役にも立たない効果に過ぎなかつた。少くとも何う利用して可いか解らない効果であつた。其豫想外な性質は彼女をはつと思はせる丈であつた。彼女は名前を口へ出すと共に、或は其場ですぐ失言を謝さなければならないかしらと迄考へた。

すると第二の豫想外が繼いで起つた。お秀が一寸顏を背けた樣子を見た時に、お延は何うしても最初に受けた印象を改正しなければならなくなつた。血色の變化は決して怒りのためでないといふ事が其時始めて解つた。年來陳腐な位見飽きてゐる單純な極りの惡さだと評するより外に仕方のない此表情は、お延を更に驚ろかさざるを得なかつた。彼女は此表情の意味をはつきり確かめた。然し其意味の因つて來る所は、お秀の說明を待たなければまた確かめられる筈がなかつた。

お延が何うしようかと迷つてゐるうちに、お秀は丸で木に竹を接いだやうに、突然話題を變化した。行掛り上全然今迄と關係のない其話題は、三度目に又お延を驚ろかせるに充分な位突飛であつた。けれどもお延には自信があつた。彼女はすぐそれを受けて立つた。

お秀の口を洩れた意外な文句のうちで、一番初めにお延の耳を打つたのは「愛」といふ言葉であつた。此陳腐な有來りの一語が、如何にお延の前に伏兵のやうな新らし味をもつて起つたかは、前後の連絡を缺いて單獨に突發したといふのが重な原因に相違なかつたが、一つにはまた、そんな言葉がまだ會話の材料として、二人の間に使はれてゐなかつたからである。

お延に比べるとお秀は理窟つぽい女であつた。けれどもさういふ結論に達する迄には、多少の説明が要つた。お延は自分で自分の理窟を行爲の上に運んで行く女であつた。だから平生彼女の議論をしないのは、出來ないからではなくつて、する必要がないからであつた。其代り他から注ぎ込まれた知識になると、大した貯蓄も何にもなかつた。女學生時代に讀み馴れた雜誌さへ近頃は滅多に手にしない位であつた。それでゐて彼女は未だ曾て自分を貧弱と認めた事がなかつた。虚榮心の強い割に、其方面の欲望があまり刺戟されずに濟んでゐるのは、暇が乏しいからでもなく、競爭の話し相手がないからでもなく、全く自分に大した不足を感じないからであつた。

所がお秀は教育からしてが第一違つてゐた。讀書は彼女を彼女らしくする殆んど凡てであつた。少なくとも、凡てゞなければならないやうに考へさせられて來た。書物に緣の深い叔父の藤井に

教育された結果は、善惡兩樣の意味で、彼女の上に妙な結果を生じた。彼女は自分より書物に重きを置くやうになつた。然しいくら自分を書物より輕く見るにした所で、自分は自分なりに、書物と獨立したまんまで、活きて働らいて行かなければならなかつた。だから勢ひ本と自分とは離れ離れになる丈であつた。それをもつと適切な言葉で云ひ現はすと、彼女は折々柄にもない議論を主張するやうな弊に陷つた。然し自分が議論のために議論をしてゐるのだから詰らないと氣が付く迄には、彼女の反省力から見て、まだ大分の道程があつた。意地の方から行くと、餘りに我が强過ぎた。平たく云へば、其我がつまり自分の本體であるのに、其本體に副ぐはないやうな理窟を、わざわざ自分の尊敬する書物の中から引張り出して來て、其所に書いてある言葉の力で、それを守護するのと同じ事に歸着した。自然彈丸を込めて打ち出すべき大砲を、九寸五分の代りに、振り廻して見るやうな滑稽も時々は出て來なければならなかつた。

問題は果して或雜誌から始まつた。月の發行にかゝる其雜誌に發表された諸家の戀愛觀を讀んだお秀の質問は、實をいふとお延にとつてそれ程興味のあるものでもなかつた。然しまだ眼を通してゐない事實を自白した時に、彼女の好奇心が突然起つた。彼女は此抽象的な問題を、何處か

で自分の思ひ通り活かして遣らうと決心した。

彼女は稍ともすると空論に流れやすい枉手の弱點を可成能く呑み込んでゐた。際どい實際問題に是から飛び込んで行かうとする彼女に、それ程都合の悪い態度はなかつた。たゞ議論のために議論をされる位なら、最初から取り合はない方が餘つ程增しだつた。それで彼女には何うしても相手を地面の上に縛り付けて置く必要があつた。所が不幸にして此場合の相手は、最初からもう地面の上にゐなかつた。お秀の口にする愛は、津田の愛でも、堀の愛でも、乃至お延、お秀の愛でも何でもなかつた。たゞ漫然として空裏に飛揚する愛であつた。從つてお延の努力は、風船玉のやうなお秀の話を、まづ下へ引き摺り卸さなければならなかつた。

子供が既に二人もあつて、萬事自分より世帶染みてゐるお秀が、此意味に於て、遙かに自分より着實でない事を發見した時に、お延は口ではい〳〵向ふのいふ通りを首肯ひながら、腹の中では、焦慮たがつた。「そんな言葉の先でなく、裸で入らつしやい、實力で相撲を取りますから」と云ひたくなつた彼女は、何うしたら此議論家を裸にする事が出來るだらうと思案した。

やがてお延の胸に分別が付いた。分別とは外でもなかつた。此問題を活かすためには、お秀を

犧牲にするか、又は自分を犧牲にするか、何方かにしなければ、到底思ふ壺に入つて來る譯がないといふ事であつた。相手を犧牲にするのに困難はなかつた。たゞ何處からか向ふの弱點を突ツ付きさへすれば、それで事は足りた。其弱點が事實であらうとも假設的であらうとも、それはお延の意とする所ではなかつた。單に自然の反應を目的にして試みる刺戟に對して、眞僞の吟味などは、要らざる斟酌であつた。然し其所には又それ相應の危險もあつた。お秀は怒るに違なかつた。所がお秀を怒らせるといふ事は、お延の目的であつて、さうして目的でなかつた。だからお延は迷はざるを得なかつた。

最後に彼女はある時機を摑んで起つた。さうして其起つた時には、もう自分を犧牲にする方に決心してゐた。

百二十七

「さう云はれると、何と云つて可いか解らなくなるわね、あたしなんか。津田に愛されてゐるんだか、愛されてゐないんだか、自分ぢや丸で夢中でゐるんですもの。秀子さんは仕合せね、そ

こへ行くと。最初から御自分にちやんとした保証が付いてゐらつしやるんだから」

お秀の器量望みで貰はれた事は、津田と一所にならない前から、お延に知れてゐた。それは一般の女、ことにお延のやうな女に取つては、羨やましい事實に違なかつた。始めて津田から其話を聽かされた時、お延はお秀を見ない先に、まづ彼女に對する輕い嫉妬を感じた。中味の薄つぺらな事實に過ぎなかつたといふ意味があとで解つた時には、淡い冷笑のうちに、復讐をしたやうな快感さへ覺えた。それより以後、愛といふ問題に就いて、お秀に對するお延の態度は、いつも輕蔑であつた。それを表向さも嬉しい消息ででもあるやうに取扱かつて、彼我に共通する如くに見せ掛けたのは、無論一片のお世辭に過ぎなかつた。もつと惡く云へば、一種の嘲弄であつた。

幸ひお秀は其所に氣が付かなかつた。さうして氣が付かない譯であつた。と云ふのは、言葉の上は兎に角、實際に愛を體得する上に於て、お秀はとてもお延の敵でなかつた。猛烈に愛した經驗も、生一本に愛された記憶も有たない彼女は、此能力の最大限が何の位強く大きなものであるかといふ事をまだ知らずにゐる女であつた。それでゐて夫に滿足してゐる細君であつた。知らぬが佛といふ諺が正に此場合の彼女を能く説明してゐた。結婚の當時、自分の未來に夫の手で押し

付けられた愛の判を、普通の証文のやうな積で、何時迄も胸の中へ仕舞ひ込んでゐた彼女は、お延の言葉を、其胸の中で、眞面目に受ける程無邪氣だつたのである。

本當に愛の實體を認めた事のないお秀は、彼女のいたづらに使ふ胡亂な言葉を通して、鋭どいお延から能く見透かされたのみではなかつた。彼女は津田とお延の關係を、自分達夫婦から割り出して平氣でゐた。それはお延の言葉を聽いた彼女が實際驚ろいた顏をしたのでも解つた。津田がお延を愛してゐるかゐないかが今頃何うして問題になるのだらう。しかもそれが細君自身の口から出るとは何事だらう。況してそれを夫の妹の前へ出すに至つては、何處に何んな意味があるのだらう。——是がお秀の表情であつた。

實際お秀から見たお延は、現在の津田の愛に滿足する事を知らない横着者か、さもなければ、自分が充分津田を手の中へ丸め込んで置きながら、わざと其所に氣の付かないやうな振をする、空々しい女に過ぎなかつた。彼女は「あら」と云つた。

「まだ其上に愛されて見たいの」

此挨拶は平生のお延の注文通りに來た。然し今の場合に於るお延に滿足を與へる筈はなかつた。

彼女は又何とか云つて、自分の意志を明らかにしなければならなかつた。所がそれを判然表現すると、「津田があたしの外にまだ思つてゐる人が別にあるとするなら、あたしだつて到底今のまゝで滿足出來る譯がないぢやありませんか」といふ露骨な言葉になるより外に途はなかつた。思ひ切つて、さう打つて出れば、自分で自分の計畫をぶち毀すのと一般だと感づいた彼女は、「だつて」と云ひ掛けた儘、其所で逡巡つたなり動けなくなつた。

「まだ何か不足があるの」

斯う云つたお秀は眼を集めてお延の手を見た。其所には例の指環が遠慮なく輝やいてゐた。然しお秀の鋭どい一瞥は何の影響もお延に與へる事が出來なかつた。指輪に對する彼女の無邪氣さは昨日と毫も變る所がなかつた。お秀は少しもどかしくなつた。

「だつて延子さんは仕合せぢやありませんか。欲しいものは、何でも買つて貰へるし、行きたい所へは、何處へでも連れていつて貰へるし――」

「えゝ。其所丈はまあ仕合せよ」

他に向つて自分の仕合せと幸福を主張しなければ、わが弱味を外へ現はすやうになつて、不都

合だと許考へ付けて來たお延は、平生から持ち合せの挨拶をつい此場合にも使つて仕舞つた。さうして又行き詰つた。芝居に行つた翌日、岡本へ行つて繼子と話をした時用ひた言葉を、其儘繰り返した後で、彼女は相手のお秀であるといふ事に氣が付いた。其お秀は「そこ丈が仕合せなら、それで澤山ぢやないか」といふ顏付をした。

お延は自分がかりそめにも津田を疑つてゐるといふ形迹をお秀に示したくなかつた。さうかと云つて、何事も知らない風を粧つて、見す〳〵お秀から馬鹿にされるのは猶厭だつた。從つて應對に非常な呼吸が要つた。目的地へ漕ぎ付ける迄には中々骨が折れると思つた。然し彼女は到底見込のない無理な努力をしてゐるといふ事には、ついに氣が付かなかつた。彼女は又態度を一變した。

百二十八

彼女は思ひ切つて一足飛びに飛んだ。情實に絡まれた窮屈な云ひ廻し方を打ち遣つて、面と向き合つたまゝお秀に相見しようとした。其代り言葉は何うしても抽象的にならなければならなか

つた。それでも論戰の刺擊で、事實の面影を突き留める方が、まだ增しだと彼女は思つた。

「一體一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事が出來るものでせうか」

此質問を基點として歩を進めに掛つた時、お秀はそれに對してあらかじめ準備された答を一つも有つてゐなかつた。書物と雜誌から受けた彼女の知識は、たゞ一般戀愛に關する丈で、毫も此特殊な場合に利用するに足らなかつた。腹に何の貯へもない彼女は、考へる風をした。さうして正直に答へた。

「そりや一寸解らないわ」

お延は氣の毒になつた。「此人は生きた研究の材料として、堀といふ夫を既に有つてゐるではないか。其夫の婦人に對する態度も、朝夕傍にゐて、見てゐるではないか」。お延が斯う思ふ途端に、第二句がお秀の口から落ちた。

「解らない筈ぢやありませんか。此方が女なんですもの」

お延は是も愚答だと思つた。もしお秀の有の儘が斯うだとすれば、彼女の心の働らきの鈍さ加減が想ひ遣られた。しかしお延はすぐ此愚答を活かしに掛つた。

「ぢや女の方から見たら何うでせう。自分の夫が、自分以外の女を愛してゐるといふ事が想像できるでせうか」

「延子さんにはそれが出來ないの？」と云はれた時、お延はおやと思つた。

「あたしは今そんな事を想像しなければならない地位にゐるんでせうか」

「そりや大丈夫よ」とお秀はすぐ受け合つた。お延は直ちに相手の言葉を繰り返した。

「大丈夫!?」

疑問とも間投詞とも片の付かない其語尾は、お延にも何といふ意味だか解らなかつた。

「大丈夫よ」

お秀も再び同じ言葉を繰り返した。其瞬間にお延は冷笑の影をちらりとお秀の唇のあたりに認めた。然し彼女はすぐそれを切つて捨てた。

「そりや秀子さんは大丈夫に極つてるわ。もと〳〵堀さんへ入らつしやる時の條件が條件ですもの」

「ぢや延子さんは何うなの。矢つ張り津田に見込まれたんぢやなかつたの」

「嘘よ。そりやあなたの事よ」
お秀は急に應じなくなつた。お延も獲物のない同じ脈をそれ以上堀る徒勞を省いた。
「一體津田は女に關して何んな考へを有つてゐるんでせう」
「それは妹より奥さんの方が能く知つてる筈だわ」
お延は叩き付けられた後で、自分もお秀と同じやうな愚問を掛けた事に氣が付いた。
「だけど兄妹としての津田は、あたしより秀子さんの方に能く解つてるでせう」
「えゝ、だけど、いくら解つてたつて、延子さんの參考にやならないわ」
「參考に無論なるのよ。然し其事ならあたしだつて疾うから知つてるわ」
お延の鎌は際どい所で投げ掛けられた。お秀は果して掛つた。
「けれども大丈夫よ。延子さんなら大丈夫よ」
「大丈夫だけれども危險いのよ。何うしても秀子さんから詳しい話しを聽かして頂かないと」
「あら、あたし何にも知らないわ」
斯ういつたお秀は急に赧くなつた。それが何の羞恥のために起つたのかは、いくら緊張したお

延の神經でも揣摩できなかつた。しかも彼女は此訪問の最初に、同じ現象から受けた初度の記憶をまだ忘れずにゐた。吉川夫人の名前を點じた時に見た其薄赧い顏と、今彼女の面前に再現した此赤面の間に何んな關係があるのか、それはいくら物の異同を嗅ぎ分ける事に妙を得た彼女にも見當が付かなかつた。彼女は此場合無理にも二つのものを繫いで見たくつて堪らなかつた。けれどもそれを繫ぎ合せる綱は、何處を何う探したつて、金輪際出て來つこなかつた。お延に取つて最も不幸な點は、現在の自分の力に餘る此二つのものゝ間に、屹度或る聯絡が存在してゐるに相違ないといふ推測であつた。さうして其聯絡が、今の彼女に取つて、頗る重大な意味を有つてゐるに相違ないといふ一種の豫覺であつた。自然彼女は其所をもつと突ツついて見るより外に仕方がなかつた。

百二十九

咄嗟の衝動に支配されたお延は、自分の口を衝いて出る嘘を抑へる事が出來なかつた。
「吉川の奥さんからも伺つた事があるのよ」

斯う云つた時、お延は始めて自分の大膽さに氣が付いた。彼女は其所へ留まつて、冒險の結果を眺めなければならなかつた。するとお秀が今迄の赤面とは打つて變つた不思議さうな顏をしながら訊き返した。

「あら何を」

「その事よ」

「その事つて、何んな事なの」

お延にはもう後がなかつた。お秀には先があつた。

「嘘でせう」

「嘘ぢやないのよ。津田の事よ」

お秀は急に應じなくなつた。其代り冷笑の影を締りの好い口元にわざと寄せて見せた。それが先刻より著るしく目立つて外へ現はれた時、お延は路を誤まつて一歩深田の中へ踏み込んだやうな氣がした。彼女に特有な負け嫌ひな精神が强く働らかなかつたなら、彼女はお秀の前に頭を下げて、もう救を求めてゐたかも知れなかつた。お秀は云つた。

「變ね。津田の事なんか、吉川の奥さんがお話しになる譯がないのにね。何うしたんでせう」

「でも本當よ、秀子さん」

お秀は始めて聲を出して笑つた。

「そりや本當でせうよ。誰も嘘だと思ふものなんかありやしないわ。だけど何んな事なの、一體」

「津田の事よ」

「だから兄の何よ」

「そりや云へないわ。あなたの方から云つて下さらなくつちや」

「隨分無理な御注文ね。云へつたつて、見當が付かないんですもの」

お秀は何處からでも入らつしやいといふ落付を見せた。お延の腋の下から膏汗が流れた。彼女は突然飛びかゝつた。

「秀子さん、あなたは基督教信者ぢやありませんか」

お秀は驚ろいた樣子を現はした。

「いゝえ」
「でなければ、昨日の様な事を仰しやる譯がないと思ひますわ」
昨日と今日の二人は、丸で地位を易へたやうな形勢に陷つた。お秀は何處迄も優者の餘裕を示した。
「さう。ぢやそれでも可いわ。延子さんは大方基督教がお嫌ひなんでせう」
「いゝえ好きなのよ。だからお願ひするのよ。だから昨日のやうな氣高い心持になつて、此小さいお延を憐れんで頂きたいのよ。もし昨日のあたしが悪かつたら、斯うしてあなたの前に手を突いて詫まるから」
お延は光る寶石入の指輪を穿めた手を、お秀の前に突いて、口で云つた通り、實際に頭を下げた。
「秀子さん、何うぞ隱さずに正直にして下さい。さうしてみんな打ち明けて下さい。お延は此通り正直にしてゐます。此通り後悔してゐます」
持前の癖を見せて、眉を寄せた時、お延の細い眼から涙が膝の上へ落ちた。

「津田はあたしの夫です。あなたは津田の妹です。あなたに津田が大事なやうに、津田はあたしにも大事です。たゞ津田のためです。津田のために、みんな打ち明けて話して下さい。津田はあたしを愛してゐます。津田が妹としてあなたを愛してゐるやうに、妻としてあたしを愛してゐるのです。だから津田から愛されてゐるあたしは津田のために凡てを知らなければならないのです。津田から愛されてゐるあなたも亦、津田のために萬づをあたしに打ち明けて下さるでせう。それが妹としてのあなたの親切です。あなたがあたしに對する親切を、此場合お感じにならないでも、あたしは一向恨みとは思ひません。けれども兄さんとしての津田には、まだ盡して下さる親切を有つてゐらつしやるでせう。あなたがそれを充分有つてゐらつしやるのは、あなたの顏付でよく解ります。あなたはそんな冷刻な人では決してないのです。あなたはあなたが昨日御自分で仰しやつた通り親切な方に違ひないのです」
お延が是丈云つて、お秀の顏を見た時、彼女は其所に特別な變化を認めた。お秀は赧くなる代りに少し蒼白くなつた。さうして度外れに急き込んだ調子で、お延の言葉を一刻も早く否定しなければならないといふ意味に取れる言葉遣ひをした。

「あたしはまだ何にも悪い事をした覺はないんです。兄さんに對しても嫂さんに對しても、有つてゐるのは好意丈です。悪意はちつとも有りません。何うぞ誤解のないやうにして下さい」

百三十

お秀の言譯はお延に取つて意外であつた。又突然であつた。其言譯が何處から出て來たのか、また何の爲であるか丸で解らなかつた。お延はたゞはつと思つた。天惠の如く彼女の前に露出された此時のお秀の背後に何が潜んでゐるのだらう。お延はすぐ其暗闇を衝かうとした。三度目の嘘が安々と彼女の口を滑つて出た。

「そりや解つてるのよ。あなたのなすつた事も、あなたのなすつた精神も、あたしにはちやんと解つてるのよ。だから隠し立をしないで、みんな打ち明けて頂戴な。お厭？」

斯う云つた時、お延は出來得る限りの愛嬌を其細い眼に湛へて、お秀を見た。然し異性に對する場合の効果を豫想した此所作は全く外れた。お秀は驚ろかされた人のやうに、卒爾な質問を掛けた。

「延子さん、あなた今日此所へお出になる前、病院へ行つて入らしつたの」

「いゝえ」

「ぢや何處か外から廻つて入らしつたの」

「いゝえ。宅からすぐ上つたの」

お秀は漸く安心したらしかつた。其代り後は何にも云はなかつた。お延はまだ縋り付いた手を放さなかつた。

「よう、秀子さん何うぞ話して頂戴よ」

其時お秀の凉しい眼のうちに殘酷な光が射した。

「延子さんは隨分勝手な方ね。御自分獨り精一杯愛されなくつちや氣が濟まないと見えるのね」

「無論よ。秀子さんは左右でなくつても構はないの」

「良人を御覽なさい」

お秀はすぐ斯う云つて退けた。お延は話頭からわざと堀を追ひ除けた。

「堀さんは問題外よ。堀さんは何うでも可いとして、正直の云ひつ競よ。なんぼ秀子さんだつ

て、氣の多い人が好きな譯はないでせう」
「だつて自分より外の女は、有れども無きが如しつてやうな素直な夫が世の中にゐる筈がないぢやありませんか」
雜誌や書物からばかり知識の供給を仰いでゐたお秀は、此時突然卑近な實際家となつてお延の前に現はれた。お延は其矛盾を注意する暇さへなかつた。
「あるわよ、あなた。なけりやならない筈ぢやありませんか、苟くも夫と名が付く以上」
「さう、何處にそんな好い人がゐるの」
お秀はまた冷笑の眼をお延に向けた。お延は何うしても津田といふ名前を大きな聲で叫ぶ勇氣がなかつた。仕方なしに口の先で答へた。
「それがあたしの理想なの。其所迄行かなくつちや承知が出來ないの」
お秀が實際家になつた通り、お延も何時の間にか理論家に變化した。今迄の二人の位地は顚倒した。さうして二人とも丸で其所に氣が付かずに、勢の運ぶが儘に前の方へ押し流された。あとの會話は理論とも實際とも片の付かない、出たとこ勝負になつた。

「いくら理想だつてそりや駄目よ。その理想が實現される時は、細君以外の女といふ女が丸で女の資格を失つてしまはなければならないんですもの」
「然し完全の愛は其所へ行つて始めて味はれるでせう。其所迄行き盡さなければ、本式の愛情は生涯經つたつて、感ずる譯に行かないぢやありませんか」
「そりや何うだか知らないけれども、あなた以外の女を女と思はないで、あなた丈を世の中に存在するたつた一人の女だと思ふなんて事は、理性に訴へて出來る筈がないでせう」
お秀はとう〳〵あなたといふ字に點火した。お延は一向構はなかつた。
「理性は何うでも、感情の上で、あたし丈をたつた一人の女と思つてゐて呉れゝば、それで可いんです」
「あなた丈を女と思へと仰しやるのね。そりや解るわ。けれども外の女を女と思つちや不可いとなると丸で自殺と同じ事よ。もし外の女を女と思はずにゐられる位な夫なら、肝心のあなただつて、矢ツ張り女とは思はないでせう。自分の宅の庭に咲いた花丈が本當の花で、世間にあるのは花ぢやない枯草だといふのと同じ事ですもの」

「枯草で可いと思ひますわ」
「あなたには可いでせう。けれども男には枯草でないんだから仕方がありませんわ。それより か好きな女が世の中にいくらでもあるうちで、あなたが一番好かれてゐる方が、嫂さんに取つても却つて満足ぢやありませんか。それが本當に愛されてゐるといふ意味なんですもの」
「あたしは何うしても絶對に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌ひなんだから」
お秀の顔に輕蔑の色が現はれた。其奥には何といふ理解力に乏しい女だらうといふ意味があり〳〵と見透かされた。お延はむら〳〵とした。
「あたしは何うせ馬鹿だから理窟なんか解らないのよ」
「たゞ實例をお見せになる丈なの。其方が結構だわね」
お秀は冷然として話を切り上げた。お延は胸の奥で地團太を踏んだ。折角の努力は是以上何物をも彼女に與へる事が出來なかつた。留守に彼女を待つ津田の手紙が來てゐるとも知らない彼女は、其儘堀の家を出た。

百三十一

お延とお秀が對坐して戰つてゐる間に、病院では病院なりに、また獨立した豫定の事件が進行した。

津田の待ち受けた吉川夫人が其所へ顔を出したのは、お延宛で書いた手紙を持たせて遣つた車夫がまだ歸つて來ないうちで、時間からいふと、丁度小林の出て行つた十分程後であつた。

彼は看護婦の口から夫人の名前を聽いた時、此異人種に近い二人が、狹い室で鉢合せをしずに濟んだ好都合を、何より先にまづ祝福した。其時の彼は此都合を付けるために拂ふべく餘儀なくされた物質上の犧牲を殆んど顧みる暇さへなかつた。

彼は夫人の姿を見るや否や、すぐ床の上に起き返らうとした。夫人は立ちながら、それを止めた。さうして彼女を案内した看護婦の兩手に、抱へるやうにして持たせた植木鉢を一寸振り返つて見て、「何處へ置きませう」と相談するやうに訊いた。津田は看護婦の白い胸に映る紅葉の色を美くしく眺めた。小さい鉢の中で、窮屈さうに三本の幹が調子を揃へて並んでゐる下に、恰好の

好い手頃な石さへあしらつた其盆栽が床の間の上に置かれた後で、夫人は始めて席に着いた。

「どうです」

先刻から彼女の様子を見てゐた津田は、此時始めて彼に對する夫人の態度を確かめる事が出來た。もしやと思つて、暗に心配してゐた彼の掛念の半分は、此一語で吹き晴らされたと同じ事であつた。夫人は何時も程陽氣ではなかつた。其代り何時も程上つ調子でもなかつた。要するに彼女は、津田が未だ曾て彼女に於て發見しなかつた一種の氣分で、彼の室に入つて來たらしかつた。それは一方で彼女の落付を極度に示してゐると共に、他方では彼女の鷹揚さを矢張最高度に現はすものらしく見えた。津田は少し驚ろかされた。然し好い意味で驚ろかされた丈に、氣味も惡くしなければならなかつた。たとひ此態度が、彼に對する反感を代表してゐないにせよ、其奥には何があるか解らなかつた。今其奥に恐るべき何物がないにしても、是から先話をしてゐるうちに、向ふの心持は何う變化して來るか解らなかつた。津田は他から機嫌を取られ付けてゐる夫人の常として、手前勝手にいくらでも變つて行く、若くは變つて行つても差支ないと自分で許してゐる、此夫人を、一種の意味で、女性の暴君と奉つらなければならない地位にあつた。漢語でいふと彼

女の一顰一笑が津田には悉く問題になつた。此際の彼にはことに左右であつた。

「今朝秀子さんが入らしつてね」

お秀の訪問はまづ第一の議事の如くに彼女の口から投げ出された。津田は固より相手に應じなければならなかつた。さうして其應じ方は夫人の來ない前からもう考へてゐた。彼はお秀の夫人を尋ねた事を知つて、知らない風をする積であつた。誰から聽いたと問はれた場合に、小林の名を出すのが厭だつたからである。

「へえ、左右ですか。平生あんまり御無沙汰をしてゐるので、たまにはお詫に上らないと惡いとでも思つたのでせう」

「いえ左右ぢやないの」

津田は夫人の言葉を聽いた後で、すぐ次の嘘を出した。

「然しあいつに用のある譯もないでせう」

「所があつたんです」

「へえゝ」

津田は斯う云つたなり其後を待つた。
「何の用だか中てゝ御覽なさい」
津田は空つ惚けて、考へる眞似をした。
「左右ですね、お秀の用事といふと、――さあ何でせうかしら」
「分りませんか」
「ちよつと何うも。――元來私とお秀とは兄妹でゐながら、大分質が違ますから」
津田は此所で餘計な兄妹關係をわざと仄めかした。それは事の來る前に、自分を遠くから辯護して置くためであつた。それから自分の言葉を、夫人が何う受けて呉れるか、其反響を一寸聽いて見るためであつた。
「少し理窟ツぽいのね」
此一語を聞くや否や、津田は得たり賢こしと虛に付け込んだ。
「あいつの理窟と來たら、兄の私でさへ惱まされる位ですもの。誰だつて、とても大人しく辛抱して聽いてゐられたものぢや御座いません。だから私はあいつと喧嘩をすると、何時でも好い

加減にして投げてしまひます。するとあいつは好い氣になつて、勝つた積か何かで、自分の都合の好い事ばかりを方々へ行つて觸れ散らかすのです」
夫人は微笑した。津田はそれを確かに自分の方に同情を有つた微笑と解釋する事が出來た。すると夫人の言葉が、却つて彼の思はくとは逆の見當を向いて出た。
「まさか左右でもないでせうけれどもね。――然し中々筋の通つた好い頭を有つた方ぢやありませんか。あたしあの方は好よ」
津田は苦笑した。
「そりやお宅なんぞへ上つて、無暗に地金を出す程の馬鹿でもないでせうがね」
「いえ正直よ、秀子さんの方が」
誰よりお秀が正直なのか、夫人は說明しなかつた。

百三十二

津田の好奇心は動いた。想像も畧付いた。けれども其所へ折れ曲つて行く事は彼の主意に背い

た。彼はたゞ夫人對お秀の關係を堀り返せば可かつた。病氣見舞を兼た夫人の用向も、無論それに就いての懇談に極つてゐた。けれども彼女にはまた彼女に特有な趣があつた。時間に制限のない彼女は、頼まれるまでもなく、機會さへあれば、他の内輪に首を突ツ込んで、なにかと眼下、ことに自分の氣に入つた眼下の世話を燒きたがる代りに、到る所で又道樂本位の本性を露はして平氣であつた。或時の彼女は無暗に急いて事を纏めやうと焦慮つた。さうかと思ふと、ある時の彼女は、又正反對であつた。わざ〳〵べん〳〵と引ツ張る所に、左も興味でもあるらしい樣子を見せて濟ましてゐた。鼠を弄そぶ猫のやうな此時の彼女の態度が、たとひ傍から見て何うあらうとも、自分では、閑散な時間に曲折した波瀾を與へるために必要な優者の特權だと解釋してゐるらしかつた。此手に掛つた時の相手には、何よりも辛防が大切であつた。其代り辛防をし拔いた御禮は屹度來た。又來る事を以て彼女は相手を奬勵した。のみならずそれを自分の倫理上の誇りとした。彼女と津田の間に取り換はされた此默契のために、津田の蒙つた重大な損失が、今迄にたつた一つあつた。其點で彼女が腹の中で如何に彼に對する責任を感じてゐるかは、怜俐な津田の見逃す所でなかつた。何事にも夫人の御意を主眼に置いて行動する彼と雖も、暗に此强味丈は

恃みにしてゐた。然しそれはいざといふ萬一の場合に保留された彼の利器に過ぎなかつた。平生の彼は甘んじて猫の前の鼠となつて、先方の思ふ通りにぢやらされてゐなければならなかつた。此際の夫人も中々要點へ來る前に時間を費やした。

「昨日秀子さんが來たでせう。此所へ」

「えゝ。參りました」

「延子さんも來たでせう」

「えゝ」

「今日は？」

「今日はまだ參りません」

「今に入らつしやるんでせう」

津田には何うだか分らなかつた。先刻來るなといふ手紙を出した事も、夫人の前では云へなかつた。返事を受け取らなかつた勝手違も、實は氣に掛つてゐた。

「何うですかしら」

「入らつしやるか、入らつしやらないか分らないの」
「えゝ、よく分りません。多分來ないだらうとは思ふんですが」
「大變冷淡ぢやありませんか」
夫人は嘲けるやうな笑ひ方をした。
「私がですか」
「いゝえ、兩方がよ」
苦笑した津田が口を閉ぢるのを待つて、夫人の方で口を開いた。
「延子さんと秀子さんは昨日此所で落ち合つたでせう」
「えゝ」
「それから何かあつたのね、變な事が」
「別に……」
「空ツ惚けちや不可せん。あつたらあつたと、判然仰しやいな、男らしく」
夫人は漸く持前の言葉遣ひと特色とを、發揮し出した。津田は挨拶に困つた。默つて少し樣子

を見るより外に仕方がないと思つた。
「秀子さんを散々苛めたつて云ふぢやありませんか。二人して」
「そんな事があるものですか。お秀の方が怒つてぷん〳〵腹を立てて歸つて行つたのです」
「さう。然し喧嘩はしたでせう。喧嘩といつたつて毆り合ぢやないけれども」
「それだつてお秀のいふやうな大袈裟なものぢやないんです」
「かも知れないけれども、多少にしろ有つたには有つたんですね」
「そりや一寸した行違なら御座いました」
「其時あなた方は二人掛りで秀子さんを苛めたでせう」
「苛めやしません。あいつが耶蘇教のやうな氣燄を吐いた丈です」
「兎に角貴方がたは二人、向ふは一人だつたに違ないでせう」
「そりや左右かも知れません」
「それ御覽なさい。それが惡いぢやありませんか」
夫人の斷定には意味も理窟もなかつた。從つて何處が惡いんだか津田には一向通じなかつた。

けれども斯ういふ場合に斯んな風になつて出て來る夫人の特色は、決して逆らへないものとして、もう津田の頭に叩き込まれてゐた。素直に叱られてゐるより外に彼の途はなかつた。

「さういふ積でもなかつたんですけれども、自然の勢で、何時かさうなつて仕舞つたんでせう」

「でせうぢや不可せん。ですと判然仰しやい。一體斯ういふと失禮なやうですが、貴方があんまり延子さんを大事になさり過ぎるからよ」

津田は首を傾けた。

百三十三

怜俐な性分に似合はず夫人對お延の關係は津田に能く呑み込めてゐなかつた。夫人に津田の手前があるやうに、お延にも津田に置く氣兼があつたので、それが眞向に双方を了解出來る聰明な彼の頭を曇らせる原因になつた。女の挨拶に相當の割引をして見る彼も、其所にはつい氣が付かなかつたため、彼は自分の前でする夫人のお延評を眞に受けると同時に、自分の耳に聽こえるお延の夫人評も亦疑がはなかつた。さうして其評は双方共に美くしいものであつた。

二人の女性が二人丈で心の内に感じ合ひながら、今迄それを外に現はすまいとのみ力めて來た微妙な軋轢が、必然の要求に逼られて、次第々々に晴れ渡る靄のやうに、津田の前に展開されなければならなくなつたのは此時であつた。

津田は夫人に向つて云つた。

「別段大事にする程の女房でもありませんから、その邊の御心配は御無用です」

「いゝえ左右でないやうですよ。世間ぢやみんな左右思つてますよ」

世間といふ仰山な言葉が津田を驚ろかせた。夫人は仕方なしに説明した。

「世間つて、みんなの事よ」

津田にはそのみんなさへ明瞭に意識する事が出來なかつた。然し世間だのみんなだのといふ誇張した言葉を強める夫人の意味は、決して推察に困難なものではなかつた。彼女は何うしても其點を津田の頭に叩き込まうとする積らしかつた。津田はわざと笑つて見せた。

「みんなつて、お秀の事なんでせう」

「秀子さんは無論其内の一人よ」

「其内の一人でさうして又代表者なんでせう」
「かも知れないわ」
津田は再び大きな聲を出して笑つた。然し笑つた後ですぐ氣が付いた。惡い結果になつて夫人の上に反響して來た其笑ひはもう取り返せなかつた。文句を云はずに伏罪する事の便宜を悟つた彼は、忽ち容ちを改めた。
「兎に角是から能く氣を付けます」
然し夫人はそれでもまだ滿足しなかつた。
「秀子さん許だと思ふと間違ひですよ。貴方の叔父さんや叔母さんも、同なじ考へなんだから其積でゐらつしやい」
「はあ左右ですか」
藤井夫婦の消息が、お秀の口から夫人に傳へられたのも明らかであつた。
「外にもまだあるんです」と夫人が又付け加へた。津田はたゞ「はあ」と云つて相手の顏を見た拍子に、彼の豫期した通りの言葉がすぐ彼女の口から洩れた。

「實を云ふと、私も皆さんと同なじ意見ですよ」
權威ででもあるやうな調子で、最後に斯う云つた夫人の前に、彼は勿論反抗の聲を揚げる勇氣を出す必要を認めなかつた。然し腹の中では同時に妙な思はく違に想ひ到つた。彼は疑つた。
「何で此人が急に斯んな態度になつたのだらう。自分のお延を鄭重に取扱ひ過ぎるのが惡いといつて非難する上に、お延自身をも其非難のうちに含めてゐるのではなからうか」
此疑ひは津田にとつて全く新らしいものであつた。夫人の本意に到着する想像上の過程を描き出す事さへ彼には困難な位新らしいものであつた。彼は此疑問に立ち向ふ前に、まだ自分の頭の中に殘つてゐる一つの質問を掛けた。
「岡本さんでも、そんな評判があるんでせうか」
「岡本は別よ。岡本の事なんか私の關係する所ぢやありません」
夫人が濟まして斯う云ひ切つた時、津田は思はずおやと思つた。「ぢや岡本とあなたの方は別つこだつたんですか」といふ次の問が、自然の順序として、彼の咽喉迄出掛つた。
實を云ふと、彼は「世間」の取沙汰通り、お延を大事にするのではなかつた。誤解交りの此

評判が、何處から何うして起つたかを、他に説明しようとすれば、隨分複雜な手數が掛るにしても、彼の頭の中にはちやんとした明晰な觀念があつて、それを一々掌に指す事の出來る程に、事實の縞柄は解つてゐた。

第一の責任者はお延其人であつた。自分が何の位津田から可愛がられ、又津田を何の位自由にしてゐるかを、最も曲折の多い角度で、あらゆる方面に反射させる手際を到る所に發揮して憚からないものは彼女に違なかつた。第二の責任者はお秀であつた。既に一種の誇張がある彼女の眼を、一種の嫉妬が手傳つて染めた。其嫉妬が何處から出て來るのか津田は知らなかつた。結婚後始めて小姑といふ意味を悟つた彼は、切角悟つた意味を、解釋の出來ないために持て餘した。第三の責任者は藤井の叔父夫婦であつた。此所には誇張も嫉妬もない代りに、浮華に對する嫌惡があまり強く働らき過ぎた。だから結果は矢張り誤解と同じ事に歸着した。

百三十四

津田には此誤解を誤解として通して置く特別な理由があつた。さうしてその理由は既に小林の

看破した通りであつた。だから彼は此誤解から生じ易い岡本の好意を、出來る丈自分の便宜になるやうに保留しようと試みた。お延を鄭寧に取扱ふのは、つまり岡本家の機嫌を取るのと同じ事で、其岡本と吉川とは、兄弟同樣に親しい間柄である以上、彼の未來は、お延を大事にすればする程確かになつて來る道理であつた。利害の論理に拔目のない機敏さを誇りとする彼は、吉川夫妻が表向の媒妁人として、自分達二人の結婚に關係して呉れた事實を、單なる名譽として喜ぶ程の馬鹿ではなかつた。彼は其所に名譽以外の重大な意味を認めたのである。

然し是は寧ろ一般的の內情に過ぎなかつた。もう一皮剝いて奧へ入ると、底にはまだ底があつた。津田と吉川夫人とは、事件が此所へ來る迄に、他人の關知しない因果でもう結び付けられてゐた。彼等に丈特有な內外の曲折を經過して來た彼等は、他人より少し複雜な眼をもつて、半年前に成立した此新らしい關係を眺めなければならなかつた。

有體にいふと、お延と結婚する前の津田は一人の女を愛してゐた。さうして其女を愛させるやうに仕向けたものは吉川夫人であつた。世話好な夫人は、此若い二人を喰つ付けるやうな、又引き離すやうな閑手段を縱まゝに弄して、そのたびに迷兒々々したり、又は逆せ上つたりする二人

を眼の前に見て樂しんだ。けれども津田は固く夫人の親切を信じて疑がはなかつた。夫人も最後に來るべき二人の運命を斷言して憚からなかつた。のみならず時機の熟した所を見計つて、二人を永久に握手させようと企てた。所がいざといふ間際になつて、夫人の自信は見事に鼻柱を挫かれた。津田の高慢も助かる筈はなかつた。夫人の自信と共に一棒に撲殺された。肝心の鳥はふいと逃げたぎり、遂に夫人の手に戻つて來なかつた。

夫人は津田を責めた。津田は夫人を責めた。夫人は責任を感じた。然し津田は感じなかつた。彼は今日迄其意味が解らずに、まだ五里霧中に彷徨してゐた。其所へお延の結婚問題が起つた。夫人は再び第二の戀愛事件に關係すべく立ち上つた。さうして夫と共に、表向の媒妁人として、綺麗な段落を其所へ付けた。

其時の夫人の樣子を細かに觀察した津田は成程と思つた。

「おれに對する賠償の心持だな」

彼は斯う考へた。彼は未來の方針を大體の上に於て此心持から割り出さうとした。お延と仲善く暮す事は、夫人に對する義務の一端だと思ひ込んだ。喧嘩さへしなければ、自分の未來に間違

はあるまいといふ鑑定さへ下した。

斯ういふ心得に萬遺筭のある筈はないと初手から極めて掛つて吉川夫人に對してゐる津田が、たとひ遠廻しにでもお延を非難する相手の匂ひを嗅ぎ出した以上、おやと思ふのは當然であつた。彼は夫人に氣に入るやうに自分の立場を改める前に、先づ確かめる必要があつた。

「私がお延を大事にし過ぎるのが惡いと仰しやる外に、お延自身に何か缺點でもあるなら、御遠慮なく忠告して頂きたいと思ひます」

「實はそれで上つたのよ、今日は」

此言葉を聽いた時、津田の胸は夫人の口から何が出て來るかの好奇心に充ちた。夫人は語を繼いだ。

「是は私でないと面と向つて誰も貴方に云へない事だと思ふから云ひますがね。——お秀さんに智慧を付けられて來たと思つては困りますよ。また後でお秀さんに迷惑を掛けるやうだと、私が濟まない事になるんだから、可ござんすか。そりやお秀さんも其事でわざ／＼來たには違ないのよ。然し主意は少し違んです。お秀さんは重に京都の方を心配してゐるの。無論京都は貴方か

ら云へばお父さんだから、決して疎畧には出來ますまい。ことに良人でもあゝしてお父さんに貴方の世話を賴まれてゐて見ると、默つて放つても置く譯にも行かないでせう。けれどもね、詰り其方は枝で、根は別にあるんだから、私は根から先へ療治した方が遙かに有効だと思ふんです。でないと今度のやうな行違が又屹度出て來ますよ。たゞ出て來る丈なら可ござんすけれども、そのたんびにお秀さんが遣つて來るやうだと、私も口を利くのに骨が折れる丈ですからね」

夫人のいふ禍の根といふのは慥にお延の事に違なかつた。では其根を何うして療治しようといふのか。肉體上の病氣でもない以上、離別か別居を除いて療治といふ言葉は容易く使へるものでもないのにと津田は考へた。

百三十五

津田は已を得ず訊いた。

「要するに何うしたら可いんです」

夫人は此子供らしい質問の前に母らしい得意の色を見せた。けれどもすぐ要點へは來なかつた。

彼女は其所だと云はぬ許にたゞ微笑した。

「一體貴方は延子さんを何う思つてゐらつしやるの」

同じ問が同じ言葉で昨日掛けられた時、お秀に何と答へたかを津田は思ひ出した。彼は夫人に對する特別な返事を用意して置かなかつた。其代り何とでも答へられる自由な地位にあつた。腹藏のない所をいふと、何うなりとあなたの好きなお返事を致しますといふのが彼の胸中であつた。けれども夫人の頭にある其好きな返事は、全く彼の想像の外にあつた。彼はへどもどするうちにやゝ〳〵した。勢ひ夫人は一歩前へ進んで來る事になつた。

「あなたは延子さんを可愛がつてゐらつしやるでせう」

此所でも津田の備へは手薄であつた。彼は冗談半分に夫人をあしらふ事なら幾通でも出來た。然し眞面目に改まつた、責任のある答を、夫人の氣に入る樣な形で與へようとすると、其答は決してさうすら〳〵出て來なかつた。彼に取つて最も都合の好い事で、又最も都合の惡い事は、何方にでも自由に答へられる彼の心の狀態であつた。といふのは、事實彼はお延を愛してもゐたし、又そんなに愛してもゐなかつたからである。

夫人は愈〻眞劍らしく構へた。さうして三度目の質問をのつぴきさせぬ調子で掛けた。
「私と貴方丈の間の秘密にして置くから正直に云つとしまひなさい。私の聽きたいのは何でもないんです。たゞ貴方の思つた通りの所を一口伺へばそれで可いんです」
見當の立たない津田は愈〻迷付いた。夫人は云つた。
「貴方も隨分焦慮つたい方ね。云へる事は男らしく、さつさと云つちまつたら可いでせう。そんな六づかしい事を誰も訊いてゐやしないんだから」
津田はとう〳〵口を開くべく餘儀なくされた。
「お返事が出來ない譯でもありませんけれども、あんまり問題が漠然としてゐるものですから……」
「ぢや仕方がないから私の方で云ひませうか。可ございますか」
「何うぞさう願ひます」
「貴方は」と云ひ掛けた夫人は此時一寸言葉を切つて又繼いだ。
「本當によどざんすか。――あたしは斯ういふ無遠慮な性分だから、よく自分の思つたまゝを

ずば〳〵云つちまつた後で、取り返しの付かない事をしたと後悔する場合が能くあるんですが」
「なに構ひません」
「でも若しか、貴方に怒られると夫つ切りですからね。後でいくら詫まつても追付かないなんて馬鹿はしたくありませんもの」
「然し私の方で何とも思はなければそれで可いでせう」
「そこさへ確かなら無論可いのよ」
「大丈夫です。僞だらうが本當だらうが、奥さんの仰しやる事なら決して腹は立てませんから、遠慮なさらずに云つて下さい」
凡ての責任を向ふに脊負はせてしまふ方が遙かに樂だと考へた津田は、斯う受け合つた後で、催促するやうに夫人を見た。何度となく駄目を押して保險を付けた夫人は其時漸く口を開いた。
「もし間違つたら御免遊ばせよ。貴方はみんなが考へてゐる通り、腹の中ではそれ程延子さんを大事にしてゐらつしやらないでせう。秀子さんと違つて、あたしは疾うからさう睨んでゐるんですが、何うです、あたしの觀測は中りませんかね」

津田は何ともなかつた。
「無論です。だから先刻申し上げたぢやありませんか。そんなにお延を大事にしちやゐませんて」
「然しそれは御挨拶に仰しやつた丈ね」
「いゝえ私は本當の所を云つた積です」
夫人は斷々乎として首肯はなかつた。
「胡麻化しつこなしよ。ぢや後を云つても可ござんすか」
「えゝ何うぞ」
「貴方は延子さんをそれ程大事にしてゐらつしやらない癖に、表では如何にも大事にしてゐるやうに、他から思はれよう思はれようと掛つてゐるぢやありませんか」
「お延がそんな事でも云つたんですか」
「いゝえ」と夫人は切つ張り否定した。「貴方が云つてる丈よ。貴方の樣子なり態度なりがそれ丈の事をちやんとあたしに解るやうにして下さる丈よ」

夫人は其所で一寸休んだ。それから後を付けた。
「何うです中つたでせう。あたしは貴方が何故そんな體裁を作つてゐるんだか、其原因迄ちやんと知つてるんですよ」

百三十六

津田は今日迄斯ういふ種類の言葉をまだ夫人の口から聽いた事がなかつた。自分達夫婦の仲を、夫人が裏側から何んな眼で觀察してゐるだらうといふ問題に就いて、左程神經を遣つてゐなかつた彼は、漸く其所に氣が付いた。そんならさうと早く注意して呉れれば可いのにと思ひながら、彼は兎に角夫人の鑑定なり料簡なりを大人しく結末迄聽くのが上分別だと考へた。
「何うぞ御遠慮なく何でもみんな云つて下さい。私の向後の心得にもなる事ですから」
途中迄來た夫人は、たとひ津田から誘はれないでも、もう其所で止まる譯に行かないので、すぐ殘りのものを津田の前に投げ出した。
「貴方は良人や岡本の手前があるので、それであんなに延子さんを大事になさるんでせう。も

つと露骨なのがお望みなら、まだ露骨にだつて云へますよ。貴方は表向延子さんを大事にする樣な風をなさるのね、内側は其程でなくつても。左右でせう」

津田は相手の觀察が眞逆是程皮肉な點迄切り込んで來てゐやうとは思はなかつた。

「私の性質なり態度なりが奥さんにさう見えますか」

「見えますよ」

津田は一刀で斬られたと同じ事であつた。彼は斬られた後で其理由を訊いた。

「何うして？何うして左右見えるんですか」

「隱さないでも可いぢやありませんか」

「別に隱す積でもないんですが……」

夫人は自分の推定が十の十迄中つたと信じて掛つた。心の中で其六丈を首肯つた津田の挨拶は、自然何處かに曖昧な節を殘さなければならなかつた。それが此場合誤解の種になるのは見易い道理であつた。夫人は何所迄も同じ言葉を繰り返して、津田を自分の好きな方角へのみ追ひ込んだ。

「隱しちや駄目よ。貴方が隱すと後が云へなくなる丈だから」

津田は是非其後を聽きたかつた。其後を聽かうとすれば、夫人の認定を一から十迄承知するより外に仕方がなかつた。夫人は「それ御覽なさい」と津田を遣り込めた後で歩を進めた。

「貴方には天から誤解があるのよ。貴方は私を良人と一所に見てゐるんでせう。それから良人と岡本をまた一所に見てゐるんでせう。それが大間違よ。岡本と良人を一所に見るのはまだしも、私を良人や岡本と一所にするのは可笑いぢやありませんか、此事件に就いて。學問をした方にも似合はないのね貴方も、そんな所へ行くと」

津田は漸く夫人の立場を知る事が出來た。然し其立場の位置及びそれが自分に對して何んな關係になつてゐるのかまだ解らなかつた。夫人は云つた。

「解り切つてるぢやありませんか。私丈は貴方と特別の關係があるんですもの」

特別の關係といふ言葉のうちに、何んな内容が盛られてゐるか、津田には能く解つた。然しそれは目下の問題ではなかつた。何故と云へば、其特別な關係を能く呑み込んでゐればこそ、今日迄の自分の行動にも、それ相當な一種の色と調子を與へて來た積だと彼は信じてゐたのだから。此特別な關係が夫人を何う支配してゐるか、そこをもつと明らかに突き留めた所に、新らしい問

題は始めて起るのだと氣が付いた彼は、たゞ自分の誤解を認める丈では濟まされなかつた。

夫人は一口に云ひ拂つた。

「私は貴方の同情者よ」

津田は答へた。

「それは今迄ついぞ疑つて見た例もありません。私は信じ切つてゐます。さうして其點で深くあなたに感謝してゐるものです。然し何ういふ意味で？何ういふ意味で同情者になつて下さる積なんですか、此場合。私は迂濶ものだから奥さんの意味が能く呑み込めません。だからもつと判然り話して下さい」

「此場合に同情者として私が貴方にして上げる事がたゞ一つあると思ふんです。然し貴方は多分――」

夫人は是丈云つて津田の顔を見た。津田はまた焦らされるのかと思つた。然しさうでないと斷言した夫人の問は急に變つた。

「私の云ふ事を聽きますか、聽きませんか」

津田にはまだ常識が殘つてゐた。彼は此所へ押し詰められた何人も考へなければならない事を考へた。然し考へた通りを夫人の前で公然明言する勇氣はなかつた。勢ひ彼の態度は煮え切らないものであつた。聽くとも聽かないとも云ひかねた彼は躊躇した。

「まあ云つて見て下さい」

「まあぢや不可せん。あなたがもつと判切しなくつちや、私だつて云ふ氣にはなれません」

「だけれども――」

「だけれどもでも駄目よ。聽きますと男らしく云はなくつちや」

百三十七

何んな注文が夫人の口から出るか見當の付かない津田は、ひそかに恐れた。受け合つた後で撤回しなければならないやうな窮地に陷いればそれぎりであつた。彼は其場合の夫人を想像して見た。地位から云つても、性質から見ても、また彼に對する特別な關係から判斷しても、夫人は決して彼を赦す人ではなかつた。永久夫人の前に赦されない彼は、恰も蘇生の活手段を奪はれた假

死の形骸と一般であつた。用心深い彼は生還の望の確としない危地に入り込む勇氣を有たなかつた。

其上普通の人と違つて夫人は何んな難題を持ち出すか解らなかつた。自由の利き過ぎる境遇、そこに長く住み馴れた彼女の眼には、殆んど自分の無理といふものが映らなかつた。云へば大抵の事は通つた。たまに通らなければ、意地で通す丈であつた。ことに困るのは、自分の動機を明瞭に解剖して見る必要に逼られない彼女の餘裕であつた。餘裕といふよりも寧ろ放慢な心の持方であつた。他の世話を燒く時にする自分の行動は、すべて親切と好意の發現で、其外に何の私もないものと、天から極めて掛る彼女に、不安の來る筈はなかつた。自分の批判は殆んど當初から働らかないし、他の批判は耳へ入らず、また耳へ入れやうとするものもないとなると、此所へ落ちて來るのは自然の結果でもあつた。

夫人の前に押し詰められた時、津田の胸に、是丈の考へが蜿蜒り廻つたので、埒は益開かなかつた。彼の樣子を見た夫人は、遂に笑ひ出した。

「何をそんなに六づかしく考へてるんです。大方私が又無理でも云ひ出すんだと思つてるんで

せう。なんぼ私だつて貴方に出來つこないやうな不法は考へやしませんよ。あなたが遣らうとさへ思へば、譯なく出來る事なんです。さうして結果は貴方の得になる丈なんです」

「そんなに雜作なく出來るんですか」

「えゝまあ笑談見たいなものです。ごくごく大袈裟に云つた所で、面白半分の惡戯よ。だから思ひ切つて遣ると仰しやい」

津田には凡てが謎であつた。けれども高が惡戯ならといふ氣が漸く彼の腹に起つた。彼は遂に決心した。

「何だか知らないがまあ遣つて見ませう。話して見て下さい」

然し夫人はすぐ其惡戯の性質を說明しなかつた。津田の保証を摑んだ後で、また話題を變へた。所がそれは、あらゆる意味で惡戯とは全く懸け離れたものであつた。少くとも津田には重大な關係を有つてゐた。

夫人は下のやうな言葉で、まづそれを二人の間に紹介した。

「貴方は其後清子さんにお會ひになつて」

「いゝえ」
津田の少し吃驚したのは、たゞ問題の唐突な許ではなかつた。不意に自分を振り棄てた女の名が、逃がした責任を半分背負つてゐる夫人の口から急に洩れたからである。夫人は語を繼いだ。
「ぢや今何うしてゐらつしやるか、御存知ないでせう」
「丸で知りません」
「丸で知らなくつて可いの」
「可くないつたつて仕方がないぢやありませんか。もう餘所へ嫁に行つてしまつたんだから」
「清子さんの結婚の御披露の時に貴方はお出になつたんでしたかね」
「行きません。行かうたつて一寸行き惡いですからね」
「招待狀は來たの」
「招待狀は來ました」
「貴方の結婚の御披露の時に、清子さんは入らつしやらなかつたやうね」
「えゝ來やしません」

「招待狀は出したの」
「招待狀丈は出しました」
「ぢやそれつ切なのね、兩方共」
「無論それつ切です。もしそれつ切でなかつたら問題ですもの」
「さうね。然し問題にも寄り切りでせう」
津田には夫人の云ふ意味が能く解らなかつた。夫人はそれを說明する前に又外の道へ移つた。
「一體延子さんは清子さんの事を知つてるの」
津田は塞へた。小林を研究し盡した上でなければ確とした返事は與へられなかつた。夫人は再び訊き直した。
「貴方が自分で話した事はなくつて」
「ありやしません」
「ぢや延子さんは丸で知らずにゐるのね、あの事を」
「えゝ、少くとも私からは何にも聽かされちやゐません」

「さう。ぢや全く無邪氣なのね。それとも少しは癇附いてゐる所があるの」
「さうですね」
津田は考へざるを得なかつた。考へても斷案は控へざるを得なかつた。

百三十八

話してゐるうちに、津田は又思ひ掛けない相手の心理に突き當つた。今迄清子の事をお延に知らせないで置く方が、自分の都合でもあり、また夫人の意志でもあるとばかり解釋して疑はなかつた彼は、此時始めて氣が付いた。夫人は何う考へてもお延にそれを氣どつてゐて貰ひたいらしかつたからである。
「大抵の見當は付きさうなものですがね」と夫人は云つた。津田はお延の性質を知つてゐる丈に猶答へ惡くなつた。
「其所が分らないと不可いんですか」
「えゝ」

津田は何故だか知らなかつた。けれども答へた。
「もし必要なら話しても好ござんすが……」
夫人は笑ひ出した。
「今更貴方がそんな事をしちや打ち壞しよ。貴方は仕舞迄知らん顏をしてゐなくつちや」
夫人は是丈云つて、言葉に區切を付けた後で、新たに出直した。
「私の判斷を云ひませうか。延子さんはあゝいふ怜俐な方だから、もう屹度感づいてゐるに違ないと思ふのよ。何、みんな判る筈もないし、又みんな判つちや此方が困るんです。判つたやうで又判らないやうなのが、丁度持つて來いといふ一番結構な頃合なんですからね。そこで私の鑑定から云ふと、今の延子さんは、都合よく私のお誂へ通りの所にゐらつしやるに違ないのよ」
津田は「左右ですか」といふより外に仕方がなかつた。然しさういふ結論を夫人に與へる材料は殆んどなからうにと、腹の中では思つた。然るに夫人はあると云ひ出した。
「でなければ、あゝ虛勢を張る譯がありませんもの」
お延の態度を虛勢と評したのは、夫人が始めてゞあつた。此二字の前に怪訝な思ひをしなけれ

ばならなかつた津田は、一方から見て、また其皮肉を第一に首肯はなければならない人であつた。それにも拘はらず彼は躊躇なしに應諾を與へる事が出來なかつた。夫人はまた事もなげに笑つた。

「なに構はないのよ。萬一全く氣が付かずにゐるやうなら、其時は又其時で此方にいくらでも手があるんだから」

津田は默つて其後を待つた。すると後は出ずに、急に清子の方へ話が逆轉して來た。

「貴方は清子さんにまだ未練がおありでせう」

「ありません」

「ちつとも？」

「ちつともありません」

「それが男の嘘といふものです」

嘘を云ふ積でもなかつた津田は、全然本當を云つてゐるのでもないといふ事に氣が付いた。

「是でも未練があるやうに見えますか」

「そりや見えないわ、貴方」

「ぢや何うしてさう鑑定なさるんです」

「だからよ。見えないからさう鑑定するのよ」

夫人の論議は普通のそれと丸で反對であつた。と云つて、支離滅裂は何處にも含まれてゐなかつた。彼女は得意にそれを引き延ばした。

「外の人には外側も內側も同なじとしか見えないでせう。然し私には外側へ出られないから、仕方なしに未練が內へ引込んでゐるとしか考へられませんもの」

「奧さんは初手から私に未練があるものとして、極めて掛つてゐらつしやるから、さう仰しやるんでせう」

「極めて掛るのに何處に無理がありますか」

「さう勝手に認定されてしまつちや堪りません」

「私がいつ勝手に認定しました。私のは認定ぢやありませんよ。事實ですよ。貴方と私丈に知れてゐる事實を云ふのですよ。事實ですもの、それをちやんと知つてる私に隱せる譯がないぢやありませんか、いくら外の人を騙す事が出來たつて。それもあなた丈の事實ならまだしも、二人

に共通な事實なんだから、兩方で相談の上、何處かへ埋めちまはないうちは、記憶のある限り、消えつこないでせう」

「ぢや相談づくで此所で埋めちや何うです」

「何故埋めるんです。埋める必要が何處かにあるんですか。それより何故それを活かして使はないんです」

「活かして使ふ？私は是でもまだ罪惡には近寄りたくありません」

「罪惡とは何です。そんな手荒な事をしろと私が何時云ひました」

「然し……」

「貴方はまだ私の云ふ事を仕舞迄聽かないぢやありませんか」

津田の眼は好奇心をもつて輝やいた。

百三十九

夫人はもう未練のある証據を眼の前に突き付けて津田を抑へたと同じ事であつた。自白後に等

しい彼の態度は二人の仕合に一段落を付けたやうに夫人を強くした。けれども彼女は津田が最初に考へた程此點に於て獨斷的な暴君ではなかつた。彼女は思つたより細緻な注意を拂つて、津田の心理狀態を觀察してゐるらしかつた。彼女は其實劵を、一旦勝つた後で彼に示した。

「たゞ未練々々つて、雲を摑むやうな騷ぎを遣るんぢやありませんよ。私には私で又ちやんと握つてる所があるんですからね。是でも貴方の未練を斯んなものだといつて他に說明する事が出來る積でゐるんですよ」

津田には何が何だか薩張譯が解らなかつた。

「一寸說明して見て下さいませんか」

「お望みなら說明しても可ございます。けれどもさうすると詰り貴方を說明する事になるんですよ」

「えゝ構ひません」

夫人は笑ひ出した。

「さう他の云ふ事が通じなくつちや困るのね。現在自分がちやんと其所に控へてゐながら、其

自分が解らないで、他に説明して貰ふなんてえのは馬鹿氣てゐるぢやありませんか」
果して夫人の云ふ通りなら馬鹿氣てゐるに違なかつた。津田は首を傾けた。
「然し解りませんよ」
「いゝえ解つてるのよ」
「ぢや氣が付かないんでせう」
「いゝえ氣も付いてゐるのよ」
「ぢや何うしたんでせう。——つまり私が隱してゐる事にでも歸着するんですか」
「まあ左右よ」
津田は投げ出した。此所迄追ひ詰められながら、まだ隱し立をしようとは流石の自分にも道理と思へなかつた。
「馬鹿でも仕方がありません。馬鹿の非難は甘んじて受けますから、何うぞ説明して下さい」
夫人は微かに溜息を吐いた。
「あゝあゝ張合がないのね、それぢや。折角私が丹精して拵へて來て上げたのに、肝心の貴方

がそれぢや、丸で無駄骨を折つたと同然ね。一層何にも話さずに歸らうか知ら」
津田は迷宮に引き込まれる丈であつた。引き込まれると知りながら、彼は夫人の後を追懸けなければならなかつた。其所には自分の好奇心が強く働いた。夫人に對する義理と氣兼も、決して輕い因子ではなかつた。彼は何度も同じ言葉を繰り返して夫人の説明を促がした。
「ぢや云ひませう」と最後に應じた時の夫人の樣子は寧ろ得意であつた。「其代り訊きますよ」と斷つた彼女は、果して劈頭に津田の毒氣を拔いた。
「貴方は何故清子さんと結婚なさらなかつたんです」
問は不意に來た。津田は俄かに息塞つた。默つてゐる彼を見た上で夫人は言葉を改めた。
「ぢや質問を易へませう。——清子さんは何故貴方と結婚なさらなかつたんです」
今度は津田が響の聲に應ずる如くに答へた。
「何故だか些とも解らないんです。たゞ不思議なんです。いくら考へても何にも出て來ないんです」
「突然關さんへ行つちまつたのね」

「えゝ、突然。本當を云ふと、突然なんてものは疾の昔に通り越してゐましたね。あつと云つて後を向いたら、もう結婚してゐたんです」
「誰があつと云つたの」
此質問程津田に取つて無意味なものはなかつた。誰があつと云はうと餘計なお世話としか彼には見えなかつた。然るに夫人は其所へ留まつて動かなかつた。
「あなたがあつと云つたんですか。清子さんがあつと云つたんですか。或は兩方であつと云つたんですか」
「さあ」
津田は已むなく考へさせられた。夫人は彼より先へ出た。
「清子さんの方は平氣だつたんぢやありませんか」
「さあ」
「さあぢや仕方がないわ、貴方。貴方には何う見えたのよ、其時の清子さんが。平氣には見えなかつたの」

「何うも平氣のやうでした」
夫人は輕蔑の眼を彼の上に向けた。
「隨分氣樂ね、貴方も。清子さんの方が平氣だつたから、貴方があつと云はせられたんぢやありませんか」
「或は左右かも知れません」
「そんなら其時のあつの始末は何う付ける氣なの」
「別に付けようがないんです」
「付けようがないけれども、實は付けたいんでせう」
「えゝ。だから色々考へたんです」
「考へて解つたの」
「解らないんです。考へれば考へる程解らなくなる丈なんです」
「それだから考へるのはもう已めちまつたの」
「いゝえ矢張り已められないんです」

「ぢや今でもまだ考へてるのね」
「さうです」
「それ御覽なさい。それが貴方の未練ぢやありませんか」
夫人はとう〳〵津田を自分の思ふ所へ押し込めた。

百四十

準備は畧出來上つた。要點はそろ〳〵津田の前に展開されなければならなかつた。夫人は機を見て次第に其所へ入つて行つた。
「そんならもつと男らしくしちや何うです」といふ漠然たる言葉が、最初に夫人の口を出た。其時津田は又かと思つた。先刻から「男らしくしろ」とか「男らしくない」とかいふ文句を聽かされる度に、彼は心の中で暗に夫人を冷笑した。夫人の男らしいといふ意味は果して何處にあるのだらうと疑ぐつた。批判的な眼を拭つて見る迄もなく、彼女は自分の都合ばかりを考へて、津田を遣り込めるために、勝手な所へ矢鱈に此言葉を使ふとしか解釋出來なかつた。彼は苦笑しな

がら訊いた。
「男らしくするとは？——何うすれば男らしくなれるんですか」
「貴方の未練を晴す丈でさあね。分り切つてるぢやありませんか」
「何うして」
「全體何うしたら晴されると思つてるんです、貴方は」
「そりや私には解りません」
夫人は急に勢ひ込んだ。
「貴方は馬鹿ね。その位の事が解らないで何うするんです。會つて訊く丈ぢやありませんか」
津田は返事が出來なかつた。會ふのがそれ程必要にした所で、何んな方法で何處で何うして會ふのか。その方が先決問題でなければならなかつた。
「だから私が今日わざ〳〵此所へ來たんぢやありませんか」と夫人が云つた時、津田は思はず彼女の顏を見た。
「實は疾うから、貴方の料簡をよく伺つて見たいと思つてた所へね、今朝お秀さんがあの事で

來たもんだから、それで丁度好い機會だと思つて出て來たやうな譯なんですがね」
腹に支度の整はない津田の頭はたゞ迷兒〳〵する丈であつた。夫人はそれを見澄して斯ういつた。
「誤解しちや不可せんよ。私は私、お秀さんはお秀さんなんだから。何もお秀さんに賴まれて來たからつて、屹度あの方の肩ばかり持つとは限らない位は、貴方にだつて解るでせう。先刻も云つた通り、私は是でも貴方の同情者ですよ」
「えゝそりや能く心得てゐます」
此所で問答に一區切を付けた夫人は、時を移さず要點に達する第二の段落に這入り込んで行つた。
「清子さんが今何處にゐらつしやるか、貴方知つてらつしつて」
「關の所にゐるぢやありませんか」
「そりや不斷の話よ。私のいふのは今の事よ。今何處にゐらつしやるかつていふのよ。東京か東京でないか」

「存じません」
「中てゝ御覽なさい」
津田は中つ子をしたつて詰らないといふ風をして默つてゐた。すると思ひ掛けない場所の名前が突然夫人の口から點出された。一日掛りで東京から行かれる可なり有名な其溫泉場の記憶は、津田に取つても夫程舊いものではなかつた。急に其邊の景色を思ひ出した彼は、たゞ「へえゝ」と云つたぎり、後をいふ智惠が出なかつた。
夫人は津田のために親切な說明を加へて呉れた。彼女の云ふ所によると、目的の人は靜養のため、當分其所に逗留してゐるのであつた。夫人は何で靜養が其人に必要であるかをさへ知つてゐた。流產後の身體を回復するのが主眼だと云つて聽かせた夫人は、津田を見て意味ありげに微笑した。津田は腹の中で畧其微笑を解釋し得たやうな氣がした。けれどもそんな事は、夫人に取つても彼に取つても、目前の問題ではなかつた。一口の批評を加へる氣にもならなかつた彼は、默つて夫人の聽き手になる積で大人しくしてゐた。同時に夫人は第三の段落に飛び移つた。
「貴方も入らつしやいな」

津田の心は此言葉を聽く前から既に搖いてゐた。然し行かうといふ決心は、此言葉を聽いた後でも付かなかつた。夫人は一煽りに煽つた。

「入らつしやいよ。行つたつて誰の迷惑になる事でもないぢやありませんか。行つて澄ましてゐれば夫迄でせう」

「それは左右です」

「貴方は貴方で始めつから獨立なんだから構つた事はないのよ。遠慮だの氣兼だのつて、なまじ餘計なものを荷にし出すと、事が面倒になる丈ですわ。それに貴方の病氣には、此所を出た後で、あゝいふ所へ一寸行つて來る方が可いんです。私に云はせれば、病氣の方丈でも行く必要は充分あると思ふんです。だから是非入らつしやい。行つて天然自然來たやうな顏をして澄ましてゐるんです。さうして男らしく未練の片を付けて來るんです」

夫人は旅費さへ出して遣ると云つて津田を促がした。

百四十一

旅費を貰つて、勤向の都合を付けて貰つて、病後の身體を心持の好い溫泉場で靜養するのは、誰に取つても望ましい事に違なかつた。ことに自己の快樂を人間の主題にして生活しようとする津田には滅多にない誂へ向きの機會であつた。彼に云はせると、見す〳〵それを取り外すのは愚の極であつた。然し此場合に附帶してゐる一種の條件は決して尋常のものではなかつた。彼は顧慮した。

彼を引き留める心理作用の性質は一目瞭然であつた。けれども彼は其働きの顯著な力に氣が付いてゐる丈で、其意味を返照する遑がなかつた。此點に於ても夫人の方が、彼自身よりも却つて確かりした心理の觀察者であつた。二つ返事で斷行を誓ふと思つた津田の何處か澁つてゐる樣子を見た夫人は斯う云つた。

「貴方は内心行きたがつてる癖に、もぢ〳〵してゐらつしやるのね。それが私に云はせると、男らしくない貴方の一番惡い所なんですよ」

男らしくないと評されても大した苦痛を感じない津田は答へた。

「左右かも知れませんけれども、少し考へて見ないと……」

「其考へる癖が貴方の人格に祟つて來るんです」
津田は「へえ？」と云つて驚ろいた。夫人は澄ましたものであつた。
「女は考へやしませんよ。そんな時に」
「ぢや考へる私は男らしい譯ぢやありませんか」
此答へを聽いた時、夫人の態度が急に嶮しくなつた。
「そんな生意氣な口應へをするもんぢやありません。言葉丈で他を遣り込めれば何處が何うしたといふんです、馬鹿らしい。貴方は學校へ行つたり學問をしたりした方の癖に、丸で自分が見えないんだからお氣の毒よ。だから畢竟清子さんに逃げられちまつたんです」
津田は又「えツ？」と云つた。夫人は構はなかつた。
「貴方に分らなければ、私が云つて聽かせて上げます。貴方が何故行きたがらないか、私にはちやんと分つてるんです。貴方は臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」
「左右ぢやありません。私は……」
「お待ちなさい。——貴方は勇氣はあるといふ氣なんでせう。然し出るのは見識に拘はるといふんでせう。私から云へば、さう見識ばるのが取りも直さず貴方の臆病な所なんですよ、好ござんすか。何故と云つて御覽なさい。そんな見識はたゞの見榮ぢやありませんか。能く云つた所で、上つ面の體裁ぢやありませんか。世間に對する手前と氣兼を引いたら後に何が殘るんです。花嫁さんが誰も何とも云はないのに、自分で極りを惡くして、三度の御飯を控へるのと同なじ事よ」
津田は呆氣に取られた。夫人の小言はまだ續いた。
「つまり色氣が多過ぎるから、そんな入らざる所に我を立てゝ見たくなるんでせう。さうしてそれが貴方の己惚に生れ變つて變な所へ出て來るんです」
津田は仕方なしに默つてゐた。夫人は容赦なく一歩進んで其己惚を說明した。
「貴方は何時迄も品よく默つてゐようといふんです。ぢつと動かずに濟まさうとなさるんです。それでゐて內心ではあの事が始終苦になるんです。そこをもう少し押して御覽なさいな。おれが斯うしてゐるうちには、今に清子の方から何か說明して來るだらう來るだらうと思つて——」
「そんな事を思つてるもんですか、なんぼ私だつて」
「いえ、思つてゐるのと同なじだといふのです。實際何處にも變りがなければ、さう云はれた

つて仕様がないぢやありませんか」
津田にはもう反抗する勇氣がなかつた。機敏な夫人は其所へ付け込んだ。
「一體貴方は圖迂々々しい性質ぢやありませんか。さうして圖迂々々しいのも世渡りの上ぢや一徳だ位に考へてゐるんです」
「まさか」
「いえ、左右です。其所がまだ私に解らないと思つたら、大間違です。好いぢやありませんか、圖迂々々しいで、私は圖迂々々しいのが好きなんだから。だから此所で持前の圖迂々々しい所を男らしく充分發揮なさいな。そのために私が折角骨を折つて拵へて來たんだから」
「圖迂々々しさの活用ですか」と云つた津田は言葉を改めた。
「あの人は一人で行つてるんですか」
「無論一人です」
「關は？」
「關さんは此方よ。此方に用があるんですもの」

津田は漸く行く事に覺悟を極めた。

百四十二

然し夫人と津田の間には結末の付かないまだ一つの問題が殘つてゐた。二人は其所を振り返らないで話を切り上げる譯に行かなかつた。夫人が踵を回らさないうちに、津田は歸つた。
「それで私が行くとしたら、何うなるんです、先刻仰しやつた事は」
「其所です。其所を今云はうと思つてゐたのよ。私に云はせると、是程好い療治はないんですがね。何うでせう、貴方のお考へは」
津田は答へなかつた。夫人は念を押した。
「解つたでせう。後は云はなくつても」
夫人の意味は説明を待たないでも畧津田に呑み込めた。然しそれを何んな風にして、お延の上に影響させる積なのか、其所へ行くと彼には確とした觀念がなかつた。夫人は笑ひ出した。
「貴方は知らん顔をしてゐれば可いんですよ。後は私の方で遣るから」

「左右ですか」と答へた津田の頭には疑惑があつた。後を擧げて夫人に一任するとなると、お延の運命を他人に委ねると同じ事であつた。多少夫人の手腕を恐れてゐる彼は危ぶんだ。何をされるか解らないといふ掛念に制せられた。

「お任せしても可いんですが、手段や方法が解つてゐるなら伺つて置く方が便利かと思ひます」

「そんな事は貴方が知らないでも可いのよ。まあ見て入らつしやい、私がお延さんをもつと奥さんらしい奥さんに屹度育て上げて見せるから」

津田の眼に映るお延は無論不完全であつた。けれども彼の氣に入らない缺點が、必ずしも夫人の難の打ち所とは限らなかつた。それをちやんぽんに混同してゐるらしい夫人は、少くとも自分に都合の可いお延を鍛へ上げる事が、卽ち津田のために最も適當な細君を作り出す所以だと誤解してゐるらしかつた。それのみか、もう一歩夫人の胸中に立ち入つて、其眞底を探ると、飛んでもない結論になるかも知れなかつた。彼女はたゞお延を好かないために、ある手段を拵へて、相手を苛めに掛るのかも分らなかつた。氣に喰はない丈の根據で、敵を打ち懲らす方法を講じてゐるのかも分らなかつた。幸に自分で其所を認めなければならない程に、世間からも已れからも反

省を強ひられてゐない境遇にある彼女は、氣樂であつた。お延の教育。――斯ういふ言葉が臆面なく彼女の口を洩れた。夫人とお延の間柄を、内面から看破る機會に出會つた事のない津田には又其言葉を疑ふ資格がなかつた。彼は大體の上で夫人の實意を信じて掛つた。然し實意の作用に至ると、勢ひ危惧の念が伴なはざるを得なかつた。

「心配する事があるもんですか。細工はりう〳〵仕上を御覽うじろつて云ふぢやありませんか」

いくら津田が訊いても詳しい話しをしなかつた夫人は、斯んな高を括つた挨拶をした後で、敎へるやうに津田に云つた。

「あの方は少し已惚れ過ぎてる所があるのよ。それから内側と外側がまだ一致しないのね。上部は大變鄭寧で、お腹の中は確かりし過ぎる位確かりしてゐるんだから。それに利巧だから外へは出さないけれども、あれで中々慢氣が多いのよ。だからそんなものを皆んな取つちまはなくつちや……」

夫人が無遠慮な評をお延に加へてゐる最中に、階子段の中途で足を止めた看護婦の聲が二人の耳に入つた。

「吉川の奥さんへ堀さんと仰やる方から電話で御座います」
夫人は「はい」と應じてすぐ立つたが、敷居の所で津田を顧みた。
「何の用でせう」
津田にも解らなかつた其用を足すために下へ降りて行つた夫人は、すぐ又上つて來ていきなり云つた。
「大變大變」
「何が？何うかしたんですか」
夫人は笑ひながら落付いて答へた。
「秀子さんがわざ〳〵注意して吳れたの」
「何をです」
「今迄延子さんが秀子さんの所へ來て話してゐたんですつて。歸りに病院の方へ廻るかも知れないから、一寸お知らせするつて云ふのよ。今秀子さんの門を出た許の所だつて。――まあ好かつた。惡口でも云つてる所へ來られやうもんなら、大耻を搔かなくつちやならない」

一旦坐つた夫人は、間もなくまた立つた。
「ぢや私はもうお暇にしますからね」
斯んな打ち合せをした後でお延の顏を見るのは、彼女に取つても極りが好くないらしかつた。
「入らつしやらないうちに、早く退却しませう。何うぞよろしく」
一言の挨拶を彼女に殘したまゝ、夫人はついに病室を出た。

百四十三

此時お延の足は既に病院に向つて動いてゐた。
堀の宅から醫者の所へ行くには、門を出て一二丁町東へ歩いて、其所に丁字形を描いてゐる大きな往來を又一つ向ふへ越さなければならなかつた。彼女が此曲り角へ掛つた時、北から來た一台の電車が丁度彼女の前、方角から云へば少し筋違の所で留つた。何氣なく首を上げた彼女は見るともなしに此所側の窓を見た。すると窓硝子を通して映る乘客の中に一人の女がゐた。位地の關係から、お延はたゞ其女の横顏の半分若くは三分一を見た丈であつたが、見た丈ですぐはつと

思つた。吉川夫人ぢやないかといふ氣が忽ち彼女の頭を刺戟したからである。

電車はぢきに動き出した。お延は自分の物色に滿足な時間を與へずに走り去つた其後影を少時見送つたあとで、通りを東側へ横切つた。

彼女の歩く往來はもう横町丈であつた。其邊の地理に詳しい彼女は、幾何かの小路を右へ折れたり左へ曲つたりして、一番近い道をはやく病院へ行き着く積であつた。けれども電車に會つた後の彼女の足は急に重くなつた。距離にすればもう二三丁といふ所迄來た時、彼女は病院へ寄らずに、一旦宅へ歸らうかと思ひ出した。

彼女の心は堀の門を出た折から既に重かつた。彼女は無暗にお秀を突ツ付いて、却つて遣り損なつた不快を胸に包んでゐた。そこには大事を明らさまに握る事が出來ずに、裏からわざ〳〵匂はせられた羽痒ゆさがあつた。なまじいそれを嗅ぎ付けた不安の色も、前よりは一層濃く染め付けられた丈であつた。何よりも先だつのは、此方の弱點を見拔かれて、逆まに相手から翻弄されはしなかつたかといふ疑惑であつた。

お延はそれ以上にまだ斂い氣を遠くの方迄廻してゐた。彼女は自分に對して仕組まれた謀計が、

內密に何處かで進行してゐるらしいと迄癇付いた。主謀者は誰にしろ、お秀が其一人である事は確であつた。吉川夫人が關係してゐるのも明かに推測された。――斯う考へた彼女は急に心細くなつた。知らないうちに重圍のうちに自分を見出した孤軍のやうな心境が、遠くから彼女を襲つて來た。彼女は周圍を見廻した。然し其所には夫を除いて依りになるものは一人もゐなかつた。彼女は何を置いてもまづ津田に走らなければならなかつた。其津田を疑ぐつてゐる彼女にも、まだ信力は殘つてゐた。如何な事があらうとも、夫丈は共謀者の仲間入はよもしまいと念じた彼女の足は、堀の門を出るや否や、ひとりでにすぐ病院の方へ向いたのである。

その心理作用が今喰ひ留められなければならなくなつた時、通りで會つた電車の影をお延は腹の底から呪つた。もし車中の人が吉川夫人であつたとすれば、もし吉川夫人が津田の所へ見舞に行つたとすれば、もし見舞に行つた序に、――。如何に怜俐なお延にも考へる自由の與へられてゐない其後は容易に出て來なかつた。けれども結果は一つであつた。彼女の頭は急にお秀から、吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つた。彼女は何がなしに、此三人を巴のやうに眺め始めた。

「ことによると三人は自分に感じさせない一種の電氣を通はせ合つてゐるかも知れない」
今迄避難場の積で夫の所へ駈け込まうとばかり思つてゐた彼女は考へざるを得なかつた。
「此分ぢや、たゞ行つたつて不可い。行つて何うしよう」
彼女は何うしようといふ分別なしに歩いて來た事に氣が付いた。すると何んな態度で、何んな風に津田に會ふのが、此場合最も有効だらうといふ問題が、左も重要らしく彼女に見え出して來た。夫婦の癖に、そんな餘所行の支度なんぞして何になるといふ非難を何處にも聽かなかつたので、一旦宅へ歸つて、能く氣を落ち付けて、それから又出直すのが一番の上策だと思ひ極めた彼女は、遂にもう五六分で病院へ行き着かうといふ小路の中程から取つて返した。さうして柳の木の植つてゐる大通りから賑やかな往來迄歩いてすぐ電車へ乘つた。

百四十四

お延は日のとぼ／＼頃に宅へ歸つた。電車から降りて一丁程の所を、身に染みるやうな夕暮の靄に包まれた後の彼女には、何よりも火鉢の傍が戀しかつた。彼女はコートを脱ぐなりまづ其所

へ坐つて手を翳した。
然し彼女には殆んど一分の休憩時間も與へられなかつた。坐るや否や彼女はお時の手から津田の手紙を受け取つた。手紙の文句は固より簡單であつた。彼女は封を切る手數と殆んど同じ時間で、それを讀み下す事が出來た。けれども讀んだ後の彼女は、もう讀む前の彼女ではなかつた。僅か三行ばかりの言葉は一冊の書物より強く彼女を動かした。一度に外から持つて歸つた氣分に火を點けた其書翰の前に彼女の心は躍つた。
「今日病院へ來て不可いといふ意味は何處にあるだらう」
それでなくつても、もう一遍出直す筈であつた彼女は、時間に關ふ餘裕さへなかつた。彼女は台所から膳を運んで來たお時を驚ろかして、すぐ立ち上がつた。
「御飯は歸つてからにするよ」
彼女は今脱いだばかりのコートを又羽織つて、門を出た。然し電車通り迄歩いて來た時、彼女の足は、又小路の角で留まつた。彼女は何故だか病院へ行くに堪へないやうな氣がした。此樣子では行つた所で、役に立たないといふ思慮が不意に彼女に働らき掛けた。

「夫の性質では、とても卒直に此手紙の意味さへ説明しては呉れまい」

彼女は心細くなつて、自分の前を右へ行つたり左へ行つたりする電車を眺めてゐた。其電車を右へ利用すれば病院で、左へ乘れば岡本の宅であつた。いつそ當初の計畫をやめて、叔父の所へでも行かうかと考へ付いた彼女は、考へ付くや否や、すぐ其方面に横はる困難をも想像した。岡本へ行つて相談する以上、彼女は打ち明け話をしなければならなかつた。今迄隱してゐた夫婦關係の奥底を、曝け出さなければ、一歩も前へ出る譯には行かなかつた。叔父と叔母の前に、自分の眼が利かなかつた自白を綺麗にしなければならなかつた。お延はまだそれ程の耻を忍ぶ迄に事件は逼つてゐないと考へた。復活の見込が充分立たないのに、醉興で自分の虚榮心を打ち殺すやうな正直は、彼女の最も輕蔑する所であつた。

彼女は決しかねて右と左へ少しづつ揺れた。彼女が斯んなに迷つてゐるとは丸で氣の付かない津田は、此時床の上に起き上つて、平氣で看護婦の持つて來た膳に向ひつゝあつた。先刻お秀から電話の掛つた時、既にお延の來訪を豫想した彼は、吉川夫人と入れ代りに細君の姿を病室に見るべく、暗に心の調子を整へてゐた所が、其細君は途中から引き返してしまつたので、輕い失望の

間に、夕食の時間が來る迄、待ち草臥れた所爲か、看護婦の顔を見るや否や、すぐ話し掛けた。

「漸く飯か。何うも一人でゐると日が長くつて困るな」

看護婦は體の小さい血色の好くない女であつた。然し年頃は何うしても津田に鑑定の付かない妙な顔をしてゐた。何時でも白い服を着けてゐるのが、猶更彼女を普通の女の群から遠ざけた。津田はつねに疑つた。——此人が通常の着物を着る時に、まだ肩上を付けてゐるだらうか、又は除つてゐるだらうか。彼はいつか眞面目に斯んな質問を彼女に掛けて見た事があつた。其時彼女はにやりと笑つて、「私はまだ見習です」と答へたので、津田は大凡の見當を立てた位であつた。

膳を彼の枕元へ置いた彼女はすぐ下へ降りなかつた。

「御退屈さま」と云つて、にや〳〵笑つた彼女は、すぐ後を付け足した。

「今日は奥さんはお見えになりませんね」

「うん、來ないよ」

津田の口の中にはもう焦げた麵麭が一杯入つてゐた。彼はそれ以上何も云ふ事が出來なかつた。然し看護婦の方は自由であつた。